

UFOと宇宙

1974

隔月刊 2月号 NO. **4**

コスモ

日本にも宇宙からの訪問があった!?
日本古来の天空人出現説考

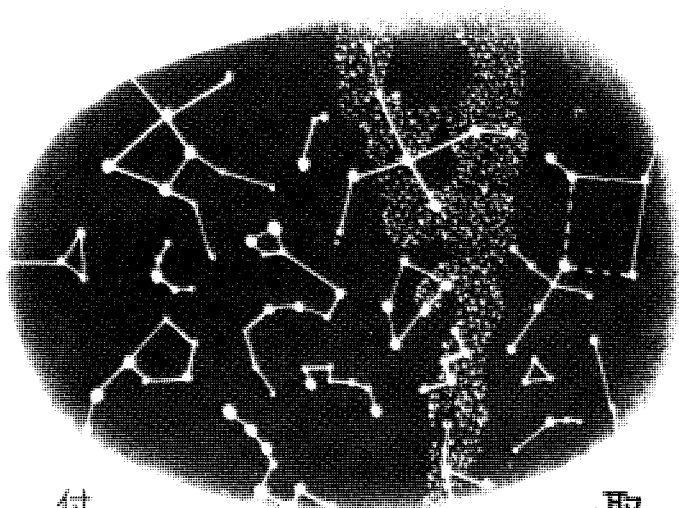
アルゼンチンの
驚くべき瞬間遠隔移動
〈天空と大地〉科学シリーズ(2)

●空飛ぶ円盤は存在する
連載＝神々の戦車(4)



木枯しのあとの銀河は、ますます冴えて

天の川は国によってそれぞれ呼び名がちがいます。中国では銀河、スウェーデンでは凍るような冬の天上を亡き魂が渡っていくとして「冬の道」と呼ばれています。火星という赤いスターの大接近も去って、又静かな星空に戻りました。冬の夜は、炉ばたで銀河にまつわる楽しい話で過してはいかが



取扱商品

天体望遠鏡

地上望遠鏡

双眼鏡

顕微鏡

拡大鏡

カメラ部品及び

交換レンズ類

付属品及び部品類

※総合カタログ 8大メーカー・セットカタログ
ご希望の方は、切手180円を同封して
お申し込みください

※カタログで比較検討してご発注ください

※送料、荷造費、全国どこでも無料

※1年間完全保証

取扱メーカー

旭光学
アストロ
エイコー
カートリ

Kenko
五臓光学
ニコン
ミザール

光学器通信販売
のお知らせ

Fuji

の光学器は国内一流ブランド品を豊富に取り揃えて、どこよりもお求めやすいように、お客さまのご要望に応じております。

●お問合せはフジメガネ光学部 K 係へ



FUJIMEGANE

●1年間完全保証

〒150 東京都渋谷区道玄坂2-29-7 道玄坂センタービル1F ☎東京03(464)4556

UFOと宇宙

目次

<ロ絵写真> メルボルン郊外の円盤
秋田県鹿角市のUFO/世田谷の円盤
ジョージア州のUFO
琵琶湖上空の円盤

日本にも宇宙からの訪問があった!?

科学評論家 齊藤守弘

日本古来の天空人出現説考 (1) 6

ドラギニャンに出た円盤 —— 円盤が一定地域によく出現する実例
ジャン・シャセーヌ/フランソワ・モル 21

パプア島の円盤騒動(II) ノーマン・E・G・クラットウェル神父 28

アルゼンチンの テレポーテーション
驚くべき瞬間遠隔移動 アルゼンチンUFO研究会々長
オスカー・A・ガリンデス 40

1966年のウッドストックUFO祭典(3) バートルド・E・シュワルツ 44

空飛ぶ円盤は存在する 博士 橋本 健 46

科学トビックス 58

連載ノンフィクション

神々の戦車 — 4 エーリッヒ・フォン・デニケン 61

「鳥人の島」イースター島の巨石像群のナゾ……不思議なマヤ文明の遺跡

編集部より / 東京理科大でUFO講演とスライド映写 77

国内UFO目撃報告 78

読者の声 82

表紙写真=1965年8月8日午後11時30分頃、
米ペンシルバニア州ビーヴァーの
ジェームズ・ルッチ(当時19才)が
月(左の丸い光体)を撮影中、偶然
にとらえたUFO。
(ヤシカ635型を使用)

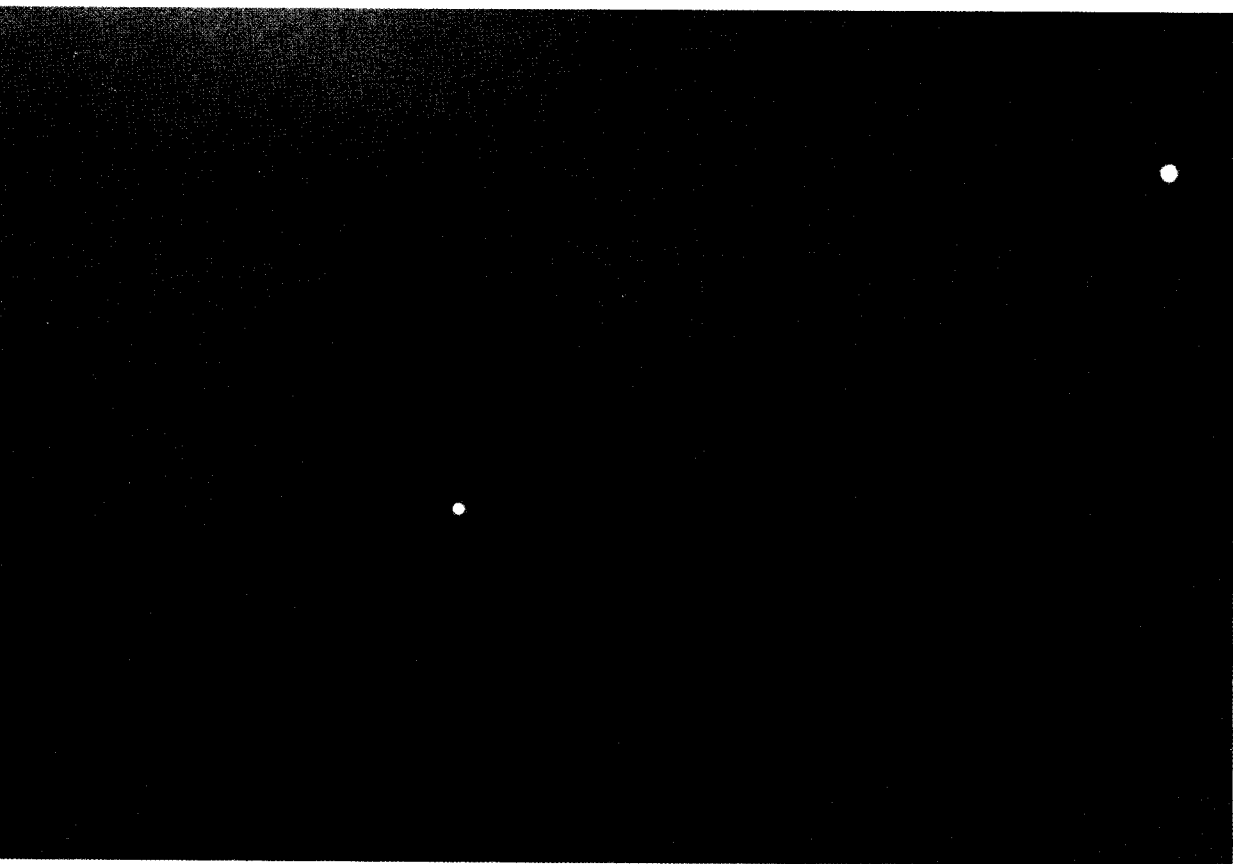
イラスト 木村武清 市川淑一

●メルボルン郊外
の円盤



●1966年4月2日、オーストラリア、メルボルン郊外のバルワインで会社重役が撮影した円盤。本人は嘲笑を恐れて名を秘している。

●秋田県鹿角市のUFO



●1973年9月12日午後9時10分頃、鹿角市の高校生清水畑明君が撮影したUFO（右上の光体）。左側の青白い光点は木星。（ニコンF・ニッコール 135mm F3.5・絞り開放・約5秒）

●世田谷の円盤



●1972年9月のある夕方、東京世田谷区成城の横尾忠則氏令嬢美々（みみ）さん（当時8歳）が目撃した円盤をみずからスケッチしたもの。円盤の色光が変化しながら左下方へ降下する様子が描かれている。



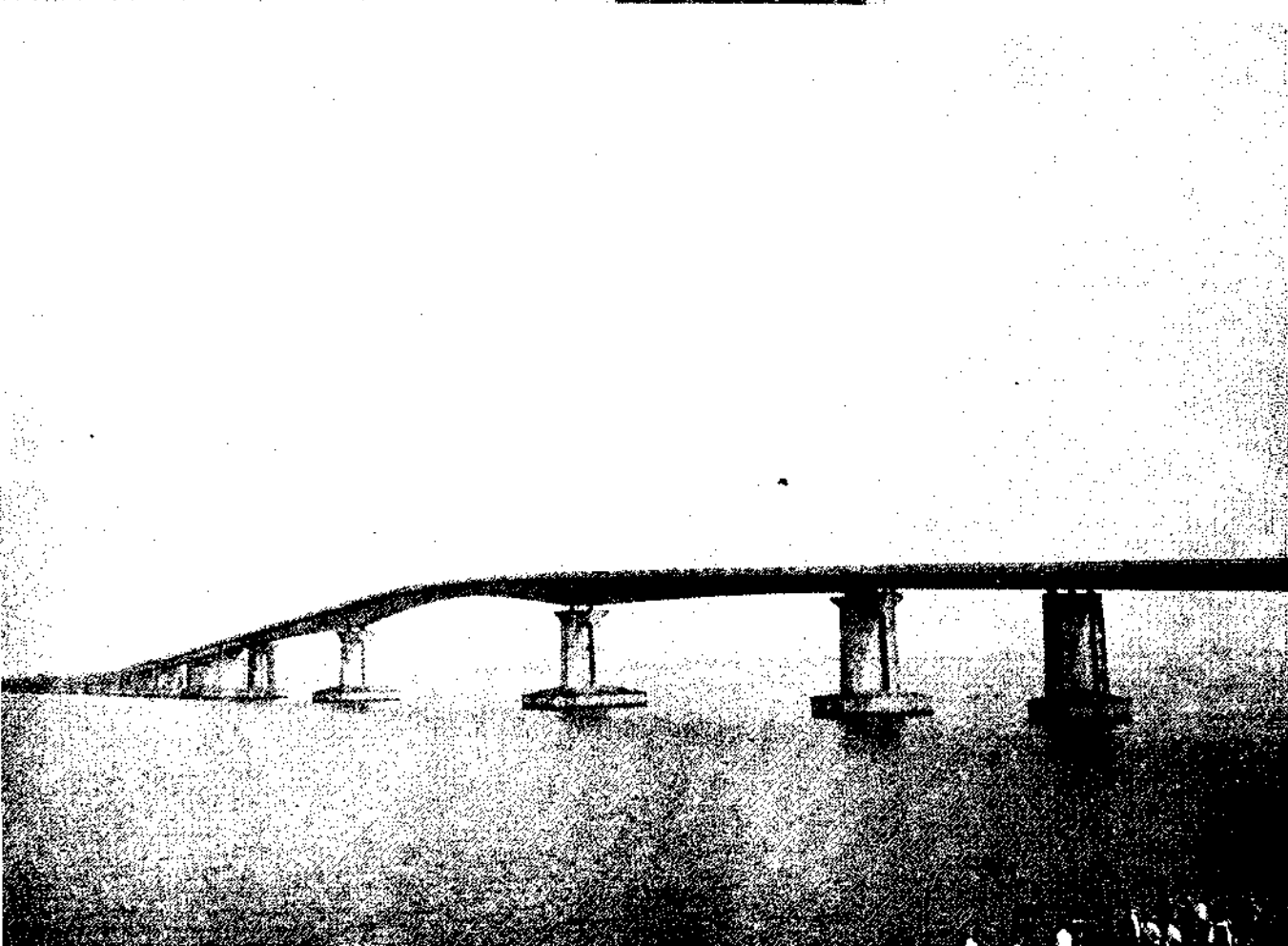
●ジョージア州のUFO

●1973年9月1日夜、米ジョージア州の新聞発行人チチェスター・タタムさんが撮影したUFO。(ポラロイドカメラ使用) 8月31日から9月1日にかけて目撃した人が他に数名いる。(UPIサンー共同提供)



●琵琶湖上空の円盤

●1973年5月26日午後2時頃、東京練馬区の中学生長島和義君が学校（区立大泉学園）の修学旅行で滋賀県の琵琶湖へ行ったとき、琵琶湖大橋を撮影したところ、現像後に奇妙な物体が写っていた。目撃者はいない。湖畔の生徒たちも気づいていない。上段の写真は部分拡大。





日本古来の天空人出現説考

日本にも宇宙からの訪問があつた?!

(1)

科学評論家
斉藤守弘

スモッグの都会を離れて、ふと澄んだ夜空を見上げると、満天にきらめく無数の星々の美しさに圧倒される。古代の人たちはそこに聖なる神々の姿を見た。

だが、現代の私達は、その星の一つ一つが太陽のような巨大な灼熱天体であることを知っている。

いいかえれば、地上のあらゆるものに生命を吹きこむわが太陽も、宇宙のかなたから眺めれば、とるにたりない星屑の一つにすぎない。

そして遠い宇宙の名の知れぬ惑星Xの住民も、私達と同じように満天の星を眺めてロマンチックなムードにひたっているかもしれない。けれども、かれらの頭上はるかの微々たる星の一つ、そのまわりを、地球という惑星が回っていることに想いをはせてくれるかどうか。

わが銀河系に生命をもつ

十億の惑星がある

米国ジェネラル・エレクトリック会社ミサイル・宇宙船部門のドン・ミューレン博士によれば、

「コンピュータにかけて計算した結果、わが銀河系雲だけに限っても、二億五〇〇〇万から十億の星が生命をはぐくみ育てている」

ちなみに、わが銀河系雲内には、ざっと千億から二千億個の星々が存在するが、それにしても生命の花咲く星は意外に多いのだ。

たぶん、それらの星々の中には、地球の私達

と同じく、宇宙開発によりやく乗りだした惑星もあるだろう。

あるいは、まだ人類は出現していないかも知れず、また、出現しているとしても、高度の文明の段階には達していない惑星もあるだろう。もちろん、その一方、現在の地球文明より遙かにすぐれた文明を発達させている惑星も、きっとあるに違いない。

そういう惑星では、いち早く宇宙開発に乗りだし、いま宇宙狭しとばかり、宇宙船を乗りまわしているかもしれない。そしてその宇宙探査飛行にも立ち寄ったかもしれない。

私たちが月世界着陸に成功したように、かれらは一足先に地球にやってきて、すでに過去、何度となく日本へもやって来たかも知れないのだ。

最近、古文書や考古学的遺物を研究し、それらしい証拠が数多くあると主張する学者が世界的に増える傾向にある。ソ連のV・サイチェフやイタリアのP・コロシモ、スイスのV・デニケン、ドイツのW・ケラーなどだ。では、日本の古史料ではどうか。

1 徳川家康に会いに来た小型宇宙人

わが日本では、戦国時代末期頃、なんと徳川家康に宇宙人が会見を求めてきたらしい古文獻がある。

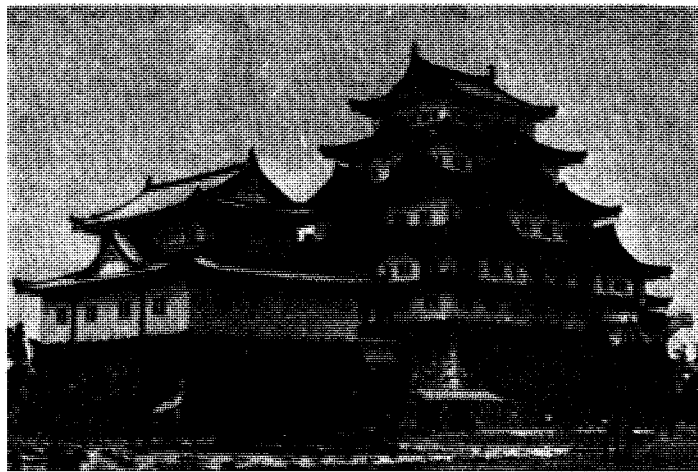
それは「ひまわり宵話」という市井見聞書で、著者

は秦鼎（経歴不明）という人。江戸時代後期、当時のいろいろなニュースを集めて考証し、ついでに自分の感想も加えた随筆集だ。

そのなかの「異人」の項に、『慶長十四年四月四日出し事は旧記に見ゆ』と、明確に事件の日付けを記している。



●徳川家康



●名古屋城

慶長十四年（一六〇九年）——今からおよそ三百七十年ばかり昔のこと。世界は新しい夜明けをむかえ、やがてくる宇宙時代にむかつて急速な飛躍を上げようとしていた。近代の誕生。それは宇宙的に見ても非常に大きな出来事だった。

アメリカ大陸には清教徒の一群が上陸を開始し、南海ではオランダ、ポルトガル、イスパニアが覇を競っていた。なかでも、独立新進のオランダの勢力は日本にも及び、この年、平戸に商船が入港。長く通商を許されている。

こうした世界の活気に包まれて、日本の国内は織田・豊臣政権から徳川幕藩体制に移行する過渡期にあった。関が原の合戦から大阪夏の陣に向かうちょうど中頃、江戸城は三年前に落成し、次の年には名古屋城が建てられようとしていた。

四月四日、家康は駿府（現在の静岡）の城の奥まった部屋にくつろいでいた。この地は王朝時代、駿河の国府の置かれていたところで、今川氏のととき、城を構えて本拠とした。次いで徳川家康の隠居地となり、終戦前までは陸軍歩兵連隊の駐屯所となっていた。

朝のさわやかな気分にはひたりながら、家康は幕府確立の策を練っていた。タバコの禁止令、諸大名の人質を検すること、五百石積み以上の大船の建造禁止など、早急に処理しなければならぬ仕事が出山ほどあった。

家康は日本の将来のことを考えていた。

奇妙な小人の出現

その時である。はるか庭の方から怒声がわきおこり、騒ぎはしだいに大きくなっていった。「何ごとだ」

まだ十分世の定まっていなときであり、いつ何時、刺客が入りこんだり、攻撃をうけるかわからなかった。近習たちは素早く家康をとり囲み、油断なく護衛の目を光らせる。一人はつと立って、様子を見に出ていった。

「おのおの方、曲者なるぞ。出会え、出会え」城内の警備の役人たちは、中庭に立つ奇妙な格好の人間を遠まきにして右往左往していた。世情不安のとき、警護は水ももらさぬ厳重なものだった。その綱の目をくぐって、城内深く入りこむとはただ者ではない。よく見れば形は小児のようで、手はありながら指はない。「肉人」ともいうべき」と、記述者は表現しているが、思うに宇宙服を着ていたのでそう見えたのだらう。

実際、子供のように背の小さい宇宙人を見たという報告がある。一九五四年、ベネズエラに着陸した宇宙人は身長九〇センチ。一九六八年フランスに着陸したのも、身長一メートルちょっとしかなかったという。

米国のUFO研究グループの資料によると地球上に着陸したという宇宙人の目撃報告例が何十となく集められているが、うち半分はいわゆる小型の小人族で、巨人のような大型のものもある。



●アメリカで目撃された宇宙人の列挙図。
家康に会見を求めたのはどの宇宙人か。

が数は少なく、残りはすべて人間と同じくらい背格好のものになっている。その小人族の一人に、目鼻は二応そろっているが、全身ツルリとした、小坊主そっくりの子供みたいのがいる。これなんか、まさしく「肉人」の表現にふさわしい。

「これは小児のようで」といい、「小児」といい切っていないところ、城内のいたずらっ子が真裸でとびだしていたわけでは決してない。「肉

人」という表現でもわかるように、当時の常識では衣類をつけていないように見えたのだらう。しかし、これのみでは傍証だけで宇宙人だという動かぬ証拠にはならない。

キメ手はその肉人が指のない手で上空をさして立っていたということにある。彼はその姿勢で天空から降下してきたことを意味しようとしたのに違いない。

ちよつとわき道にそれるが、お釈迦様の天上天下唯我独尊の姿勢、一方の手で上方を指し、片方の手で下方を指しているのは「宇宙から地球に來た」という身振りではないかという珍説がある。

そうすると、もう一つのよく知られている姿勢、一つの手を、もう結構というように突きだし、もう片方の手を何か下さいとでもいうようにさしだしているのは何の意味かということになり、ハタと行きづまる。それはさておき、肉人宇宙人の意図は城中の者たちに通じなかった。

役人の面々は妖怪変化と思ひこみ 曲者だ。出会え、出会え」と呼びたてながら、捕えようとしたが、起伏に富む広い庭内では、なかなかつかまえられなかったらしい。で、騒ぎは拡大する一方。

物見の近習たちはたちかえり、不思議な怪物の騒動を報告し、「いかがりはからいまいまじうか」と、指図を求めた。家康はただ一言「人の見ぬ所へ追いやつてしまえ」

と、命じた。

一説には「その怪物はキリスタンだ。追っばらえ」といったといわれる。そこで城から遠い小山の方へ追いやつてしまった。

「肉人」宇宙人は、あるいは家康に会見に來たのかも知れなかった。

日本の事実上の支配者になりつつあった人物に、なにか面識を求めてきたのだろうか。それを追いかえしてしまつたのは取りかえしのつかぬことであつた。この怪物騒動を聞いた当時の人のなかにも残念がった者があつたが、まったく見当違いの意味であつた。

「かえすがえすも惜しいことをしたものだ。左右の人たちの無知から、そんな貴重な仙薬を君に奉らなかつたとは。それは白沢図に出てゐる封というもののなにと、いったという」

そして、封とは形のことなり。封はツトヘビ、ソウタの類ならん。封は龍の形なり。これを食すれば多力になり、武勇するよろし見えつる」と、説明している。

白沢図とか封とか筆者にもよくわからぬが、とにかく封の形は、着陸ギアをもつた円盤の形になっているようだ。

中国の漢方薬では「ほら」といえば「胞」のことで、えなつまり胎児をつつんでいる膜のことであり、貴重な若返り薬、不老長寿の仙薬とされている。ツトヘビ、ソウタの類」というのも、そうした「イモリの黒焼き」のたぐ

い、という意味であらう。

宇宙人も捕らなくてよかった。ホルモン薬やビタミン剤の代用にされてはたまつたものではない。やはり着陸しない方が無難であらう。

宇宙船が城内から飛んだ？

この騒動の記事には宇宙船の記述が一つものっていない。しかし、いくつかの古記録を対照にすると、この怪物のすぐあと、天守閣の方角から大きな火の玉がさがり、城の役人たちを驚かせたのである。宇宙船で飛びたつたのを、火の玉が上がつたと当時の人は見たのだろうか。しめくくりには秦鼎は、面白い推察をしている。

「君も臣も、封の事はよく知っておられたのだらうが、けがらわしいものを食ひ、多力武勇になるのは、武士の本意ではない。最も卑怯なことだといふので、捨てさせたのだらう。僥倖の福を志す人たち、淫祠を崇め祀るのも、大かたはこれに似た事だ」

円盤の宇宙人をはじめて目撃した古人の心的反応がうかがえて貴重だ。

さてこの怪物「肉人」、背格好といい、裸のような外見といい、どうやら伝説や民話でなじみの日本の伝統的妖怪「カッパ」をほうふつさせるものがある。

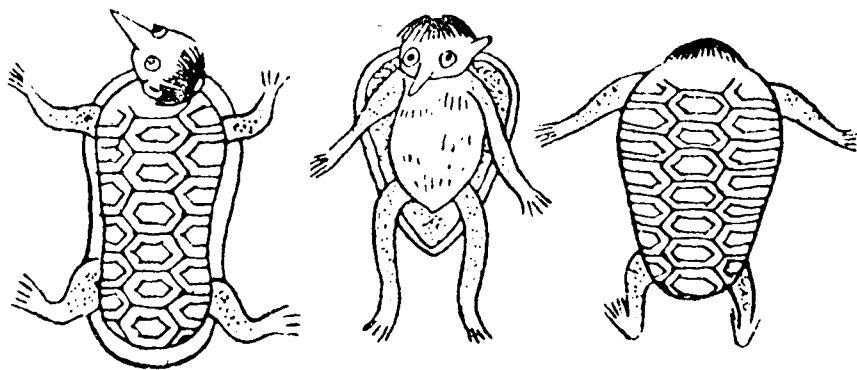
「カッパ」は宇宙人か

事実、飛行機物作家で知られた故北村小松に



●河童(カッパ)は宇宙人か(上)

● 百鬼夜行 の河童図(下)



よれば、河童は昔の人が宇宙人を見間違えたものだ、といい、世界的なトビックとなつて、いわば今日の宇宙人地球来訪説の先駆けとなつた。それによれば、河童は昔地球へやってきた宇宙人かもしれない。河童の口ばしと思われたのは、じつは呼吸



2 三河国に出現した大型宇宙人

一方、巨人宇宙人の着陸らしい記録も、江戸時代に残っている。『煙霞倚談』という市井見聞書で、江戸中期の正徳年間（一七一一～一七一六年）にあった出来事だとするしているが、正確な日付けは明らかでない。

三河の国（いまの愛知県）というから、家康の駿府の城からさして遠くない。その三河国吉田町に、善右衛門という古物商売の商人がいた。この男が、ある武家方から幕を五張請負ったが吉田の町では三張だけしか調わないので、岡崎まで買出しに行ったけれど、やはり手に入らない。余儀なく名古屋まで行くことにしたが、大浜茶屋まで行った頃は、もう日はとっぷりと暮れていた。そこできかねて知り合いの茶屋で一息入れ、ちょうど中秋の月のさわやかな夜

用マスク。頭のお皿と放射状の髪と考えるのは頭部のアンテナ。甲羅と思われたのは呼吸ボンベ。ヌラヌラした肌だというのは宇宙服を着ていたからで河童の尻の穴が三つだというのは、宇宙の無重力状態のとき、自分の姿勢をコントロールする小ロケット噴射孔。そして河童がくさいというのは、われわれの空気がちがう気体の排気ガスのおいではなかったか。

肉人宇宙人といい、河童宇宙人といい、日本では数少ない小人型宇宙人の貴重な史料といえないか。

長の季節だったので、名古屋までの通し馬を仕立ててもらい、夜半に出立することになった。宿を出るとき、馬子がいった。

「池鯉鮒の近所から、名古屋伝馬町へ抜ける近道があります。私は、その道の案内をよく知っていますから、その道を行つたらいかがでしょう。」

善右衛門は急いでいたし、拒むひまもなかった。

「それはちょうどいい、ぜひ近道をやつてもらいたい。」

さっそく、その村はずれの近道に行くことになった。

すさまじい旋風が起る

馬を進めて、人家の途絶えた寂しいはずれの

道にかかって、梟頭村というあたりに来ると、その辺は松があちこちに生え、ススキなど茂った広い野原になっていた。その野原にさしかかったとき、急に激しい旋風が吹いてきたので、乗っている馬もびくくりして、足を折ると倒れるように地面にうずくまってしまった。

善右衛門も馬子もそのすさまじい旋風に吹きまくられて、気が遠くなつたようになり、馬からすべり落ちると思わず地べたにひれ伏してしまった。

風の合い間、ふと顔をあげると、ちょうど前方にしげる松林のかげから、身の丈四、五メートルばかり、仁王のような大人道で、眼が鏡のように輝いた怪物が、のっしのっしと歩いて来るので、善右衛門は一層おびえて、いよいよ地べたにしがみつき、顔をあげずにいた。やがて



●フラットウッズの怪物

その怪物も通り過ぎたと見え、風もおさまり、しばらくして馬も立ち上がっていななき出したので、二人は元気を回復、大急ぎで逃げるようにそこを立去った。

目撃者、奇病で死す

そのうち夜も明け、名古屋の町に入ったので馬車を返し、問屋で幕を買入れたが、そのころから気分が悪くなりだした。食事でも進まず、頭痛もするし、熱もあるようなので、宿から近くの医者をやんで診てもらった。ところが、
「どうも流行病の様子じゃ。熱が大部こもっているから気をつけなさい。」

と、いわれた。そこで、途中怪物に出会って驚いた話をした。薬を加減してもらい、早速のんで見たが一向ききめがない。しょうがないので古田までの通しカゴを備った。翌日、自宅にもどったとはいえ、熱はますます高くなり、医療のかいもなく、とうとう十三日目に死んでしまった。野原で見たのは疫病の神だったのだらうと、人々は噂しあったという。

以上が事件の一部始終だが、記述内容が非常にリアルである上に、詳細をきわめているので実際に起こった出来事の報告と考えられる。

この巨人の疫病神は、はたして大型宇宙人であつたのか。

海外の巨人宇宙人の目撃例でいちばん代表的なのは、一九五二年、アメリカに現われた「フラット・ウッズの怪物」である。

身長約三・四・五メートル。吐気をもよおすいやなおいを発し、懐中電灯で照らすと、オレンジ色の眼が野獣のように光り、からだの中から光を発射したように見えた。

この点、疫病神の巨人も身長およそ四メートル。病源性の強風をとめない、眼は「百煉の鏡」(原文)のように輝いていたことなど、フラット・ウッズの怪物によく似ている。

着陸した飛行体の存在についてはまったく気づかなかったようだ。疫病神のあらわれた前方の松林のかけにでもかくれていたのだろうか。

あるいは、病源性の強風というのは、フラット・ウッズの怪物のもやのように、着陸した飛行体から生じていたのかも知れないし、また、一種の噴射ガスであった可能性もある。

強風があったことは馬の動作が証明しているが、巨人の疫病神をはたして馬車も見えたかどうか。

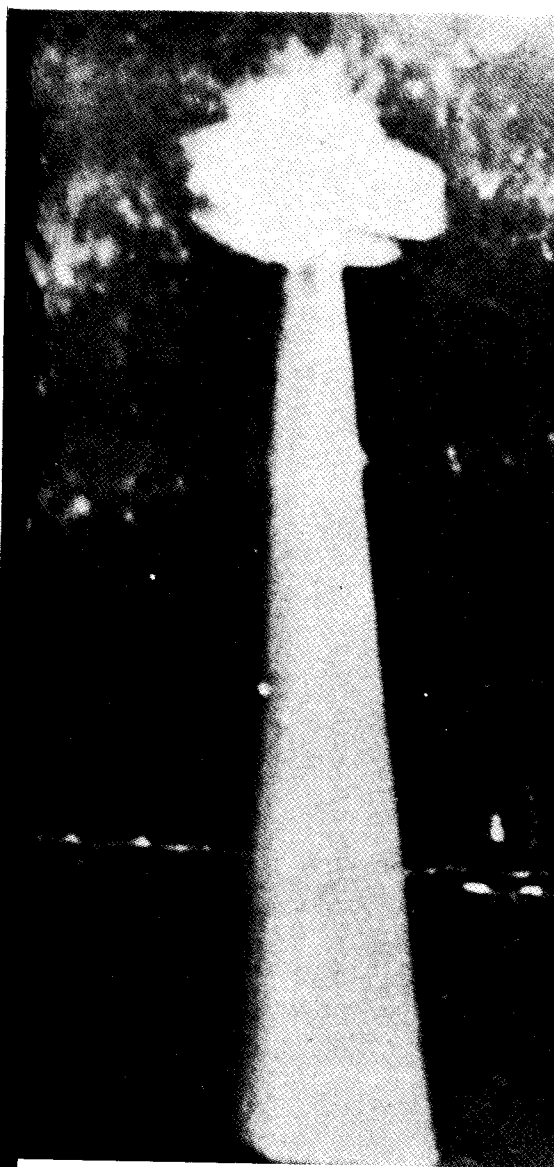
かは明らかでない。発熱状態の善右衛門の幻覚だったと反論される余地もあるし、確かめようもない。わずかに、地球の人間にない異常な身長と、「人工照明」らしい光る眼だけが巨人宇宙人の依り所といえるか。いかがなものであろうか。

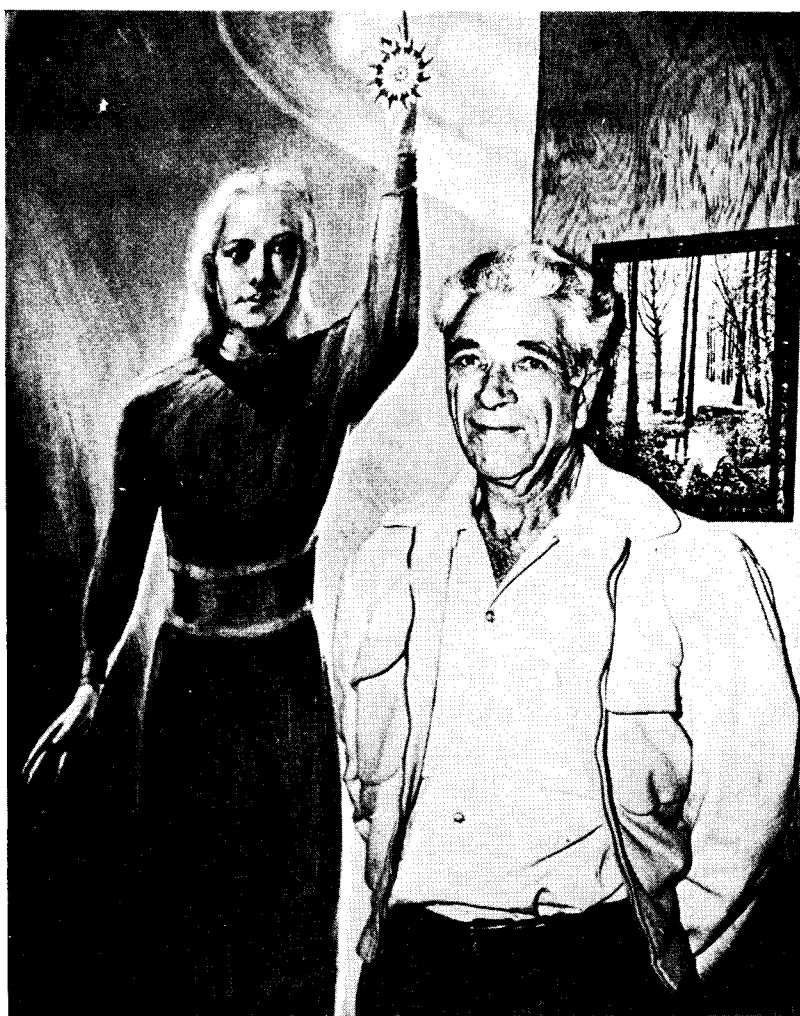
3 かぐや姫と羽衣の天女の宇宙人説

さて、こうなると、疫病神の話と同じくらい奇妙な、日本の昔話のたぐいも見逃がせない。あらためて検討の要がありそうだ。たとえば「かぐや姫」の話や、「羽衣」の話だ。

宇宙人地球来訪説の立場からすると、かぐや姫の話はこう考えられる。昔、地球の近傍空間で一機の宇宙船が事故にあい、SOSを発して救助ロケットカプセルを地球に投下した。竹取

●サーチライトを放つ円盤。かぐや姫を乗せた円盤はこんなだったか。





●G・アダムスキーの会見した宇宙人（肖像画）

りの翁のつけた竹やぶの中の光る「大竹」というのは、この救助カプセルとその信号燈であり、かぐや姫はもとと宇宙人の赤ん坊だったのである。

なにかの原因で救助の宇宙船の到着は遅れたが、美しく成長したかぐや姫をテレパシー通信でさがし出し、屋敷をとりまく護衛の軍兵にサーチライトの目漬しをくわせて、そのスキにか

ぐや姫を宇宙船に収容して飛び去った。事実、最近アメリカやフランスで目撃されたUFOはサーチライトを照射し、また、南米に着陸したという宇宙人は、追いつがる男に強烈なフラッシュをあびせて逃げ去った。

一方、「羽衣」の天女の場合は、重力制御装置を携帯した地上偵察員だったかも知れず、ラジオの音楽にあわせて空中ゴーゴーを踊ったの

を漁師は天女の妙なる踊りと勘違いしたのであるか。

あるいはかぐや姫も羽衣天女もひよっとすると女性ではなく、男性だったのかも知れない。一九五二年、アメリカのアダムスキーが会見したという宇宙人は、外見的に人間そっくりの人間宇宙人であったが、男性なのにもかかわらずとても美しく、まるで女性のように見えたのである。

4 亀が岡の土偶宇宙人と古代の遺跡

しかしながら広い宇宙には、まだまだ所変われば品変わるというように、違った種類の「宇宙人種」がたくさんいることだろう。生物進化論的に見れば、私たち人間とよく似た姿、形になるといっても、その細部においては眼の大きさ、指の数、関節構造など、かなりのバリエーションを示すことだろう。

記元前一五〇〇年、日本の縄文時代、東北の亀が岡に着陸した「土偶宇宙人」もその一つ。

この地方から出土する縄文時代の土製人形は「遮光土偶」とよばれ、一風変わったかっこうをしている。眼が異様に大きく、中央で真一文字に閉じていて、まるである種の遮光メガネをかけているように見える。

鼻のところには、呼吸用のフィルターのようなものがあり、顔全体にはガスマスクでもかけているようだ。その証拠に、首のまわりを見れば

ば、宇宙ヘルメットの止め金そっくりのものがちゃんとついている。(6頁の写真)

「この亀が岡土偶こそ、古代日本に着陸した宇宙人の姿を型どったものではないか」

サハラ岩壁画との類似性

と主張するのは、ソ連の学者カザンツェフ。「たとえば土偶の目を見れば、人間と違っているのがよくわかる。マブタがなく、薄い膜が中央で閉じている。大きさはるかに人間より大きくて、どうやら光の少ない惑星の生物のようだ。地球上の明るい光がまぶしくて、目を細めているのだろう。これこそ、サハラ砂漠の奥地で発見された、なぞの岩壁画「偉大なる火星の神」を彫刻したものにちがいない」

そのサハラのなぞの岩壁画というのはフランスのアンリ・ロート教授のひきいる大調査隊によって発見されたもので、サハラ砂漠のど真ん中アハガル台地の垂直な岩壁に描かれている。

なるほどトックリ・セーターまがいの服に、球形の首。そのスタイルは宇宙服を着た人間に似ていないだろうか。頭部の奇妙な模様は洗濯板状の放熱器で、顔面の大小二個の二重丸は音声の発信機と受信機、つまり口と耳の位置を示している。とすれば、奇妙な模様のうち、下部の円形はのぞき窓、または呼吸装置の一種をあらわしているのか。日本の亀が岡土偶の面部とくらべると、その酷似はおどろくばかり。

つまり、日本の亀が岡土偶と、サハラのなぞ

の岩壁画人物とは、大昔、地球を訪れた宇宙船の、同一宇宙人を記念してつくったものだというのだ。

おそらく紀元前二〇〇〇年代の頃、遙かな星から巨大な母船を駆って地球を訪れた宇宙人はそのころアフリカ大陸に発祥しつつあった初期文明に興味をそそられ、リビア砂漠のあたりに調査艇を着陸させたのかもしれない。遊牧生活

を営んでいたアハガル台地の人たちは当然かれら宇宙人を目撃したろうし、なんらかの接触もあったかもしれない。その目撃者が部落にもどって強烈な印象のままに絵にしたのが、くだんの岩壁画だったと考えられるのである。

では日本の場合、縄文時代の東北のなにかにいたい、かれら宇宙人の注意をひいたのだろうか。



●サハラの壁画によく似た亀が岡土偶

東北は先進文化地帯であった

考古学的に見ると、その頃の日本の東北は、日本列島の地方に先がけた先進文化の地域だったのである。

当時の情景を想像してみよう。

見わたすかぎりススキのゆれる高原台地で、何かを待ちうけるように、縄文人たちは空を見上げていた。足もとの大地には、なにやら巨大な円環形の石組みが横たわっている。地面を掘りさげて白い石を敷きつめ、環の中にもう一つ環のある、みごとに二重同心円のマークだ。上空から眺めれば、原野のなかに描かれたその同心円マークは、ひとときわ白くきわだって見えたに違いない。

人びとの観声がまきおこった。

天空のかなたから、こつぜんと、きらめく物体があらわれたのだ。巨大な円盤で、地上のマークと同じく、二重同心円構造をみせている。すでにおわかりと思うが、これこそ古代の地球を訪れた円盤型宇宙船だった。

宇宙人は、当時の未開の原野で、人口も少ない日本に着陸し、ここを宇宙基地として原住民文人との接触をはかった。

「縄文期の日本に宇宙人が降りた。これはたんなる空想ではない。その証拠に、秋田県鹿角郡の大湯や亀が岡にのこる遺跡を調べてみればわかることだ」

こう主張するのはソ連のカザンツェフ、ザイ

ツェフをはじめ数多く、世界の宇宙考古学者から注目され、支持されている。

大湯遺跡は古代の宇宙基地？

では、その謎の石組大湯遺跡とはなにか。

それは高原台地の道路をへだてて南北二カ所にならび、大きい方は万座遺跡、小さい方は野中堂遺跡とよばれている。どちらも外円の直径四十メートル以上、その内側の内円の直径十メ



●サハラ砂漠で発見された宇宙人(?)の壁画

ートル以上という巨大なものである。その円の中心近くに、一本の立石とそのまわりに放射状に石をならべたものがあり、日時計そっくりに見える。じっさい何に使われたのか、まだわかっていない。こうした遺跡について、いままでの学者はこういつていた。

「ストーン・サークル(環状列石)」と呼ばれるこの古代遺跡は、古代人の墳墓の一種、または信仰にもとづいた祭壇みたいなものだったかも知

「しれない」

だが、宇宙考古学の研究者は別の結論をくだす。

「この遺跡こそは『宇宙基地』もしくは、宇宙信号所に相違ない」

その根拠の一つとして北海道忍路にある小型のストーン・サークルをあげる。

この列石の各表面には、たくさんの小さな穴があり、かつて、ここには古代の貴重な宝石であった硬玉がはめ込まれ、夜となく昼となく輝き、上空を飛ぶものに『宇宙信号』を送っていた。

そして、二重の同心円構造については、古代の太陽のシンボルマークであると同時に、基地の標識サインでもあり、宇宙からの円盤発着用の特殊磁気エネルギー発生装置の役割を果たしていたと語る。つまり、一種の宇宙発射台だったというわけだ。

それにしても、なぜ、この基地は放棄されたのか。

実際、大湯ストーン・サークルの発掘調査から、厚さ三十センチもある火山灰で覆われていて、火山の大噴火と、それによる基地の放棄を

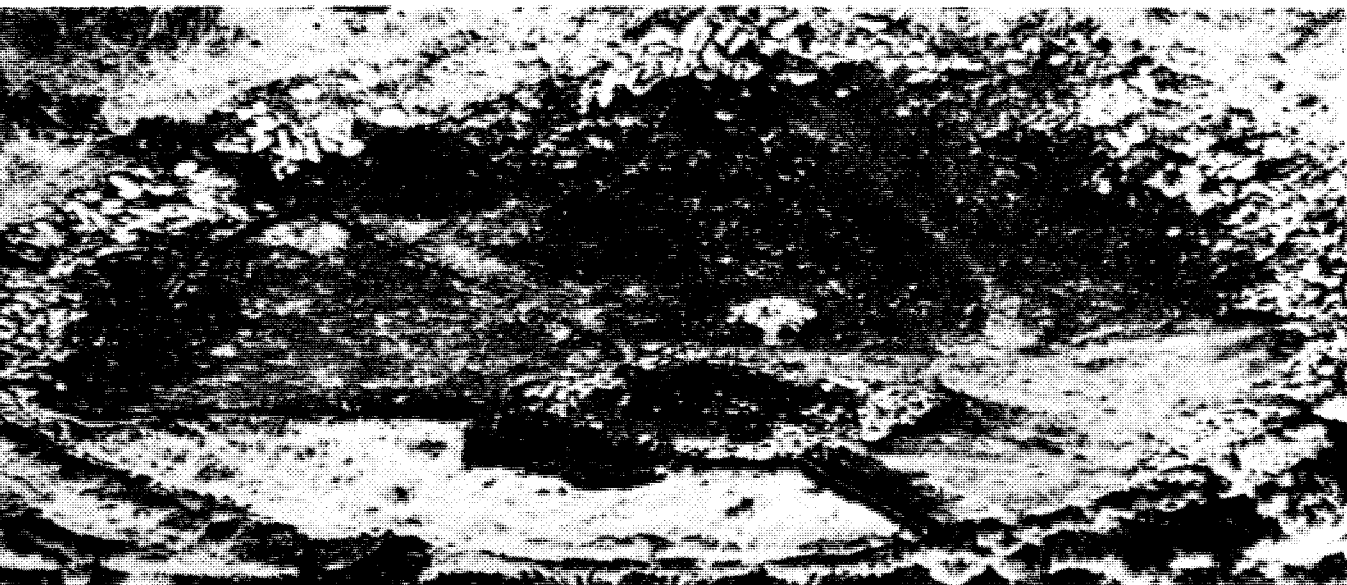


●着陸した亀が岡宇宙人

暗示している。また、同じく亀が岡の遮光土器も泥炭層に埋れて発見され、土地の急激な沈下のあったことを証明しているようだ。つまり、大湯、亀が岡両遺跡とも予期しない火山の大噴火という天変地異によって放棄された、というわけだ。

ストーン・ヘンジも宇宙船の記念碑？

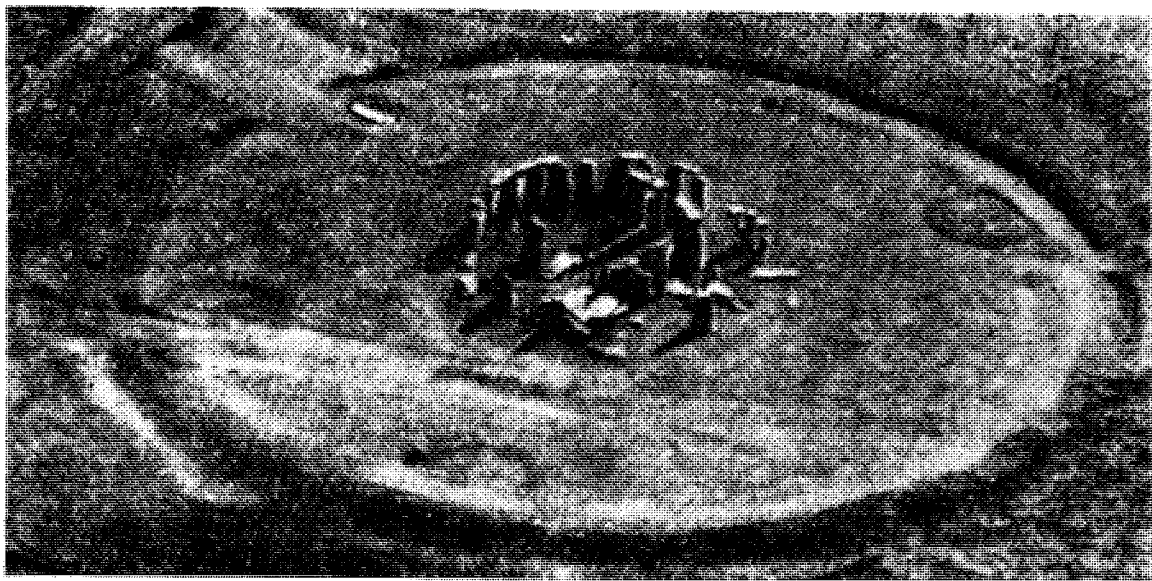
ひろく世界的にみると、イギリスにも有名な『ストーン・ヘンジ』とよばれる環状列石がある。空堀をめぐる直徑百メートルの円形敷地の中心に、三十個もの巨石を丸く並べていて大湯遺跡とよく似た構造をみせている。その構



●秋田県十和田地方の大湯遺跡全景



●大湯遺跡中の 日時計 といわれるもの 宇宙通信所か



●ストーン・ヘンジ

築年代もよく一致する。

アメリカの古代研究家E・シグモンドによると、このストーン・ヘンジは古代に地球を訪れた円盤型宇宙船の記念碑であり、その祭壇石の下にきつと宇宙メッセージが埋められているはずだと語る。

なぜ日本とイギリスとで、よく似た同様な石造構造物が作られたのか？ こういう学説は、専門の考古学者によって否定されているが、こうした学者たちにとっても、なぜこういう遺跡や遺物が残されているのか不明なのだ。

ナゾのチブサン古墳の壁画

たとえば、九州の熊本県山鹿市にある巨石建造物チブサン古墳も、その謎の遺跡の一つ。

全長約四五メートル、高さ五メートルの前方後円墳だが、不思議なのは、その石室の壁に描いてある奇妙な情景画である。一面に赤いバツクのうえに、七個の白い円と、両手をあげた奇妙な人間の絵が描いてある。

「この人物は、死者の靈魂を守る番人ではないか」

そう考える考古学者も多かった。とすると、さしずめ上空の白い円は、古代人の考えた靈魂、つまり人魂の群ということになるのか。

しかし、死靈の番人なら、ほかの古墳にも、同じ絵がらの壁画が描かれそうなものだが、この壁画は地に例のないチブサン古墳独自のものである。そこでこう考えた大胆な研究者もい

た。

「この壁画の七つの円形は、古代の空飛ぶ円盤の大編隊であり、それを当時の王冠をかぶった部族首長が出迎えているのだ」

しかし、この推理にも難点がある。もし、この人物が初族の首長で、この古墳に埋葬されている人物なら、壁画は石室の奥の中央の壁にかくのがふつうだ。ところが、絵は向って右側の壁に描いてある。とすればこの奇妙な人物は、埋葬されている首長自身の生前の姿をうつしたものであり得ない。

左頁の写真をよく観察してほしい。古代人にしては、その両腕が異常に長く、親指と小指の順序が逆で、頭にアンテナのようなものをつけた人物。どうやらこれは、地球人ではない。他の天体から飛んできた宇宙人ではなからうか。その天体とは、七つの円盤形が示すように、北斗七星のある大熊座のどこかの星と考えられる。七つの円盤形によって、円盤の編隊飛行と同時に、飛来星座の位置をあらわしているのである。

一方、古代中国では、北斗七星を天帝の星とあがめていた。天帝とはつまり「天の皇帝」の意味であるが、このチブサン古墳の壁画人物こそ、宇宙から飛来したその天帝をあらわしているのではなからうか。

石室内の他の壁には、いっさい人物画も情景もなく、ただ一面に複雑な幾何模様だけでうめられているのは、円盤内部の精密な計器盤にび

くくりした古代の人々の印象によって描かれたのではあるまいか。

つまり、このチブサン古墳に埋葬された人物は、たぶん宇宙人に会見し、その際うけた宇宙人のメッセージを、この古墳内のどこかに隠したことを、この絵は物語っているのではあるまいか。

その所在をたしかめるのはさして難くないだろう。おそらく宇宙人はその隠し場所を知らせる手掛りとして、物質を貫く放射能の目印しをつけたはずである。だから、チブサン古墳内部のあるいはその周囲の放射能力分布の測定を行なってみるのも一つの検証法ではある。あるいはまた、それと同時に重力測定、磁気測定も行なってみる必要があるだろう。なぜなら、古墳内壁画の人物を宇宙人とすれば、それはその頃地球に不時着した円盤操縦者であり、チブサン古墳の地下のどこかに、その不時着円盤を隠している可能性も十分あるからである。

なぜ前方後円墳が作られたか

さてこのチブサン古墳もそうだが、日本の古墳はなぜ奇妙な形の前方後円墳なのか。古代人はなぜ、墓を前方後円形の形に設計したのか。今なお、考古

●チブサン古墳の内部壁画



学最大のなぞのひとつとなっている。
 円墳に四角い祭りの台をつけたからこんな形になったのだとか、周囲を濠で取りまき、水に浮かんだかたちだから古代の舟の形だとか、古

代の葬礼である楯を伏せたかたちだとか、その形から推理する学者もいれば、古墳の向きや地形的位置から推理して、古代の天文台だったという人もいる。



●ローマ上空を飛ぶ円盤。1954年アマチュア・カメラマン、トゥーリ・マッテラが撮影

しかし、いずれも重要なポイントを忘れてはいないだろうか。この古墳の形は、地上からながめたのでは、わからないということである。
 たとえば、エジプトのピラミッドは地上から見ても、その偉大さはわかる。だが、世界最大の墓といわれる仁徳陵は、地上から見たのでは低い丘にしか見えない。あきらかに、前方後円墳は上空からながめる者のために作られたのだ。いったい上空のだれに!?

古代中国では、星空の宇宙神「天帝」を祭るのに、四角の台と丸い台の「天壇」を築いた。
 そこで、この形は、二つの形の天壇がくっついたもので、宇宙神をあがめるためのものだ、とも近年はいわれた。だが、宇宙神「天帝」を祭る形としても、問題は残る。なぜ、水の中にうかんでいるのか。そもそも古代の日本人は、空と海を区別しなかった。両方とも濃い、薄いの違いはあれ、同じ物質だと思っていた。したがって、水面にうかぶということは、空中にうかぶことだ。もう、おわかりだろう。
 前方後円の後円は円盤の形であり、前方部は上昇する円盤からのロケット噴射でなければ、飛行流線もしくは、円盤の入口の四角いタラップの形をあらわしたものとも考えられるのだ。イギリスのストーン・サークルや、ペルーの有名な地上絵と同じく、それは上空の「天帝」(宇宙人)に合図する宇宙マークであり、天帝の使者の再着陸を乞い、天帝の星(不老不死の天国)への飛行を願っているのではなからうか。



円盤が一定地域によく出現する実例

ドラギニャンに出た円盤

ジャン・シャセーヌ フランソワ・モル

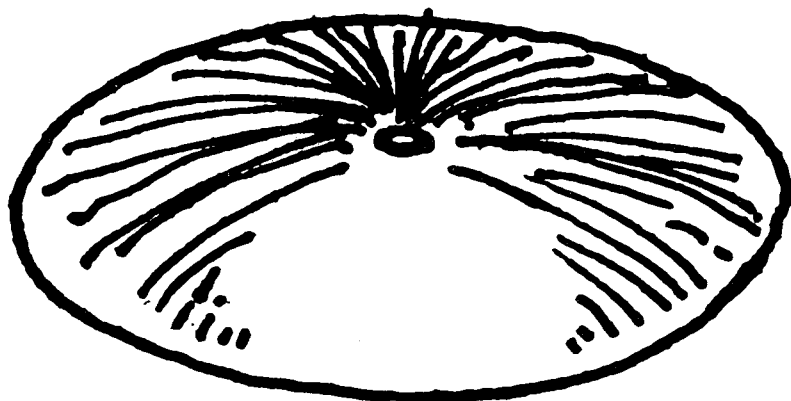
この目撃事件はフランスのドラギニャンに近いある空家の付近で起こったことである。そこはドラギニャンの最小自治区域内にあるレ・ヌラドンという村落からそう遠くはない。(本文地図を参照)

二人の目撃者、アンドレ・ブーシー(二十三才)とビエール・カラファ(二十五才)は仕事の合間に行なうバンドの練習(それはだれも知っているように、ほんとに騒々しい音楽である)用に、孤立した一軒の古い家を見つけていた。

事件が起きたのは一九七一年三月二十九日の夜九時頃のことである。二人は仲間といっしょに練習のため、その一軒家に行く途中だった。彼らはハイウェーから折れて、せまい道を空家へ向けて車を走らせた。ビエール・カラファがハンドルをにぎっている。すると突然彼は車の前方上空に滞空する一個のまばゆい光に気がついた。彼はブーショー(ブーショーはそれにすでに気付いていたが、航空機だぐらいに考えていた)に注意をうながすと車を止めた。

そのとき一人は風防ガラスを透してもう一人は右側のサイドガラスを透して、滞空しているように見えるほぼ丸い輝く物体が濃赤色の光を噴射しているのを見た。直径は二人の推測では十乃至十五メートルである。だが、観察

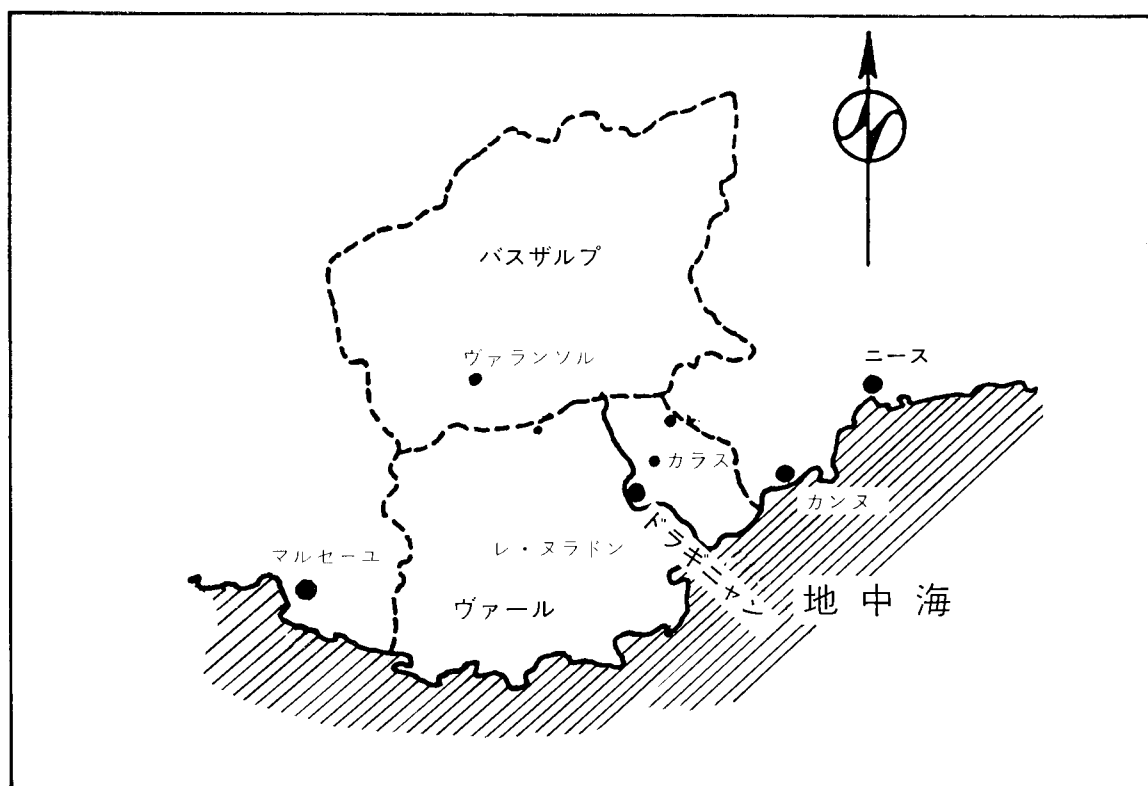
図 1



●ピエール・カラファーが
車の前で見た物体

した物体の形に関する二人の意見は、わずかに違っていた。アンドレの方は二枚のスーパ皿を重ね合わせたようなレンズ状のものを見たというが、ピエール・カラファーは、それが半球に近く（下方からその四分の三を見た場合の皿のような形である）縁はさらに明るく輝き、周囲の三分の二までがはっきりと見えたといっている。また、三角形をした明るいきらめきが物体の下の方にはっきり見えたという。

ブーショーは数年前にも一度UFOを見たことがあったので、カラファーにすぐにライトを消すようにいったが、こういった型の車（四〇三ブジョー）をあまり扱ったことのなかった彼はとっさにスイッチを切ることができず、次のようなことが連続して起こることとなった。すなわち、ヘッドライト全体が下に傾き、次に光が暗くなりはじめ、まるである種の信号のように感じられたのである。いったいこの物体が次のような行動をとったのは、この信号によるものだったのだろうか、それとも単に偶然の一致にすぎなかったのだろうか？ われわれには何もわからないのが残念だが、とにかく次のような行動をそれはとり出した。すなわち最初に約十五メートルくらい垂直上昇をすごい速さで行なうと、すぐに今度は速度を落として前より短く斜めに降下した。するとふたたび急な速さ



で垂直に上昇し（それは前後ど長くはない）その後、前の上昇よりもゆるやかにまた短く斜めに降下してきたのだ。（図2）

目撃者たちがこの種のジグザグ飛行を三度観察すると、その物体は百五十メートル離れたブドウ畑まで斜めに気持よく降下してゆき、地上十メートルくらいの高さに停止した。この間（約二、三秒を要したにすぎない）物体は振り子運動を続けていた。

二人は車で家の前のテラスまで行きもう五十メートルしか離れていない物体をそのまま車の中から観察したが、二人と物体のあいだには大きな木が立っていた。

その物体はレンズ形の外観をもち、直径は約十二乃至十三メートルで、高さが二乃至二・五メートルあった。その輪郭ははっきりしていて、「色は暗い赤色で、自動車の車体が塗装される前に下塗りに使用されるセルロースのようであった」という。物体の下部は頂上より暗く、円形の縁が明るい光を散らしているのがよく見えた。だが目撃者のいうことは一致していない。カラファーにはその光が黄白色で火花を散らすように見えたが、一方ブーショーはそれが反射装置による反射光のようだったという。だがその光は火花を散らしているような、波うつような感じだったと証言している。

機体の上方には三個の光がはっきりと見え、それは機体が回転しているような印象を与えた。

二人が述べた機体の形も異なっているが、今度は、前に目撃したときの印象より少しぼやけているようであった。（図3）

音はまったく聞こえなかった。そんな静かな場所でも、しかも真夜中であれば、どんな小さな音でも聞こえたはずだ。機体の表面にはアンテナも突起物も見えない。位置灯も噴射口もなく、特に光る部分もなかった。

物体はブドウ畑の上空に約三分止まりその後横揺れをはじめ、まるでフラッシュのように瞬間的にフラヨスクの方向に消え去った。仰角は約六十度である。

さて、アンドレは目撃しているあいだ何も感じなかったのだが、ビエールは呼吸困難を起こすときのようなある種の圧迫感をはっきりと感じ、UFOが去って仲間がみな練習についてからも顔がまだひどく青かった。さらに彼は事件後一週間ずっと異常な疲れを感じたのである。

ブーショーは腕時計をつけていなかったが、ビエールがつけていた腕時計は今までになくひどく狂い、止まることもたびたびで、以来かなり強く磁化されたことを示している。だが自動車のエンジンには何の影響もなかった。

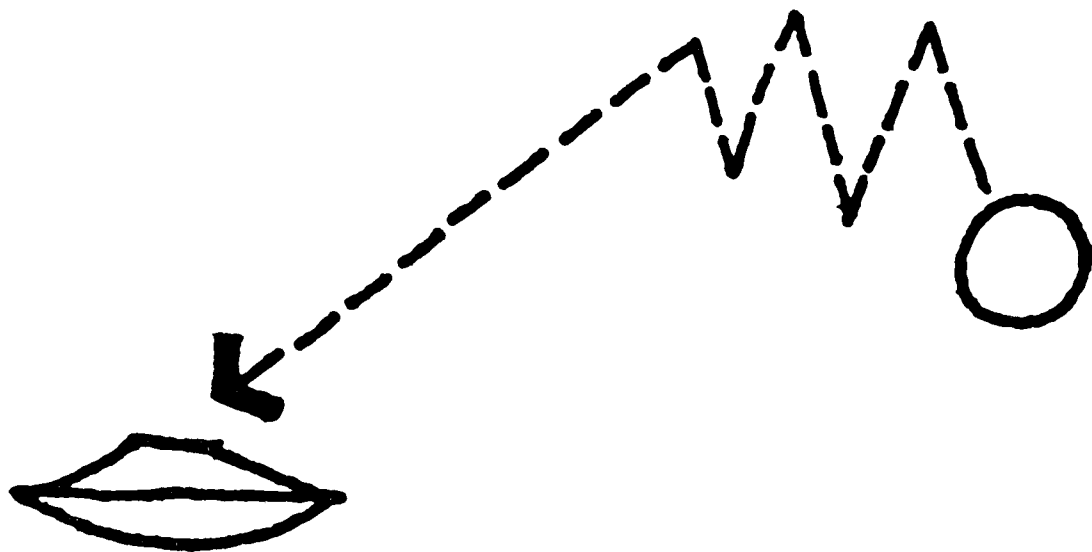


図 2

●ブドウ畑の上でジグザグ運動をしたUFO

った。

現場一帯の状況

一九七一年三月二十九日、天気は良好で星がよく見えた。真暗な夜で二十六日夕方に出た新月があり、午後十一時三十分に沈んだ。

ドラギニャン地域の地図をざっと見ると、町を南西方向に走る網の目のような深い断層があることを示している。目撃はその一つの付近で起き、しかもその断層はフラヨスクの方向に走っている。

町の北西には数本の断層が平行してつらぬいていて、東西にそって並んでいるのがはっきりとわかる。古い例では一九六六年にル・レンチェの村近くで目撃が起こり、そこもやはりこれらの断層の一つの南側に位置していて、ナルチュビ川の左岸にそった丘陵の上だった。この一九六六年の目撃は今日まで知られずにいるが、実はその目撃者の一人が偶然にもアンドレ・ブーシヨールだったのである。われわれは今、その年の七月の夜彼と共にいた三人の友人に関する調査で追われている。

だが、とにかく一つのことだけは確かだ。それはヴァール高原地方は特にさまざまな目撃が多く発生しているということである。

ヴァール高原地方で

起きた他の事件

1 ドラギニャンにて

一九四五年九月二十七日（ジャン・シャセーヌ調査）。目撃者で六十二才の羊飼いのF氏は匿名を希望された。

彼はラムテ（ドラギニャンの東方八百メートルの町）へ通じる街道からそう遠くない所にある牧草地で夜中羊の番をしていた。

夜が明けると一時間ほど前、彼は突然空に黄色い輝きを見た。形は丸く、見かけ上フットボールの大きさである。

それは垂直に降下しつつ輝きを増して、彼の頭上三十メートルぐらいの空間に停止した。そのとき、強烈な光線が物体の下方に現われ、まぶしい黄色光で一帯を照らし出した。

この光線は直径約五十メートルの地域をすべて照らし、その中央にいた目撃者は茂みに身を隠しながらおびえていた。光は非常にほげしく、真昼間と同じくらいにはっきり物が見えた。と彼は語った。

羊たちは照射された地帯から四方八方に逃げ去り、照射現象が終わった後もなお長いあいだ混乱していた。F氏は最後に叫いへもどそうときめたものの、犬たちはその間動こうともせずに

光線に照らされた場所にうずくまっていた、はっきりと恐怖の色を示した。

羊飼いは完全に目がくらみ光線は彼の体に浸透するように思えた。だが、はっきりとした肉体的感覚は何もおこらなかった。彼の体はマヒしなかったが、倒れないように茂みの木にしがみつかなければならなかった。彼は自分が非常におびえたことを認めている。

彼にはこの光がどれくらい長時間頭上に滞留していたかはわからない。突然胸を打つようなハミング音が物体から聞こえてくるのに気づき、その直後物体は再び空中高くまっすぐ上昇し、二、三秒後に光は消滅した。

目のくらんだ状態から回復するには数分かかり、その後彼は光るボールが上空高く消えゆくのを見ることができた。

大気の状態はすばらしかった。彼は星々を見ることができたが、月を見た記憶はない。

物体の降下時間は数分で、他にはそれ自身の運動（回転、振動など）をみせず、形や色彩の変化も示さなかった。降下するにつれて彼はその上部に突き出た棒状のものを見ることができた。

2 ドラギニャン北西、国道五五五号線上にて

P・ビリー氏による報告。

一九六六年七月十七日の日曜日はまだ祝日が続いていたので、村をあげてのダンス大会が開かれていた。六人の目撃者はドラギニャンから五十キロ離れたヴァール高原の村、ラ・マルトル・ヘヤング・フォーク大会でダンス上演のため向かっていた。

パーティーは終わり、すでに月曜日になっていた。彼らはドラギニャンにもどって仕事につく前に一休みをしようということになった。そこで六人の目撃者は楽器をまとめ、ラ・マルトルを離れた。三人はシムカ、他の三人はドフィンに乗った。

シムカが先にたつてドラギニャンに先に着いた。ところが、他の三人が、こうに現われないので心配になってきた。何かが起こったのだろうか？

彼らは国道をひき返し、ようやく五、六キロ行った地点、国道五五五号線上の多数のカーブの最初の部分に着いたとき、仲間が手すりにもたれてじ、八百メートル西のル・レンチェの村を見つめているのを認めた。

そのとき彼らは他の三人が見たすばらしい円盤の話を聞き、彼ら自身も実はそれを見たのだが、たいした注意を払わなかったことに気がついた。

ドフィンに乗り込んだ一向は何を見ただのだろうか？ 彼らはシムカの後になんか遅れてついてゆき、シャートードゥーブル溪谷を抜けて道路を走ってき

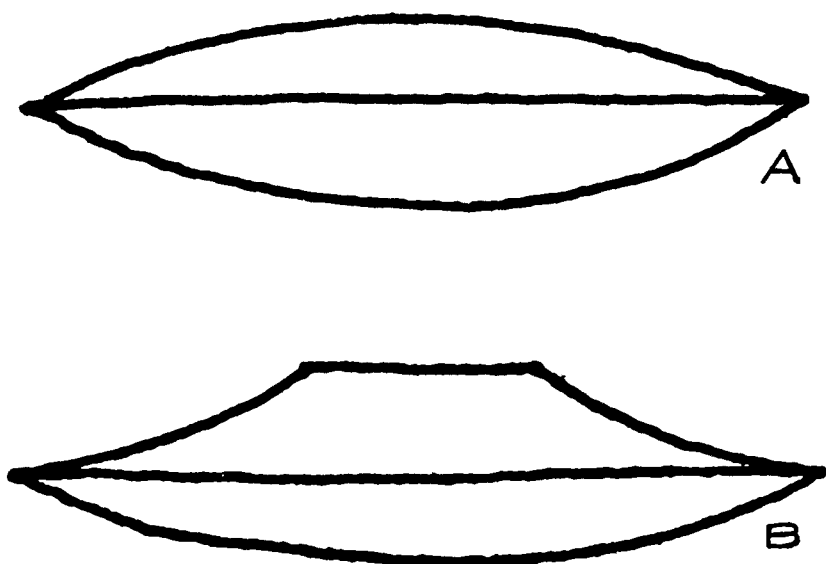


図 3

●A=ブショールがブドー畑の上空に見た円盤
B=カラファーがブドー畑の上空に見た円盤

た。そこは山腹を切り通し、ナルチュビ川を下にのぞく非常に曲がりくねったルートである。彼らがルビイヨンの村へ続く田舎道にさしかかったころ、一行の一番若い者（十八才）が二十五才の青年（最年長者）に向かって叫んだ。「とまれ！ 空飛ぶ円盤だ！」

ドフィンに乗っていた仲間みな笑って、からかったが、彼がなわも主張するので車を止めて、三人はそろって外を見た。一同の右、谷間の上空の、みんなより少し高い位置に散乱するような光を放った二個の巨大な光体が車のルートと平行して移動してゆくのが

見えた。

彼らは自動車のエンジンをかけ、森をぬって断続的にこの光体の動きを観察し続けた。すると突然消滅したが、その後カーブから現われた。みんなはその機体が今一同の右手、谷間から二百メートル上空に停止したのに気づいた。ドライバーはライトを消し、駐車に都合な場所を見つけ、三人はそろって車から降り、道路わきの低い壁のてすりにすがりついた。午前二時四十五分のことである。

彼らから二、三百メートル離れた位置に三人は卵形物体を観測した。車の一倍半か二倍くらいの長さである。物体の尾部に二彼らはそれを尾部と感じた。物体の動きから割り出したのだ。上方を向くある種の光った棒のようなものが見えた。機体の横腹には四つの丸窓がある。少し明るく照らされていたが、内部に人間がいるかどうかまではわからない。

瞬間その位置にじっとしてから機はその中心軸を中心にぐるりと回転したようである。見えていた丸窓は向こう側に消えて別のものが現われてきた。ふたたび動き始めてさらに低い位置、彼らから五十メートル、地面から二、三十メートルのところへ停止した。

この位置で物体の下側にある各種の光線が放たれ、そのビームは地面をあざやかに照らし出し、尾部の一、二の

光線は断続的に点滅した。それから光線は消え、目撃者たちは機がドラギニャンに向けてふたたび動き出すのを見た。

車にもどってからは、UFOが左の方に向きを変え、上昇し、ル・レンチュの村の上方に消えてゆくのを見たのが最後だった。すべてのことで彼らを強烈に驚かしたその物体は、動く際始終何の音もたてず静かだった。

ずっと先の方の道路上に光が見えたが、それはシムカに乗って彼らを探しにきた三人であった。どうやらシムカの連中も同じ場所で見えたらしい。彼らから二百五十メートル離れたところを無音で動く、不透明な白い光線に照らされた、カマンベールチーズの箱のような、円い物体である。

続いてわれわれは八キロ北に離れた場所に第七番目の目撃者を見つけることになった。その人は六十五才の羊飼いでボ・ソレイユ山脈の標高一千メートルの高地で羊の番をしていた。彼は文字を読むことができず、空模様で時間を計る。そのときは真夜中で、最初の星々が見われはじめていた。機体は彼から約三百メートルのところにあたり、彼と南方の古い狐小屋との間に横たわる垣のちょうど上にあつた。その形は夕四形で直径は空に昇りはじめるときの月と同じくらいだった。そのすぐあとでそれは球の形をとり、垣を越

えて消え去った。完全な無音で、犬や羊も冷静だった。この報告では時間が一致しておらず、正しい日付も不明確である。同じ物体だったのだろうか？気象観測気球と混同した可能性は？

3 ドラギニャンにて

一九六八年三月シャッセム、ソワ・モル両氏により調査。

一九六八年三月中旬の問題の夜、一時半ごろ、十六才のクリスチャン・ファブレはドラギニャンのモデル機関車クラブの会合を終えた後、町の山手にあたるガラスの道を通って両親の家に帰ってきた。

彼は段になっている近道を通ったが、町を見おろそうと振り返った瞬間、南方の丘の上にかかったオレンジ色の輝きに注意をひかれた。

この輝きは葉巻形をしていて、その径は見かけ上の月の直径と同じくらいである。その「葉巻」はドラギニャンの中央部に向かって動き、色は明るい赤に変化し、見かけ上の厚さがだんだん大きくなった。それは接近しつつ、彼はさらによく形をみわけることができた。輪部ははつきりしていて形はレンズ状、スリーブ皿をさかさまにしたようであり、そのリムは下の方で上にそるような感じである。

ドラギニャンの時計台のはぼ右にくると物体は静かに停まり、約五秒間

その軸を中心に回転しはじめ、色はその間ふたたびオレンジにもどった。そのときそれはやにわに、素速く、垂直に長く降り、同時にあちこちに振れていた。目撃者はこの降下高度を約一千メートルと見積もった。そして物体の見かけのサイズは今や少なくとも三分の一は増加した。仰角は降下の間に十五度だけ減少し、物体の色は再度変化し今度は非常に燐光性の強い青白いグリーンとなった。

降下は突然止み、物体は再度回転しはじめる。それは十五秒かそこら滞空すると突然上昇し始めてもう一度明るい赤色になった。上昇の最高点で十五秒の休みをとった後、物体はすばらしいスピードで西方セラン山脈（フラヨスク方向）のほうに姿を消した。離脱の速度は接近のときの二倍ほどである。

目撃者はスケッチを描いてくれた。
（二十一頁の絵はシャッセム氏が、更に描きなおしたもの）

注 釈

天候は上々であった。雨は昼間のうちに降ったが、ミストラル風（フランスの地中海沿岸に吹く寒冷乾燥の北西風）が吹きはじめたので空は完全にすみわたった。月は十七日にはっきり見えた。

調査中、ドラギニャンの三つの目撃

（一九六六年七月十六日、一九七二年三月二十九日、そして六八年三月中旬のこの報告）では観測された物体がどれも西にあるいは北西方向（ヴァランソル方向）に去っていることがわかった。著書「空飛ぶ円盤、二十年間の調査」の中でシャルル・ガロウはヴァランソルを通して数本の直線に触れている。その一つはドラギニャン附近を通っている。

地方の伝説と歴史によれば、ある伝説はドラゴンが昔のドラギニャン地域に出没し、それが沼沢地に出現したその町の名の由来であると伝えている。

ルミエール・ダン・ラ・ニ ユイ誌の編集長による論評

この報告のもたらす物体の動きに関連した色彩変化の興味深い調和という性質にわれわれは注意せねばならない。

ドラギニャン (Dragignan) のローマ時代の名はドラコエヌム (Dracoenum) であり、そして、一般語源学は後者の名に Drac、すなわちこの地方でもドラゴンを意味する語を結びつける。だがその町からカステラヌ街道にそって一キロメートル行ったところにはドルメン（精霊の石）もある。それは三つの直立した石とそれを覆う長さ六メートル、幅四メートル、厚さ五十センチの石板で構成されている。

ドルメンは三本の象徴的な木・イラクサ、西洋ネズ、オーク（かし）によって守られ、そして地面から巨大な火が噴き出すというすばらしい伝説を世に残している。

4 バルジュモン(ヴァール県)で

一九六九年八月十一、十二日、J・シャッセム、フランソワ・モル両氏により調査。

このケースの目撃者は約二十名の男女の若者で、バルジュモンに住んだり、休日そこをそこで送っていた人々の集まりである。

問題の夜、彼らはいつもの習慣で道路わきに並んでいるベンチにこしかけて談笑していた。十一時十五分ごろ、一人の娘が西方の空（カラスの方向）に見える光点に気がついた。仰角は十乃至十五度である。

それは普通の星よりも大きかったのが最初彼らは金星と見まちがえた。だが光点はゆくりと、垂直に、次第に大きくなりつつ燐光性のオレンジ色を放ちはじめた。それが南方にある高さ七百メートルの山（あたりまで降下してくるのに十分かかった。そのとき物体は、おそらく彼らの後ろにでもまわったのだらう、カラス方向の側に消えた。

二、三分経過するうちにそれは再度非常に低く山々の上に現われた。その

見かけの大きさは増し、コースも変化したようだった。さっきは直線に動いていたのが今度は斜めに飛行し、そしてそれは目撃者から一キロも離れていない谷の下方ドゥ川の上流のほうへ動いていた。

物体は今や無気味に彼らにせまり、大きさは自動車くらいに見える。それは円盤型で頂上にはドームがあった。機体の上部はオレンジ色にまぶしく輝いていたが、下部はグレーである。その輪郭は非常にはっきりしていた。

それは約百メートルの高度で緩慢に動き、川の水源の真上で停止したのだ。約十秒そこにとどまった後、これからゆく方角を定めるかのように機体が四分の一だけ回転した。それから瞬間にもすごいスピードで北東の、目撃者がいる方に飛び出した。彼らはそれが頭上あまり高くない空間を飛び抜けるときはっきりと見ることができた。完全に無音であった。物体の端はまだ同じオレンジ色の光を放ち、金属的な外観、すなわちなめらかで磨かれたような感じである。底部はまだ灰色で、彼らはその直径を十五乃至二十メートルと推定した。

目撃者たちはこの完全な無音で彼らにまっしぐらに向かってくる未知の物体を見たとき、その恐怖は極限に達したという。だが生理学的な後遺症はまったくなかった。

地質状況

南方の山々はジュラ紀の白雲石地帯からなっており、プロヴァンスタイプの高山性石灰質帯とプロヴァンス地方バス東部の白雲石帯との間の過渡的ゾーンを形成している。

ドゥ川の源流付近の一带は石灰質の層の下でしばしば発見される砕石で形成されている。

バルジュモンは砂の多い赤色粘土コイバーの層（コイバー統）の上にある。また北方には多少亜炭があり、北東方面には石炭も発見されている。

地質構造

大規模な断層——それはまさに東西に走っている——がドゥ川の源流から始まっている。さらに小規模な二つの断層が南北に走りバルジュモンに接している。一方は北西方面にもう一方は北東に位置している。

ルミエール・ダン・ラ・ニユー誌編集長の注訳

この注意すべき目撃は再度ある特殊な点を強く打ち出しているように思える。「機械のようなもの」が空からやってきて、ある正確な場所すなわちドゥ川の源流をめざしてゆくのが目撃された。しかもそこにはある断層が位置していたのだ。断層と川の源流とは、今やわ

れわれの全神経を集中すべき点であるらしい。

ゴードン・クレイトンの注訳と論評

ドラゴンもしくは大蛇の概念はどこでも不思議な役割を演じている。たとえば、聖書中エデンの園の物語や古代中国（その竜はウェールズの二脚竜のような翼をもっていないのに常に空中を飛ぶ）、そしてある翼のある大蛇であるケツァルコアトル（マヤ族の主神）の出生地の中米などであり、現代ではネス湖やカナダのオクナガン湖、北半球の少なくとも八、九湖とマレーシアの一つの湖がある。一九〇八年六月三十日午前七時に北東シベリアのボドカメナヤ・ツングースカ川バルバラ上空に起こった大爆発の起因であったあの怪「宇宙物体」を目撃したヤクト人たちも、あれは「ドラゴン」か「大蛇」だったといっている。

ドラギニャンの古代ローマ時代の呼び名が Dracenum（すなわち「竜の町」）であったというロバート・ヴェイス氏の助言は、特にUFOがそこでコンスタンティンに報告されている点で非常に興味深い。このすべては、最近FSRに記事を出した友F・W・ホリデイ君の製粉所に送られる良き穀物となるであろう。

ついでながら、これらドラギニャン

での調査はまた「読者は気づかれなかったかも知れないが」羊飼いがその伝統的な仕事で、ある夜の羊番をしていたときにいずれもUFOを目撃したという二つのケースをも含んでいる。われわれがあまりにもモンスターやドラゴン、そして悪魔的な事に深入りをしすぎると感じられる方々にはこういっておこう。すなわち、コインの両面はそんなにひどく離れてはいないし、ときとして私たちがひどく聖書的になったように見えるだろうが、われわれの分野ではべつに新奇なことではないと。

林陽訳

●好評発売中！

なぜ空飛ぶ円盤は来るのか

フレッド・ステックリング／久保田八郎訳

¥550 円80

●テレパシー●生命の科学

ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳

¥350 円80

¥480 円80

文久書林

東京都文京区白鳥1-29-12
振替・東京2521 Tel. (813) 2495

◎円盤飛来の真相と
人間の真の生き方を示す名著3点。

パプア島の円盤騒動

●ハイマン・クラットウェル神父

大酋長の息子がアダム
スキー型円盤を目撃／

円盤の大きさがわかると面白いのだが、着陸もしなかったし正確なことは不明である。ジル神父の概算したところでは、乗員の身長をふつう（約六フィート）とすれば円盤の直径は、基部でおよそ三十五フィート、上甲板で二十フィートとなる。

5 第三夜の乱舞

六月二十八日の晩も午後六時四十五分ごろから一機のUFOがあらわれ、しだいにふえて午後十一時には八機がボイアナイの上空を乱舞したが、高度はかなり高く、人影も見られなかった。十一時二十分ごろ鉄板を落としたようなすどい金属性の音響が本部の上空にひびきわたった。十一時半にはみな寝室へはいったが、UFOはまだ上空を飛びまわった。

× × ×

その後はボイアナイの空も静けさをとりもど

したようで、ジル神父の報告も以上で終わっている。

●ギワ、バニアラ両地区からの証言

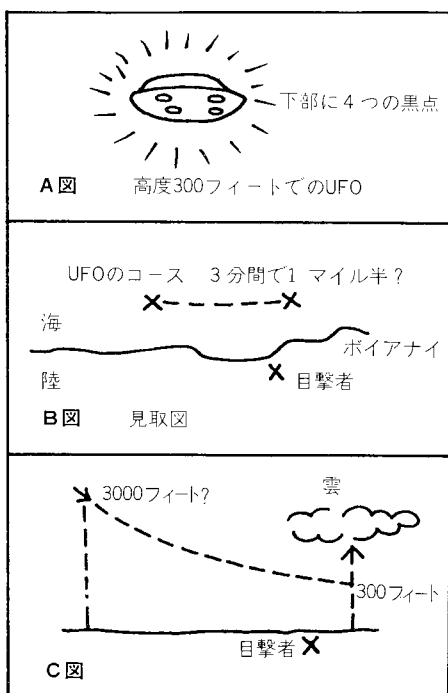
1 報告書の真疑をめぐって

ボイアナイの騒ぎがあまり風変わりなので、信じる人たちと頭から否定する人など意見が大きくわかれてしまった。ビクトリア州空飛ぶ円盤協会のピーター・ノリス会長は一九五九年九月十二日空軍情報部あてに書簡を送り、空軍はボイアナイ事件を調査したのか、またどのような結論に達したか照会した。空軍は、F・E・ラング中隊長の署名入りで次のような回答を送ってきた。

「ジル神父以下三十八名の日撃した物体は、有人航空機ではないと確信します。方位と角度を分析した結果、光体のうちすくなくとも三個は木星、土星および火星であると思われます。光



●目撃証人、ボイアナイ本部付看護婦のデジー・コラウナ嬢（左）とアニー・ボレワ嬢



- 図A 300フィートの高度のUFO
- 図B 各位置
- 図C 高度

う。脚も引込められていたのかもしれない。

板も胴部のかげになっ

て見えないこともある

う。脚も引込められて

いたのかもしれない。

2 アーネスト・イーヴネット氏の場合

六月二十六日の夜、ボイアナイの対岸ギワの沖合にサマライの貿易商、「アーニー・イーヴネット」氏が持船シリウス号のいかりをおろし

の屈折と熱帯の複雑な気象状態のため光体が運動したように感じられることがあります」

乗員の見えた母船のことはふれてないが、「説明不能」で片づけたものであろう。協会は、前述の三惑星がUFOと誤認されそうな位置に当時あったかどうか調査中である（註、本報告が書かれたのは一九六〇年三月である）。

だが、グッドイナフ湾周辺の上空に出現する怪光を見あげていたのはボイアナイの人たちだけではなかったのである。

ていた。以下は氏が直接私に話してくれた目撃談である。

「午後七時のニュースをきいていると、明るく輝く緑色の光体が白い炎の尾をひきながら北北東から飛んできて、水平線から約四十五度、およそ五百フィートの高度で静止しました。同時に光も消えたが、窓だけは明るく見えていました。全体のシルエットはラグビー・ボールの形をしており、私に面した側には四つか五つの半円形の窓があつて、その上には輪か帯のようなものが物体をとりまいていました。

船での経験から、大きさは六十——八十フィートくらいと推定しました。四分ほど静止したのちふたたび動きはじめた物体は、「ウーンブ！ウーンブ！ウーンブ！」ときこえる音を発して明るい緑色に輝き、矢のように飛んでボイアナイ西方の山影の

かなたに消えました」

この物体は長円形で

上甲板もなかったよう

だし、ボイアナイの円

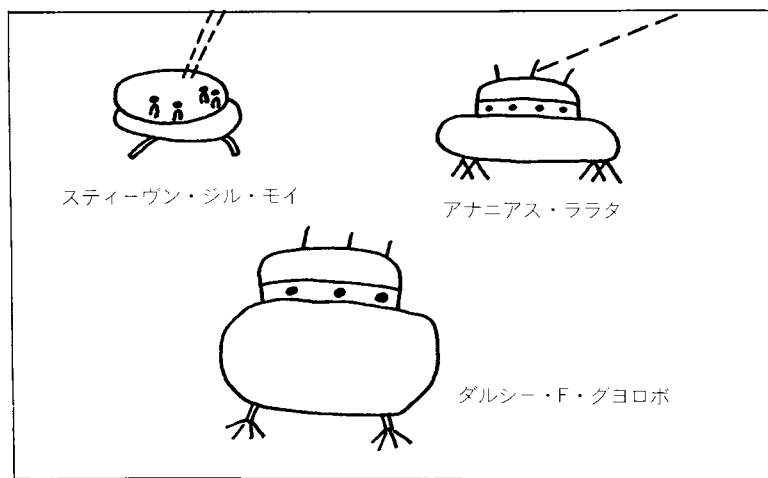
盤とは別の種類に属す

るものかもしれないが

円盤もななめに見れば

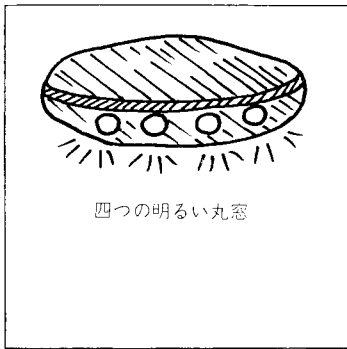
長円形に見えるし上甲

板も胴部のかげになっ

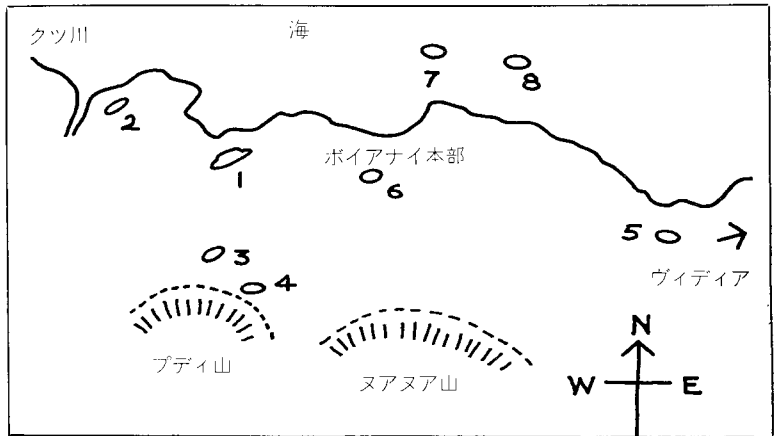


●目撃者によるスケッチ

お互いに知らない同士のジル神父とイーヴネット氏が、十五マイルもはなれて同じ夜に同じような話をデッチあげようとは考えられない。いずれにせよイーヴネット氏の目撃した物体も、当夜グッドイナフ湾上を乱れ飛んだUFO大部隊の一機であつたことはまず間違いないと思われる。



●1956年7月6日、オーウィン氏
夫妻とスミス氏の目撃した物体
スケッチはスミス氏による



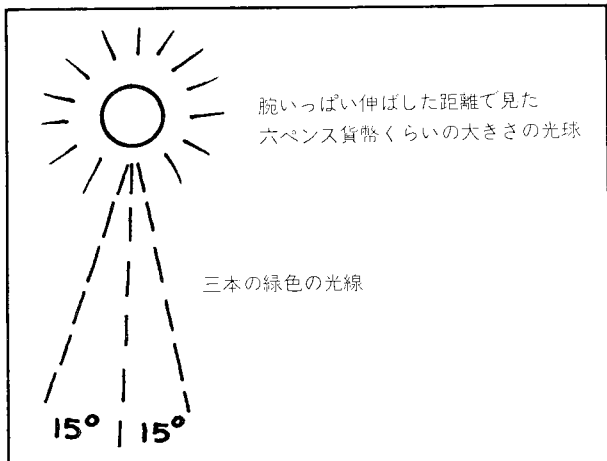
●大体の位置

3 バニアラからの証言

パプア島ミルン湾地区バニアラ区副知事ロナルド・オーウィン氏の報告。

「一九五九年六月二十七日十九時四十分、バニアラ北北西約八、九千フィートの上空に丸い光体が白く輝いているのをR・L・スミス氏が発見した。氏が教えてくれたので私も妻と二人でこの物体を目撃した。しばらくじっとしていた光はやがて西寄りにゆっくり動きはじめ、規則正しく明滅する緑色の光線を三条、下部から放射した。空には所々に雲があったが、光体が近くを通過すると雲もボーッと照らしだされて見えた。波止場から見ていると、光る本体の下方には青銅色の円盤が、間隔を一定にたもちながらついてくるのに気づいた。二つの光が西空の低い雲のかげに消えたのは二十時四十五分であった」

三条の光線のことをスミス氏にたずねてみたが、これは物体（大きさは腕をいっぱい伸ばして見た六ペンス貨幣くらい）の下部から一本は垂直に、他の二本はその左右それぞれ約十五度の角度で放射され、色は緑で針のように細く、点滅はしないかわりにまるで出したり引込めたりしているように伸縮をくりかえしていたという。どう見てもただの光線で、決して脚のように実体のあるものではなかった。



●イーヴネット氏の目撃したUFO

「六月二十八日十八時二十分、妻と私は、昨夜の怪光が同じコースを進んでくるのを見た。その光体は昨夜三十分かけて進んだ距離を今度は一分で通過し、その間に五千フィートほど降下した。速度を早めるにつれて輝きもまぶしいほど明るくなって水面に反射した。着陸するのではないかと考えた私は、パジャマ姿ではだしのまま波止場まで走っていった。怪光は速度をおとして西の空に静止し、二十一時十五分に姿を

消した。二十時五分からはスミス氏も仲間に加わった」

その夜もくつついていた青銅色の円盤は、怪光が高度を下げたとき本体の中へ飛びこむように消えた。オーウィン氏はいう。役所をおとずれた海軍情報上官は、それは方角からみて金星でしようと話していたが、オーウィン氏は今でもちがうと思っている。

4 シディアからの報告

この時期最後の報告は、ポイアナの南東九十マイル、シディアのローマ・カトリック伝道本部からふたたび送られてきた。

「六月二十八日午後八時三十分、満月の半分ほどもある火のような光体が西空を遠ざかってゆくのを、教団の職員二名が目撃しました。怪光は針で突いたほどにしか見えなくなったころふたたび明るく輝いたのち、青い色に変わって消えました。約十分間のできごとでした」

サマライ港務官H・ライディング氏は、大気の温度変化による光線の屈折のため金星を誤認したのだらうと語る。もちろん金星が原因だった場合もあるかもしれないが、個々の目撃者の証言にはいちじるしい一貫性が感じられるし、第一、怪光が目撃されたのは金星がしずんでかなり時間が経過してからが多いためである。ともあれ、六月二十六日から二十八日にかけての騒ぎはこれで一段落ということになる。こん

な地球の一隅の目立たぬ土地に何者がなぜあれほど大挙して押しよせたのだらう。納得できる説明はまだだれもしてくれない。

●メナピ上空のUFO

六月と七月はそれぞれ目撃報告十四件をかぞえ、円盤活動のピークと思われたが、八月には十三件が報告されて第三位を記録した。私は六月の大部分と七月上旬を高地ですごして騒ぎを知らなかったが、帰ってみるとネコもシャクシもUFOの話ばかりしていた。

1 宙返りをしたUFO

デヴィッド・デュリー神父はドグラの聖アイダン校の校長だが、戦時中はオーストラリア空軍の航空兵で、飛行機と星のことなら何でも知っている。その神父から次のような報告がよせられた。

「七月六日午後八時四十分ごろ、校舎の北西グバナオナ岬の上空数度の位置に、雲にかくれた月のようなぼんやりした白い輝きを発見したのですが、やがて輝きはまぶしい白光に変わってすこし南に移動し、ふたたびボンヤリした白光からほんの微光にまでおとろえました」

五分後に光体はふたたび明るく輝き、反時計方向に円運動をしたのちどんどん南に移動して午後九時に山の後にかくれました。双眼鏡で見

ると形は円盤状で、色はオレンジでした」

これはデュリー夫人、エドワード・ダムズ神父（学校付牧師）、ジル神父、それに十数人の学校職員が同時に目撃している。

2 同じ夜パニアラでふたたびスミス氏の話

「先日（六月二十七、八両日）の物体がまた出現しないかと、七月六日の夜も空を見ていました。午前〇時五十分ごろ目をさますと、とても明るい光が空に見えました（注、金星はずっと前にしずんでいる）。じつと見つめていると、二十七日の怪光と同じものに違いないという確信を得ました。ただし青銅色の円盤は見あたりませんでした」

十五分ほどながめていると、流星のような光が物体の下部から、地上めがけて約四十五度の角度で矢のように飛びました。さらに五分後、同じような光が今度は逆の方向に飛び出しました。一時間後に光体はやはり西の空に消えました」

一言付け加えさせてほしいが、流星がある星から発したように見えることも一度くらいはあるかもしれない。しかし、五分間で二度も同じような偶然がくりかえされるとはちょっと考えられないことではないだろうか。

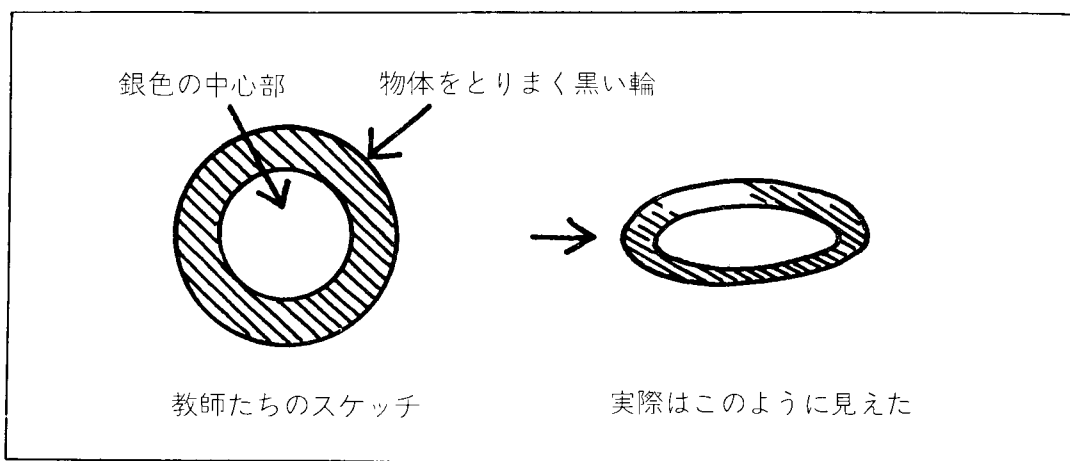
3 メナピ上空の銀盤

七月にはいると、八日にはドグラで、九日もドグラで、十八日にはディディワで、二十日にはトロール船からと、ぞくぞく目撃報告が届くようになったので、私たちは日没から午後九時まで交替で見張りに立つことにした。ところが二十一日、UFOはメナビに最初の昼間偵察をしかけてきた。

朝の礼拝のため生徒たちは教会さして行進してきた。午前九時十五分、約半分の生徒と数人の教師はもう教会の建物の中にはいっていたがまだ生徒は百人くらい、男性教師が二人、女性教師が六人、外に残っていた。

その時、本部の西の丘のむこうから輝く光が青空にあらわれ、どんどん大きく接近してきた。近づくにつれて、金属のように光る円盤で周囲には黒い輪がとりまいてることまでハッキリ見わけられた。“太陽よりすこし小さいくらい”の大きさで、約三十度の高度を本部の北寄りに、速度は飛行機よりはよかったが音も立てず飛行雲もひかずに通りすぎた。かなり遠くなって風にあおられたようなゆれかたをして、北東のヤシの葉かげに消えた。

オーガスティン教師が私を呼ぼうと思ったときはもうおそかった。しかし目撃者は百人以上いる。それに私はオーガスティンとエーベル教師の二人を、互いに連絡できぬよう教室の反対側にすわらせて、目撃した物体をスケッチさせた。ところが、“銀の皿のような形”という点で、両者はピッタリ一致したのであった。



●1959年7月21日、メナビに出現した物体 7人の教師と多くの子供が目撃した

これは日中の事件であり、天文現象といういいぬけはあたらない。気球ならあんなに速く飛ばないし、飛行機なら爆音がきこえるはずだ。私も見ることができたのに、と思うと失望の念はかぎりなく深かった。

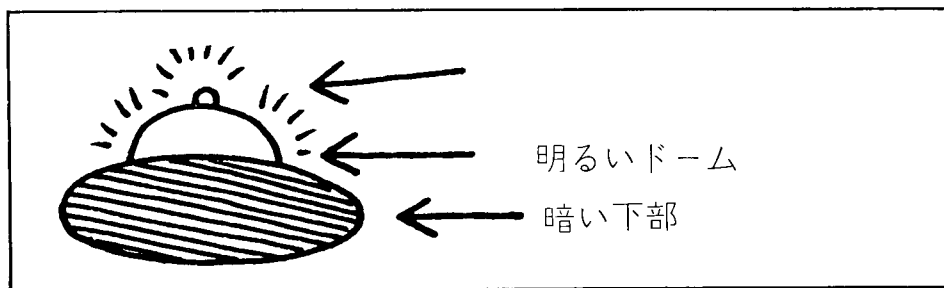
4 アダムスキー型円盤がバナバに出現

七月二十二日の午後八時ごろ、あいかわらず見張りを続けている私のところへ、本部の用務員のジョージ・タウナヴェンが興奮のあまりブルブルふるえながら息を切らしてかけつけた。

メナビから一マイルほどはなれたとなりの入江で漁をしていたジョージが、浜辺に一人立ってアロラ湾のむこうのバナバのほうを見ていると、背後の岡の上空から突然巨大な物体が出現して、彼とバナバのあいだの海上を低空で遠ざかっていったというのである。船のようだったが形は円盤型で下部は暗く、上部にはドーム（彼は手まねで丸い形をこしらえて“頭”という言葉を使った）があり、頂上にはティリー・ランプのような光がきらめいていた。乗員は見えなかったがどう見ても人間を乗せるよう設計されたという感じで、数秒で視界から消えさってしまった。

スケッチをかくように命じたが、教育を受けていないし画などかいたことがないのでどうもうまくいかない。ましてや遠近画法どころではないので私が彼の言葉どおりにかいてみせる

真そっくりの物体を目撃したとは話がすぎているという点である。だが私は以上二つの理由のためにこそ彼を信じたい。円盤写真など見たこともない純真なパプア人のジョージにそんな



●1959年7月22日、ジョージ・タウンヴェンが目撃した円盤

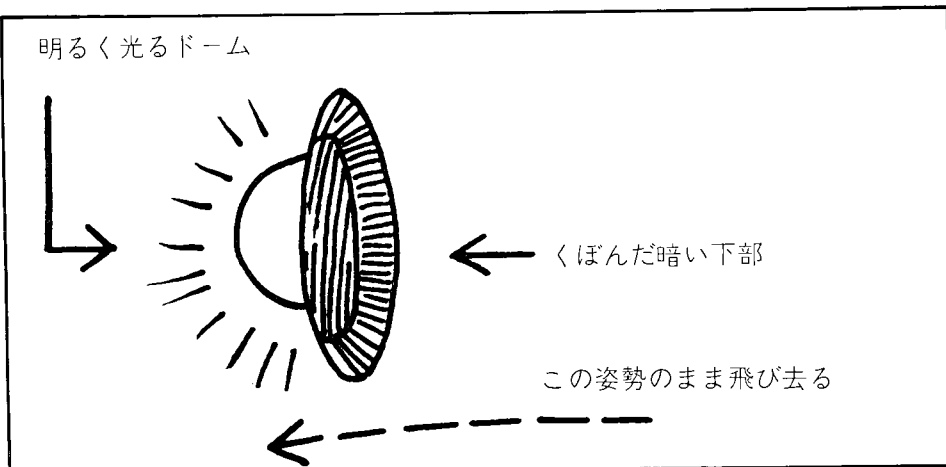
と、「そうです。そんな形」と答えた。あとからアダムスキーの円盤写真を見せると、彼は目を輝かせて「そうです。そのとおりです！」と叫んだ（下部の着陸装置は見えなかったと彼はいうが、下部は暗かったから無理もなからう）。

二つの理由のため彼の言葉を信じない人がかなりいる。第一は無教育なパプア人ひとりだけの証言だという点で、第二はどこにでもあるアダムスキーの写真

5 またもドームつきの円盤が……

二十三日夜、二十四日夜と円盤出現は続いたが、私たちは室内にいたために見そこなった。二十五日の夜は、ヴェラ、モンテン、クテの三人の高地土民が、メナピから帰宅のときゆうガイアワナキの海岸で野宿していると、上空にまぶしいほど明るい光があらわれてあたりは昼のようにてらしだされた。午後七時半だった。海のほうからきた巨大な丸い物体が、ヤシの木の上空をかすめて奥地のほうへゆっくりと飛び、間もなく木のかげに消えたのである。彼らは口々にその巨大さを強調した。形はとたずねると、片側は「バケツの底」のようだったという。くぼんでいて周囲にはふちのようなものがあるという意味である。この面は暗かった。もう一方の側はふくらんで丸屋根のようになっており、明るく輝いていたそうだ。皿を一枚裏返しにしてその上にコップをのせて見せると彼らは「そう、でもそうじゃなくてこんなふう」といいながら皿をもった私の腕を、皿が垂直になるまでひねった。つまりその物体は、上部が丸屋根で下面はへこんだ円盤形だが、横

なものがデッチあげられるはずがないし、学校こそ行っていないが彼は大酋長の息子でとても利口な少年なのだ。八年前から彼を知っている私は、彼が証言どおりの物体を見たのだと信じている。



●1959年7月25日、ガイアワナキのUFO

になったまま飛んでいたらしい。形はすこしちがうし飛びかたは大いに異なるが、ジョージの話もこの体験で立証されたようなものだった。

●球形の物体その他

1 出現は八月も続く

七月二十七日と二十八日の二回にわたり、薬局員のエドワード・ヤカワが一機の白く輝く円盤を目撃した。

八月五日には星のような光点が五個、曲線形の編隊で赤、緑、白と変化するが陸上から海上へ飛んでゆくのを、メナピの東一マイルのパラエバエバラにいた薬局員たちが見ている。その後も少々あいまいな報告はあとからあとから届いていた。

2 バニアラ上空の三個の球体

休暇でオーストラリアに行っていた例のオーウィン氏の夫人が帰ってきた。彼女はUFO騒ぎにどきもをぬかれ、すこし不安になった。その夫人が十日には一機ならず二機もの物体を目撃してしまったのである。

午前三時五十分ごろ赤ん坊が泣くので目をさました夫人は、明るい光を上空に見つけた。オーウィン氏を起こすと、氏は庭におりて行ったが、夫人は二階の窓ぎわに残っていた。

最初ヤシの木の間に見えていた光体は、角度にして約二十度の高度まで上昇し、白、緑、オレンジ、青銅、赤と規則正しく、しかし急激に変化をくりかえした。形は球状だが、頂上にも

う一個のやはり明るい光球がついていた。七月二十七、八日の両日に目撃されたのと同じような小さな青銅色の円盤が、日に見えない糸で結ばれているように同じ間隔をたもって追いかけていたが、このほうは輪郭がボンヤリしていた。

運動ぶりはまことにでたらめで、上下左右に方向を変え、時には振り子のように、時にはジグザグに飛び、その間すこしずつ上昇を続けた。

午前四時十五分ごろにはもう一機同じような球体が出現したが、今度は青銅色の円盤はついていなかった。二機は間隔を同じにたもったままはげしい運動と変化を続け、やがて二番機が先に姿を消し、最初の光体は空がすっかり明るくなった午前五時半ごろになってから消えさった。見えなくなった位置は、角度にして三十五度くらいだったらしい。

3 爆発する光球

巡回士官のR・L・スミス氏はちょうどそのころ公務出張中だったが、帰ってくるなり私にこういった。「神父さん、世界一すばらしいUFOを見てくださいましたよ、いばるだけあって、氏の話はなかなかおもしろいものだった。」

「最初は八月三日の午後六時ごろ、マボウナの宿舎の前に立っていたときのことです。真北の高空に、三条の光線を下部から放射する白い光体が出現して、三十分ばかりじっと静止してい

ました。三条の光線のうち一本は垂直に、他の二本はその左右約十五度の角度でひろがり、明滅というよりもむしろその物体の中に引込んだりまた出てきたりくりかえしていました。」

八月四日はワクアップにいましたが、午後七時になると前夜の光がまたも同じような位置に姿をあらわし、十五分ほど同じ輝きかたをしていました。

スミス氏もなかなかUFOづれしてきたと見える。

「八月八日にはビニグニへ行きましたが、宿舎の前で数人のパプア人と話していると午後六時半ごろ、今度は北東の空にまたもや例の光体が姿をあらわしました。土民たちに注意すると彼らはこういいました。『タウバダ(旦那)、あれならよく出ますよ。ここひと月ほどはしょっちゅう見えます。いまごろになると出てきて、九時すぎると山のほうへ行くね』私が観測をつづけていると、なるほど九時十分になるとその光はいきなり東へ動きはじめてマネアオ山のほうへ消えました。」

その間、位置は変わりませんでした。大きさは腕いっぱいに伸ばしてみた六ペンス貨幣ほど大きくなったり、また豆つぶほどに小さくなったりしたから、私たちに接近したり遠ざかったりしていたかもしれせん。三条の緑色の光線はやはり見えていました。

八月十四日の午後七時半ごろ、怪光はまたもやムカワの西空にあらわれました。今度はかな

り低く、最初の三十分は静止していましたが急に不規則な動きを見せるようになり、色もオレンジに変わりましたが、八時半ごろいきなり二シリング貨幣ぐらいの大きさにまでふくれあがると、血のように赤い閃光を放ちて爆発して消えてしまいました。あれほどの爆発なのにちっとも音がしなかったのはおどろきました」

以上がスミス氏の物語である。物体は本当に爆発したのだろうか、それとも爆発したように見えただけなのか。あるいは物体が目にもとまらぬほどの高速で飛びさるときにエネルギーを爆発的に放出したのかもしれないし、正体はガス状の火球で最後に分解してしまったのかもしれない。ひょっとしたら仕事を終えた無人観測機が処分されてしまったのかもしれない。

九月になって私はビニグニ、バイアワ、ケワ、ンササプの各地をおとずれ、住民たちの話からスミス氏の体験が事実だったことを確認した。そのあと十月まではこれといった目撃報告も届かなかった。

●その年最後の出現

1 プマニ上空の色光

グッドイナフ港とコリングウッド湾にはさまれたグオイラ山のふもとにプマニには私たちの支部がある。十月二十三日の午後十時すぎ、支部をあとする青年教師ミカ・アイガバは、大きな光体が東から飛んでくるのを目撃した。

光体は丸く（円盤状か球状は不明）、動くときは特にまぶしいほど明るく、緑、赤、黄の三色をもとに色々変化した。大きさは月の半分くらいだがずっと明るくて、飛行機よりもはやかった（当地ではジェット機は飛ばないので、土民のいう飛行機とは軽飛行機のことである）らしい。低空をグオイラ山めがけて飛んでいったが山に近づくときと急上昇して、山頂に一時間ほど静止し、その後北東に移動してモナリとミディノ両部落の上空を通過して方向を変えたと東の空に消えた。

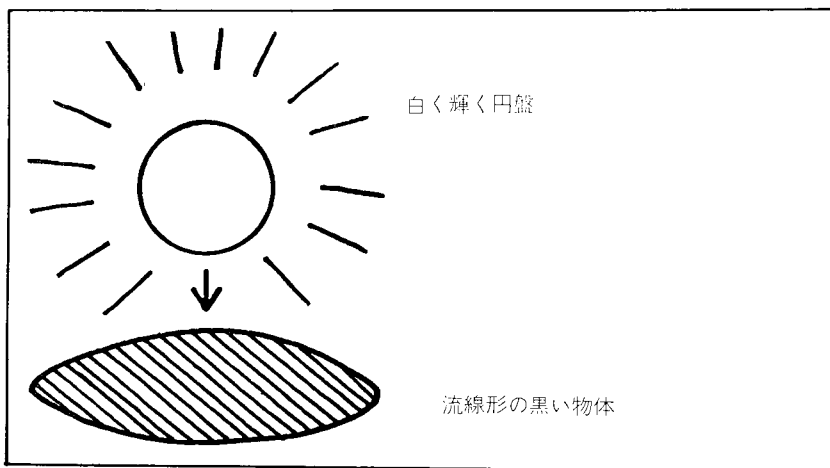
ミカとその助手のジョンから話をきいた私は二人を徹底的に質問攻めにしたが、二人の作り話とは考えられなかった。

2 雲か母船か？

それから一カ月は何事もなくすぎて、怪光も故郷へ引揚げたなど私たちが思うようになったころ、助祭のアルバート・M・リリカ神父がやってきてまたまたおどろくような報告をした。

コヤバギラの支部の礼拝を取り行なうため出張して一夜をすごそうとしていたリリカ神父は病院夫のセシル・マタヴォイアアの呼ぶ声に外へ出た。時刻は午後七時半、支部のジャフェット・キラカイ教師も一緒だった。ボイアナイの方角の上空に明るく輝く円盤（または円球）が見えた。

大きさについては、ジャフェットは「月ぐら



●リリカ神父の目撃した円盤と母船(?)

い」といい、アルバート神父は「月の半分くらい」といっているが、月よりもはるかに明るく輝いていたことと真白に光っていたことでは二人とも一致している。

円盤よりすこし下方には黒い流線形の物体が飛んでいた。空も暗いので見にくかったし雲のようにも見えたが、最後まで形を変えなかったのと動きかたから見て雲ではなさそうにも思わ

れた。

光体はやがてゆっくりと下降して、黒い物体のなかへ消えてしまった。いや、背後にかくれてしまったのかも知れないが、とにかく光体のほうは二度と姿をあらわさないで、黒い物体だけがもとの位置に残ったまま、一時間後に目撃者の三人が寝室に引取るまで動かなかった。

当夜は真夜中すぎから三日月が出るはずだったので、その円盤は月ではない。また、円盤が背後にかくれるときには暗い物体の輪郭がクッキリ見えたことから、暗い物体も雲ではないようだ。小型機を「母船」が収容したのだろうか。

3 ドイニ島上空の閃光

日付ははっきりしないがもう一つ重要な事件が発生した。九月上旬のことだが、私の耳にはいったのは三カ月もあとになってからだった。目撃者はサマライの建設業者アーサー・ジョブ氏で残念ながら他の証人はいないが、私の調査したところでは彼が「何か」を見たことは間違いないと思われる。

午前二時ごろ何かの用で外に出たジョブ氏はドイニ島の方向の上空に目くらむような光が見えるのにおどろいた。その怪光は長軸を縦にした長円形で輪郭はハッキリしないが、アセチレン灯のように青みがかかったまぶしい光をはなつて輝いていた。そのうち怪光は島の前面に降

下し、やがてすこし右（西）に動

いてとなりの島との中間で静止したが、十分ほどたつとふたたびゆっくりと右に動きはじめて島の前面を通過しながら上昇し、しだいに西へ遠ざかっていった。つかれているし眠くもあったのでジョブ氏はそのまま寝てしまったが、最後まで見届けなかったことをあとになってくやしがついているらしい。

だが、その光を船の灯火とこじつけたけれども、氏は次のような理由からUFOだと信じている。

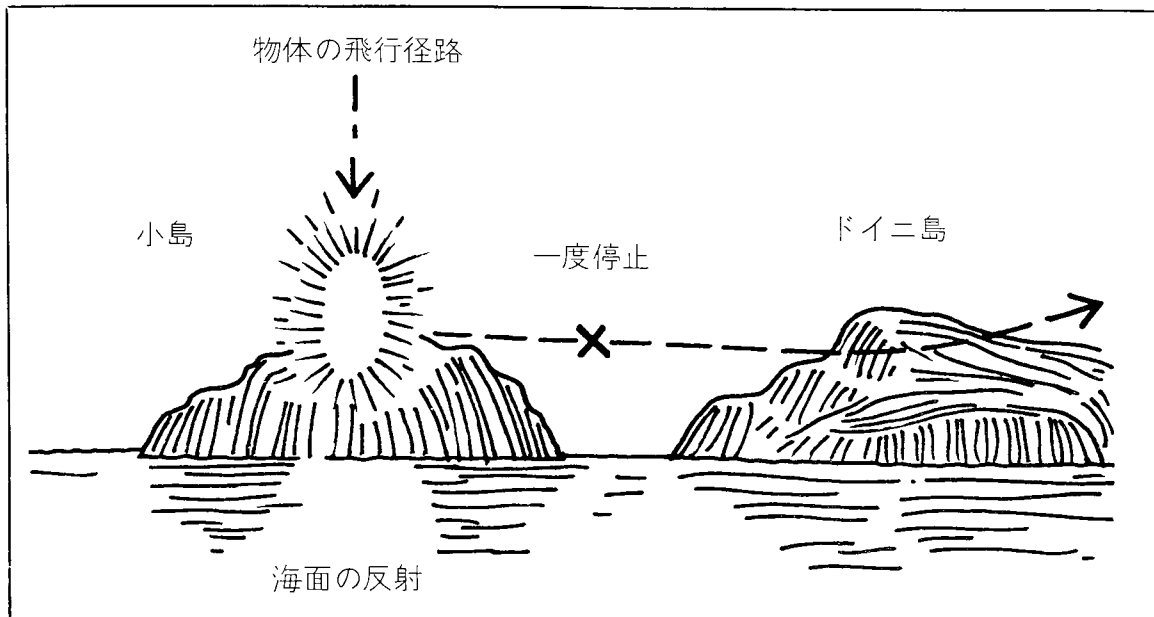
○サーチライトをまともにくらったほどまぶしかった。

○下方の海面まで明るく照らしだされたが船など影も形も見えなかったこと。

○その奇妙な動きぶり。

○音がしなかったこと。サーチライトでもあれほど明るく見えるには船はかなり近くを通らねばならないが、それならエンジンの音がきこえるはずである。

4 出現はまだ続くか



●アーサー・ジョブ氏の目撃したUFO

その後は何かを見たという話も何件もあったが、公式には年末まで何の報告もなかった。私是一九六〇年の二月に休暇で島をはなれたが、そのとき一月にだれかがUFOを見たといううわさを耳にした。確認されればこの報告書の追加として発表したいと考えている。

●手がかりはあるか

以上で判明した事実はすべてお話したが、UFOの行動と目的を推察する手がかりになるだろうか。わずかなデータではあるが、次のような利点もあると思う。

○事件が比較的せまい範囲に集中しているため検討が楽である。

○ひきつづいて起こった事件なので彼らの行動を推測しやすいこと。

○関係者も私もよく知りあった仲なので、詳細な点まで容易に検討できること。

○文化の影響に毒されていない場所であるため、混乱をまねく要素もすくないこと。

1 地域的集中性

七十九件の目撃報告の大部分(六十件)はグッドイナフ湾附近の上空が無台であり、ポイアナイ、バニアラ、ギワ、メナビの各部落はこの地域にある。そして、残った十九件の多くはサマライとシディア島付近で目撃されている。

この辺一帯はたぶん大断層線上にあるのだと思う。火山性の地形であちこちに温泉がわいているが、一部のUFO研究家によれば、UFOの出現と大断層線とのあいだには何かの関連性があるという。彼らが利用(あるいは研究)したい特殊な鉱物か地磁気が付近の地下に存在しているのではなからうか。

2 時間的分布

UFO出没のピークは一九五九年の六、七、八月だが、前ぶれめいた小さなピークが、一九五八年の十、十一月にあった。ルッペルト報告書によると一九四七―八年の米国における円盤さわぎのピークがやはり六、七月で、そのあと小さいピークが十一、十二月にある。この時期に火星や金星の位置にいちじるしい変化でもあったら、話はおもしろくなるのだが……。

彼らは月はじめよりも月末近くにひんばんに出没する傾向があった。このことは月の位置との関係をあらわすものではなからうか。月がUFOの基地に使われている可能性も考えられるからである。

また、最初のころは星かせいぜいティリー・ランブほどにししか見えなかったものが、しだいに大きく見えるようになり、末期には明らかに大きな円盤か円球となってきたことはどうだろう。初期の偵察は高空から慎重に実施し、安全を確認したのち低空で記録や観測を行なうよう

になったのではなからうか。だがこれも単なる推測にすぎない。

3 関係者の親密度

目撃者と私、また目撃者同士がよく知り合った仲であったことは、事件を調査し確認する上に非常な利点となった。作り話を合作されるおそれがあるのではないかという人もあるが、それはちがう。報告は別々に私のところへ届いたうえ、事件後も目撃者間の接触はほとんどない様子だったのである。

前にも述べたとおり、パプア人はバカではない。自然科学の裏付けこそないが豊かな知識をそなえた誠実な人ばかりである。正直な人でも間違ふことはあるだろう、酒に酔ったり幻覚を見たりした結果ではないかと反論する人もいるけれども、前述した多くの目撃者のうち酒をたしなむのはわずかに二人だけである。また、一度に三十八人という多数の目撃者が同時に同じ幻覚を見るとは考えられないし、幻覚を双眼鏡で観察したりカメラにおさめたりすることはできまい。

残る反論は、誇張があるのではないかという問題である。なるほど、ある程度の誇張はあるかもしれない。しかし、メダカをつかまえてクジラをつかまえたといえ、これはもうウソつきということになる。誇張の背後には真実があるのだ。目撃者はみなでできるだけ正確に自分の

体験を伝えようと努力しており、故意に話を誇張しようとする気持はなかったのである。

4 物体群の正体は何か

物体の多くは何かの機械であるように思われる。ポイアナイやメナピの場合、表面は金属のようで窓があり、脚や上甲板らしいものも見えたことから間違いなさそうである。

光球や円盤は固体であるかどうか不明だが、その動きかたは何者かの意志により操縦されているとは思えない。ジル神父たちは乗員を目撃しているから確かであるが、中には遠隔操縦の無人機もあるだろう。ガス体ではないかと思われるものもあったが、これにも確証はない。

爆発したものもあったがこれも不思議であるし、故意か偶然かもわからない。不用になったか修理不能になったかして処分されたのかもしれない。

とにかく、その正体はいぜんとしてナゾのままである。

5 物体の動力について

この問題だけでも解決されれば地球の科学に大革命が起るだろう。物体はいつまでも静止していることもできるし、あらゆる範囲の速度で運動することもできる。姿を消したように見えるのは、急に加速して目にもとまらぬほどの

速度で飛び去るからではあるまいか。また、その運動性のすぐれていることも特徴の一つである。それらはいっさいの重力、慣性、空気抵抗とは無関係のようだ。質量をもたないのではないかとさえ思いたくなるほどである。

物体が加速するにつれ光度も強くなることも共通の現象であり、推進手段に何かの関係があると思われる。UFOは一種の電磁場を動力に利用しているのではないかというプランティエ中尉の説(エーメ・ミシエル著「空飛ぶ円盤は実在する」)が思い出される。

だが、こういう問題はしよせん素人の手にはおえないものであり、専門家の研究に期待するほかはない。

6 円盤はどこから来るのか

これも大問題である。解決されればUFO問題はすべて解決されるだろう。研究者の活躍に期待したいところだ。しかし、私にでも解答できそうな小さな疑問もある。

たとえば、彼らは米国からではないかという質問である。それなら米国はなぜ調査委員会を設立したのだろうか。他国はなぜ領空侵入に対して抗議しないのか。また空飛ぶ円盤ほどの武器があったら、米国だって時代おくれの大陸間弾道弾に巨額の費用をつぎこんだりはしないにちがいない。

ソ連からではないかという質問にも同じこと

がいえ。とにかくあの物体はどう見ても「航空機」というよりも「宇宙船」という感じである。地球上どの地点に出現する場合でも、途中で発見されたことがない。これは、宇宙空間から目的地まで、いっせきに降下してくるからではあるまいか。

彼らの基地は月か、金星か、火星か、それとも太陽系の外の星雲か。それはだれにもわからない。まだ証拠が足りないのだ。しかし、証拠は積み重ねられつつある。私のこの報告もそのほんの一部に付け加えてもらうために書いたのである。

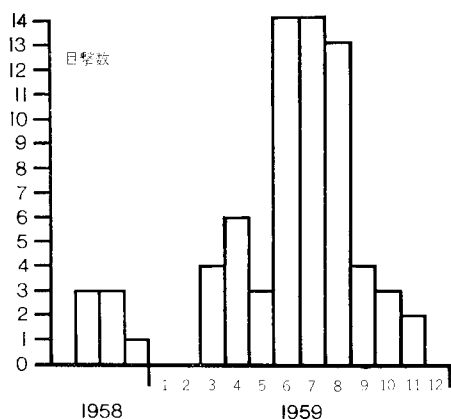
7 円盤の目的は?

これこそ他のいっさいの疑問が解決するまではナゾのままかもしれない。バプアで一連の事件からは、ほんのかすかな光を感じることができるだけである。

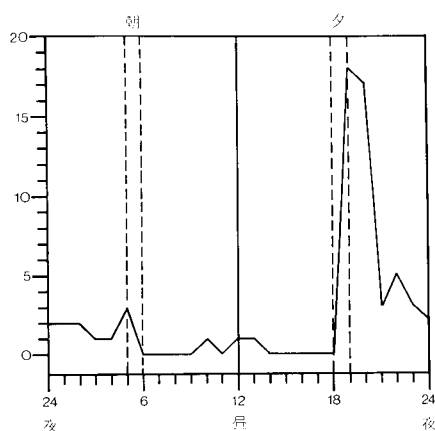
第一に、彼らに敵意があるという証拠はないということだ。乗員が手を振って答えたことさえある。これはたしかに友情のあらわれではないか。

彼らは決して着陸しなかった。あれほどの性能をそなえた機体なら、着陸しようと思えばわけもないことだろう。いまにも着陸しそうに見えたことはあったが、結局そのまま飛び去っている。これもどうしてだかわからない。着陸するなど命令されていたのかもしれないし、私た

月別目撃数



時刻別目撃数



ちにはまだ歓迎の心がまえができていないと思
っているのかもしれない。
パプアが観察地に選ばれたのは、地球上でも
特にへんぴな土地だからではなからうか。これ
なら航空機による妨害やレーダーによる監視と
いった文明の利器にじゃまされることなく、地
球の“標本”をゆっくりと観察できる。だがこ
れも推測にすぎない。
いつの日にか、彼らの正体、目的などが私た
ちにも理解できる時がくるだろう。それなら何
を取苦勞するのか。それは、人間は未知なる

ものを恐れるからである。宇宙から地球を観察
して将来の訪問を計画している人々があるな
ら、そのときになって恐怖にかられてバカげた
行動に走らぬよう、今から心の準備をととのえ
ておく必要がある。
だがそれはそれとして、これは科学的にも重
要な研究だ。真理の追求こそ科学の目的であ
る。パプアでの事件も、真理追求のための小さ
な手がかりの一つとして活用していただけると
信じるものである。(元)

増野 一郎 訳



●円盤ブームの去った静かなボイアナイ

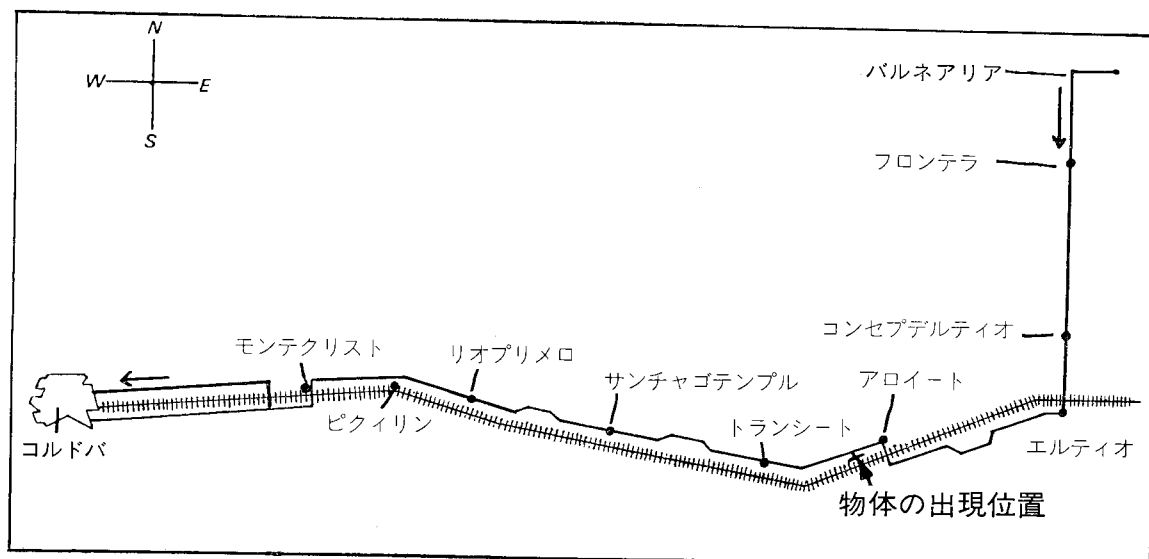
アルゼンチンの テレポーターション 驚くべき瞬間遠隔移動

目もくらむ閃光と
不気味な黒い物体の出現！

一瞬のうちに距離と時間が
短縮された不思議な現実…

アルゼンチンUFO研究会々長
オスカー・A・ガリンデス

図 1



瞬間遠隔移動(テレポーテーション)とは、人間または車などが不可思議な原因により、数百キロ、数千キロ離れた地点へアッというまに移動してしまう現象をいう。UFOと関係があるらしいが、このような実例は南米あたりでときどき発生した。これは一九七二年にアルゼンチンで起こった驚くべき事実である。

コルドバの考古学展覧会

一九七二年の八月のさなか、かなり科学的レベルの高い立派な考古学展覧会がアルゼンチンのコルドバで開かれた。これには多数の人が押しかけたが好奇心の対象となったのは南米のプレコロンビア文明の文字や古文書と大気圏外の知的生命との関連を展覧会がはっきりさせようとした点にあった。特に焦点的となったのはティアウアナコ文明から出土した六千年前のかんらん石とトルコ石で作られた小さな像で、口から二本のチューブが出て背中の方へまわっている格好は現代の潜水夫のスタイルに似ている。この出土品によって人類の祖先が太古に宇宙からやってきた人々とコンタクトしていたのではないかという話題がもちあがり、しかもUFO問題までが出てくる有様であった。

体験者が現われる

さて、この会場へ筆者は父といっしょに行ったのだが、そのとき大勢の人のなかに旧知の人を父は見かけたような気がしたという。しかし他の一団の人々と話しかけていた様子からみて、人違いだということがわかったが、顔つきはそっくりだったのである。しかし偶然にもこの思いがけない出会いが長びいてくつろいだ話合いとなり、その展覧会に関連した二、三の問題や主催者がもくろんだ大気圏外の知的生命などの話題におよんだ。

われわれの会話が更に奥深い問題に発展していったとき、この偶然知り合いになった人は次のようなことを確信しているとい出した。つまり彼の最近のある個人的体験によってUFO現象に関する考えが根本的に変わってしまったため、このUFO現象なるものは肉体をもつ実体の活動をあらわしているというのである。彼はそれとときまでさほど関心のなかったある問題について、もっと深く知りたいという欲求がたかまるにつれて好奇心が増大し、そのために展覧会へやってきた。自分の体験については、それをおおやけにした場合、自分を難儀な立場にするという恐れから新聞社には話さなかった。それで少数の人にしか洩らさなかったのである。

そこでわれわれはその事件の詳細を知るために、その人とインタビューす

る手はずをととのえた。相手はこちらの意向をよろこんでくみ入れたが、事件の内容については他言しないようにしてくれという。(この記事は二人の関係者の同意を得て書いたもので、その目的は海外へ知らせることにある)

インタビュー

最初のインタビューは一九七二年八月二十六日に行なわれて、これは四時間続いた。二回目のインタビューは一九七二年九月十八日で、これは二時間続いている。最初のインタビューに出席したのはアルゼンチンUFO研究会の代表として筆者の父ベンハミン・ガリンデス、アルベルト、マヒモ・アストルガ氏、それに筆者である。二回目のインタビューは事件の一、二の詳細を明確にする目的であったから、筆者の父だけが出席した。またわれわれは電話で数度にわたって二人の目撃者と連絡しあった。

関係者

この事件の関係者は二人の名の知れたコルドバの紳士である。その一人は——この人とわれわれは考古学展覧会場で話しかけたのだが——音楽の教授で作曲家であるアティリオ・ブルネリ(五十二才)、他の一人はセベリノ・ボルチュエッティ氏(五十八才)、これは隠退した元実業家である。インタビュー

ーは二回ともブルネリ氏の家で行なわれた。

この目撃証人たちの個人的会見によって、二人とも高い教育を受けたらしいこと、体験の話し方がまじめであること、二人の確信が相当に強いことなどがわかったのである。

二人は仲間から尊敬されていた

二人の目撃者は以前はバルネアリアの住人であった。(バルネアリアはコルドバ市から百八十五キロの距離がある)ブルネリ氏はバルネアリアに二十四年間住んでいたが、一九五四年にコルドバへ移住した。一方、ボルチュエッティ氏は三十年間バルネアリアに家をもっていたが、やはり後にコルドバへ移住したのである。

こうした経歴はわれわれの調査によって特に重要な意義を帯びている。ここでとりあげている二人の人はバルネアリアの住民との家族関係、友人関係などで一年に四、五回コルドバからバルネアリアへ行く習慣があるのであって、そのことは二人ともその道筋を熟知していることを意味しているのである。

ずっと以前、二人はバルネアリアのある音楽グループに所属していた。彼らが一九七二年七月十五日の土曜日にいっしょに昔話をするために再会ディナーに賓客として参加するように招待

されたのは、このためであった。

その招待に応じた二人はボルチェット氏の所有する一九六八年型フォードファルコンに乗ってバルネアリアへ飛ばした。ディナーはクルブ・アトレテイコ・インデペンディエンテ・ウニオン・クルトゥラル・デ・バルネアリアで行なわれ、約五百人の人々が出席したが、これは二人の当事者が高く尊敬されていることを物語っている。彼らはディナーの席上でバルネアリアの友人たちから友情のシルシとして二人に贈られた小さな黄金の桶をすぐに見せてくれた。

本人たちは酔っていないかった

さて七月十六日の土曜日、午前二時三十分、二人はコルドバへ帰るためにディナーを辞した。時間のことは確信がある。というのはすでに午前二時に二人はまもなく出発する必要があることや、まだコルドバへ二時間もかかってドライブしなければならぬことなどを主催者に話しているからである。しかし友人たちがひきとめるので、二人はもう少しとどまることにした。二十分ないし三十分程度だったと二人はみている。そのあと二人は挨拶をしてパーティーを離れた。二人とも酒類は飲んでいない。コルドバにむかって出発する前に車のタンクへ四十分のガソリンをつめた。

事件は発生した

ドライブは異常なく、二人は道路の状態にしたがって時速八十から百キロのあいだのスピードを保っていた。ボルチェット氏が運転していたが、アロイトという場所を通過してから三、四分後に、二人はすさまじい白色の閃光が発生したのを見て仰天した。それはあたり一面をまるで白昼のように照らしたのだ。

ブルネリ氏はフロントガラスの上端近くを透して空中に黒い物を見たが、車の屋根がじゃまをしたために正確な形はわからなかった。彼はその物を重要だとは思わなかった（最初は雲だと考えたのだ。実際、閃光を見たときに口に出した言葉は「アラシだ！」であった）。そこで彼はボルチェット氏にもっとスピードをあげる方がよいといったのである。時刻はちょうど三時十分で、バルネアリアから七十六キロの所だった。

数秒後、二人は道路の左手の五十メートルばかり離れた距離に、しかも地面上に、長方形の光が一行になつて見えるのを見て、彼らはそれを停止している列車の車内灯と思った。（図1に見られるように鉄道線路が道路に平行して走っている）この灯火群はやわらかいオレンジ色で、長さ約五十メートルの構造物に付属しているように思われ

た（図2）。しかし暗いために正確な輪郭はわからない。

ボルチェット氏はスピードをあげる必要にうながされて、その「列車」らしきものにあまり注意を払わなかったという。ただしその灯火類の特徴は完全におぼえている。一方ブルネリ氏は車が灯火類のそばを通ったときに首をまわして見た。ただしくつろいだ無頓着な態度でそうしたといっている。目撃時間は約十秒間だった。

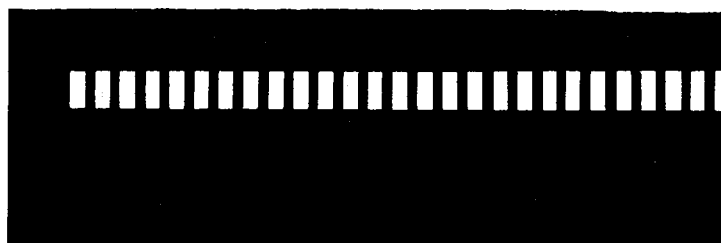


図2⇒

●二人が目撃した「列車」状の奇妙な物体

この「列車」が見えなくなると、ブルネリ氏の注意は空をたえず見つめる方に移った。アラシのあった位置をつきとめようとしたのである。しかし、このような予感を裏書きするような雲は見えない。空は澄んで、星々はそのすぐきれいに輝いている。（彼の話によると空がそんなに澄みきって星がすぐく輝いているような夜空をめったに見たことがないという）

このとき彼は「カミナリのような閃光」と停止している「列車」らしきもののことを思い出し始めた。彼はボルチェット氏に「列車」の奇妙な外観に気づいていかどうかと尋ねた。というのはその窓（複数）が正方形でなくむしろ長方形であったからだ——玄関のドア一みたいに。（目撃者たちは各「窓」の高さは約三メートルで、窓と窓との間隔は七十センチぐらいとみている）しかもその物体の両端にはライト類はなかった。更に最も不思議なのは、鉄道線路は道路から十メートルしか離れていないのに、「列車」らしきものは大体に五十メートルむこうにあったということである。

ブルネリ氏は話を続ける。彼らは全然列車を見たのではなく、何かの構造物、またはたぶんよく話題になる未確認飛行体の一つを見たのではないかと考え始めていた。このあとの方の可能性は明らかにボルチェット氏を不安に

した。というのは、そのとき以来、彼の相棒はドライブ中にはつきりとイライラした状態を発見し始めたからである。(ボルチュエット氏はそのときからたしかにややイライラを感じていたといっている)

驚くべき時間の短縮

二人がこんなふうに意見を交換しているうちに灯火から判断してリオブリメロらしき町に着いた。そこで二人はひどく驚いたのである。なぜならまだトランシット、サンチャゴテンブルというような他のおもな町を通過していないからだ。すると突然彼らは道路の左カーブのある所に着いた。これは全然その場所にふさわしくないものである。道順を完全に知っている二人は互いに驚きあった。道路のそんな所にカーブがあるとは思ってもなかったからだ。

彼らはドライブを続けた。そして実際はその場所がリオブリメロから二十五キロも離れたモンテクリストであることがわかった。しかしちよつとのあいだ驚いたあと、二人はこのことに気をかけなかった。なにせ夜中のドライブのことだから、何があったにせよ、旅がうんと短くてすんだという錯覚が起こったのだらうと思ったのである。二人はコルドバに近づいたのをよろこんだ。

コルドバへの残る二十八キロには十五分ないし二十分かった。ボルチュエット氏は相棒を家の所でおろしてから自宅へむかった。

自分の家にはいったブルネリ氏は壁の時計が午前三時三十分を示しているのに気づいた。そこでハッとしたのである。わずか一時間で百八十五キロの道のりを走ることはできないからだ。しかし腕時計を見ると壁時計が間違いないことを証明している。(ボルチュエット氏があとで語ったところによると、彼は三時四十五分に帰宅しており、ブルネリ氏をおろしたときはおそらく三時三十分頃であつたらうという。いずれにしても彼もやはりドライブのスピードについてはわけがわからなかった)

事件後の異様な現象

事件の全ぼうの分析を容易にするために、関係者二人がコルドバに到着後自分たちで確認できた興味ある点をいくらか再検討する方がよいと思い、次にそれを掲げることにする。

(a)二人がコルドバに到着したとき、異常な幸福感につつまれていた。彼らはお祝いパーティーや帰路のドライブの疲れが全然なかった。ブルネリ氏は妻と二人の娘をすぐ起こして、バルネアリアでの楽しい体験を話してやる必要

を感じたが——これが奇妙なことだが——ドライブ中の出来事、「閃光、列車」、ドライブ時間のわけのわからぬ短縮などについて全然話さなかったのである。一方、ボルチュエット氏は午前八時にまた起き上がったが、やはり疲れをまったく感じなかった。しかしブルネリ氏とちがって、数時間後には旅行中の体験すべてを家族全員に話した。

(b)その朝、ボルチュエット氏の息子がリオクワルトの町へ行くために車を使う準備をしていた。彼が燃料タンクを調べてみると(容量は六十リットル)半分からつぽになつていた。そこで父親にバルネアリアから帰ったのちにふたたび燃料を入れたのかと聞くと、父親の答は「入れない」だった。息子の言葉に驚いた彼は自分で調べてみると、まさしく半分も残っていることがわかった。実際には車は十二・二リットルしか消費していなかったのである。その距離ならば普通は二十五リットルを要するのだ。(もと四十リットル入れたのだから、タンクにはまだ二十七・八リットル残っていた)

(c)その朝以来、異常な幸福感と平静さに加えて、ブルネリ氏は右の腰の背中あたりにかゆい感じがし始めた。これは直径一・五センチの丸い部分である。この部分はまったくマヒしたまま残った。この状態が二分ぐらい続いて

からまたかゆくなり、その後正常になった。これは四日間、四、五度くり返されたが、別段皮膚に異常はなかった。

(d)ブルネリ氏はいつも血圧が高くて、そのためにめまいを起こすことがあった。医師からすすめられた療法を無視していたにもかかわらず、あの異常な体験の日以来血圧が下がってきた。

(e)特に異常なのは、ボルチュエット氏の意見によると、彼らが物体を見てもなく、車が道路を数センチ浮き上がったような奇怪な感じがしたという。ブルネリ氏はこの感じがしなかったが、車が走っていた道路がなめらかな気がしてハッとした。そのため道路のでこぼこがまったく感じられなかったという。

久保田八郎訳

— UFO問題ミニ情報誌 — 月刊 ユーホロジスト

●B5版・タイプオフ印刷・6ページ●

内容(国内UFO研究界近況紹介・読者の声・旧資料の再録紹介・その他)

●別冊「世界UFO事件レポート」(不定期刊)は年間4~5冊発行で、会員には無料贈呈

●その他小冊子の発行を計画中
入会金不要・会費1年分600円(現在No.12まで発行)

〒431-33 静岡県天竜市二俣町南鹿島58-18
ユーホロジストクラブ 代表者 平野泰敏

1966年の ウッドストック UFO 祭典(3)

バートルド・E・シュワルツ

メルツ一家については、霊媒でもあったお氣に入りの叔母は、死後もしばしば前触れと共に幽霊となつてもどつてきた。生前の叔母はサカスのヘビ使いで、姉や祖母同様いろいろ不思議な心霊現象を経験したという。このようにUFO現象は変人に現われるものなのだろうか。それとも心理現象になれた人々のほうがUFOなどのやはり不思議な出来事に敏感なのだろうか。またはUFO(とその背後にあるもの)のほうが、生物学的にも精神的にも他より弱い人々を利用するのだろうか。

UFOとは無関係の心霊現象の研究でも多くの場合、常に正確を求めて不正確な情報的大海を手ざかりするといふおさまりの型におちいるものだ。どうしていつまでも偽りやニセの予言に頼らねばならないのだろうか。たとえば有名な予言者たちの経歴を調査していると、的中した予言は数も少ないしあいまいなものが多いの外れた予言のほうがはるかに多いことに気がつく。そのような外れも、超心理学的には正しいこともあるが、多くは予言者の心理の投影であつて、自父の印象を何とかまとめあげようとする空しい努力のあらわれにすぎぬものである(W・H・C・テン(ハフ、ユトレヒト大学超心理学会報第一三巻)。

このようにメルツ一家やキャリヤー夫妻その地の有名なケースの場合にも、道理に合わない結論にとびつく前にもっと基礎的な研究が必要である。UFOと心霊現象とは互いに関連があるかもしれない。しかし同時に、考慮に入れないければならない相違点もあるのだ。何もかも同じカサの下に入れようとするのは間違ひのものとなるう。

注21 何か別の意見はないかと町を歩きまわった私は、かつてニュージャージー州モントクレアにある私たちの病院の一員だつたある精神科医の名前を見つけた。彼とはいろいろな会

合で面識があつたので電話したところ(一九七〇年十一月二日)彼はUFOに関しては何の知識もないし、そのことで話し合いたくないとのことだつた。この男が私の町で開業していつたとき、ウィルヘルム・ライヒの学説の信奉者と思われてかなり圧力をかけられたという興味深い事実がある。ライヒの説は学界の主流からはるかに遠いものなのだ。

ウィルヘルム・ライヒもその論文の中に、彼のいうオルゴネーの力と空飛ぶ円盤とは何か関係がありそうだと注意をうながしているのはおもしろい。とかく問題の多いライヒの業績と人物に精通している人たちににとっては興味のある課題となるう。ライヒは時代に先立つ天才だつたのか、それとも、単に精神病の重症に押しつぶされた一人のあわれな秀才だつたのか。ライヒとUFOに關しては意見は一致しないが参考になる文献もいくつかある。

ブラッド・スタイガー、ジョン・ライトナールの共著、新UFO時代 第三章、ウィルヘルム・ライヒ弾圧(一九三三頁、ニューヨーク、アウエー・ブック、一九六八年)

ウォルター・ホップ「自叙伝」オルゴノミー研究一九六九年十一月号

イルゼ・O・ライヒ「ライヒ伝」一九六九年

ニューヨーク、セント・マーティンズ出版社

ジェローム・イーデン「オルゴネーの力」一九七二年ニューヨーク、エクスポジション出版

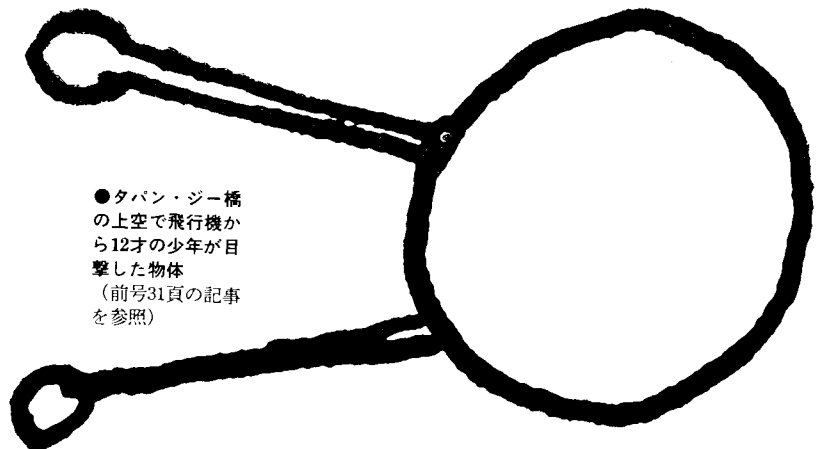
社 A・F・シャツツベルグ、ウィルヘルム・ライヒ、運命と社会の犠牲者「精神病学総覧第二十七巻

他にもある高名な生理学者で、最初はテレパシーにはじまり、つづいていろいろUFOに關連する体験をした人のごとを述べた記事がある(一九七一年一月二十三日メリーランド州ボルティモアにおける東部UFO討論会報告書「アリゾナ州タクソン、空中現象調査会一九七一年出版」)。多くの業績で知られる学者もとはライヒの学生で、発表はされてないがいろいろの実験に成功した。何年も後になって彼はこつそり私あてに、以前の実験も彼のUFO体験もすべて真実だと伝えてきたけれども、彼がその

昔ライヒと興味深くかつ重要な関係をもつていたことを知る人はほとんどない。彼はいまだにUFOとオルゴネーの研究をつづけている。

注22 ウッドストック事件のこの研究は精神医学の立場から見ると残念ながら不完全なものだが、宇宙飛行士たちの経験にはもつと注目する必要がある。彼らの何人かはUFOを目撃したり、UFO現象を体験しているという評判である。彼らの生理機能については無縁で送信されたばう大なデータが公表されているが、この勇士たちの精神状態については私の知るかぎりでは何も発表されてない。宇宙飛行士たちの体験の「客観的」な面にのみ関心が集まり、それと相関関係にある「主観的」つまり人間的な面がまったく無視されているのはなぜか。分類整理された記録の中にも彼らのUFO体験(コンドン報告書参照、一九六九年ニューヨーク・タイムズ出版)の回想が含まれていないとすれば広い意味での科学研究のため、またUFO研究のためにもけしからぬことだ。その上、一部の宇宙飛行士たちに関する通俗記事でいろいろな感情問題がもちあがっているが、これらの記事が真実であるなら、高度の計画と訓練できたえられた彼らを飛行前と飛行後詳細な精神科的(それに超心理学的にも)検査にかけない大探険に出発した彼らに必要以上に非難にさらされやすい立場に追い込んだのではなからうか。

ウッドストックの住人たちから得た氣まぐれなデータとちがって、高度の訓練を経て技術ずれた宇宙飛行士の体験談にはUFOと、UFOに關連ある事件が真実であるか、(2)そのような事件は、ひょっとしたら精神力学的原因と關係がないか、また、あるとすれば、どのような?(3)実験といつてもよいような条件下で観察されたそのような要因が宇宙飛行士にどのような影響を及ぼしたのだろうか(すこしも及ぼしたとすればだが)などといった疑問を解く手がかりが含まれているかもしれない。そういつた精神科的調査が今まで行なわれていないのであれば、その他はささいな問題まで見逃さなかつたNASAのことだから、今後の



●タバン・ジー橋の上空で飛行機から12才の少年が目撃した物体(前号31頁の記事を参照)

飛行こそはそのような調査の絶好の機会と考えてほしい。コンドン報告書が怠慢にも、宇宙船のすぐ近くに着陸したUFOやその乗員の問題に取組んでいないのは、どうしてかわからないうが残念なことである。

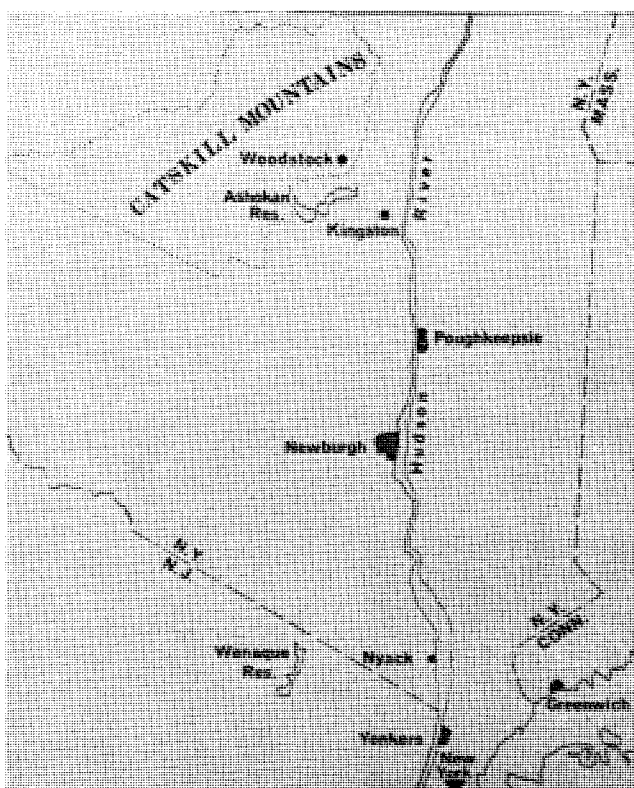
注23 B・E・シュワルツ「テレパシー現象の無意識制御と原理」改正精神病学療法会報第十二巻

フライイング・ツーカー・レビュー誌に掲載された精神病学とUFOの現象に関する主要記事としては他にも多くのものがある。(完)

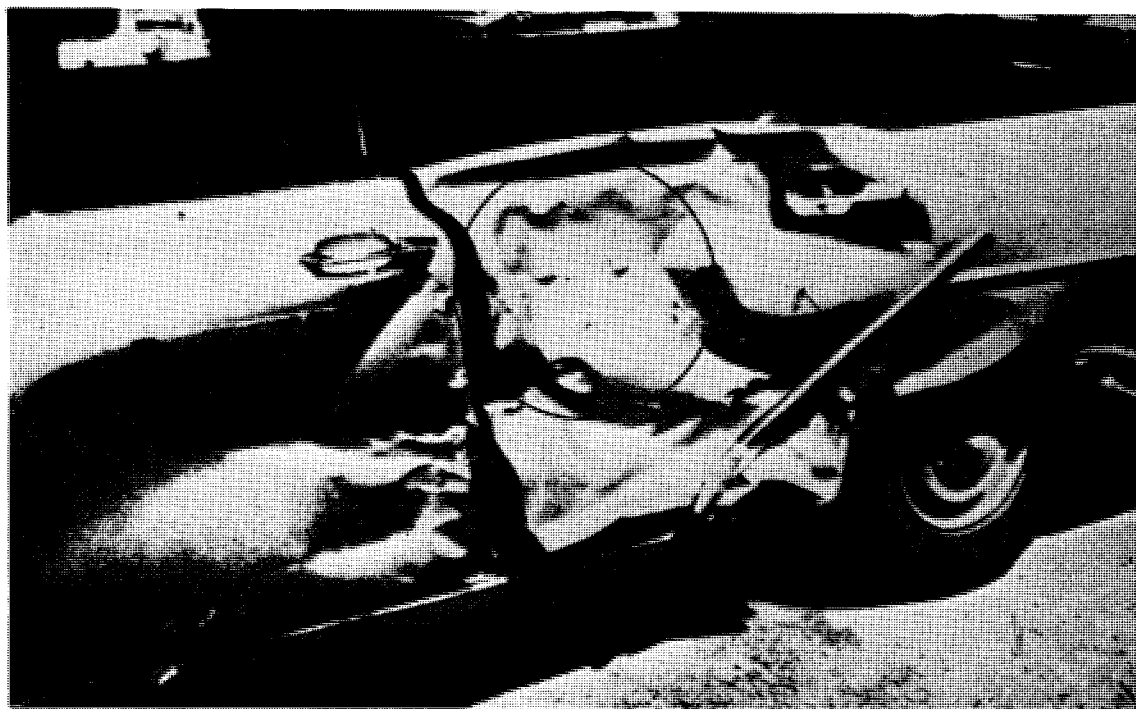
増野一朗訳



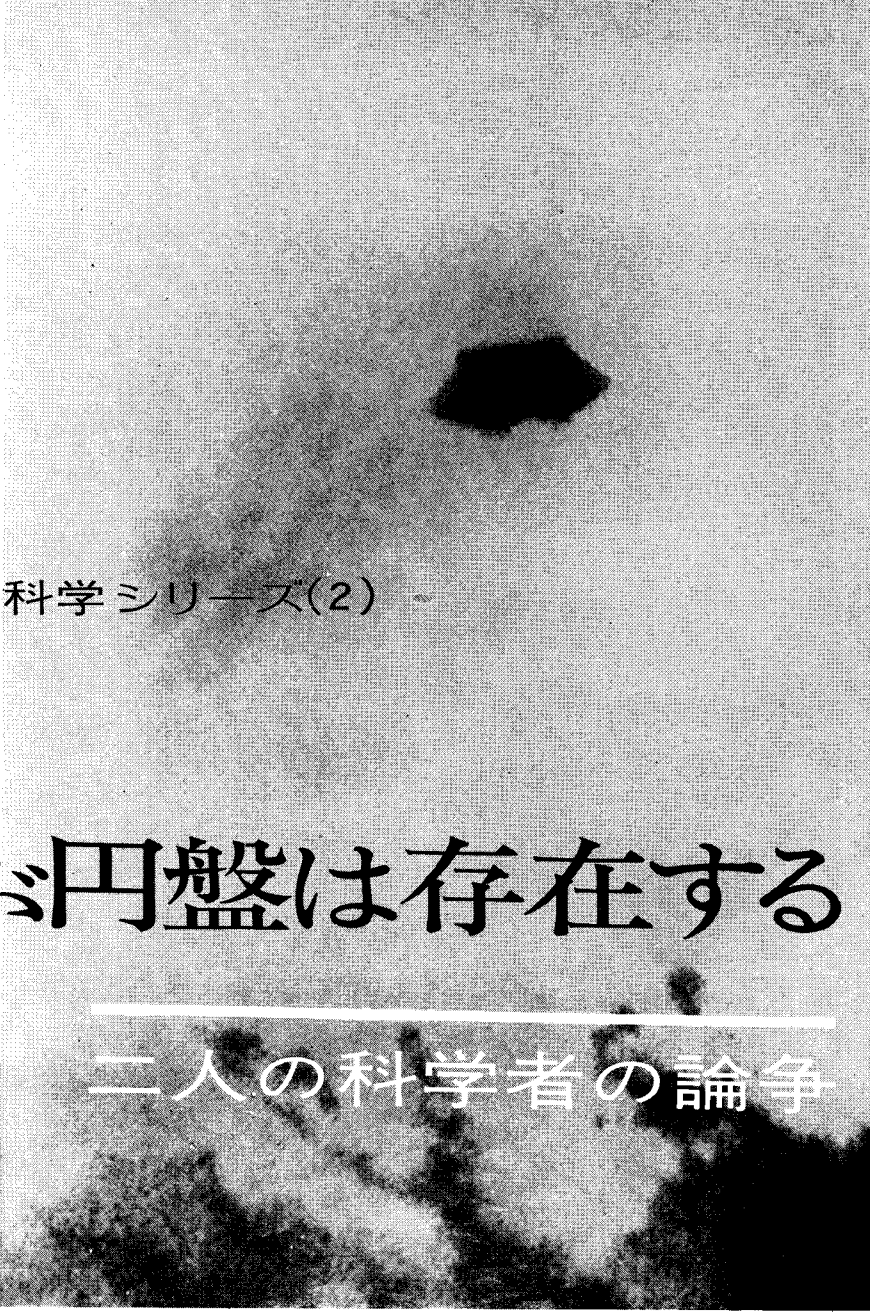
●メルツ家の孫娘



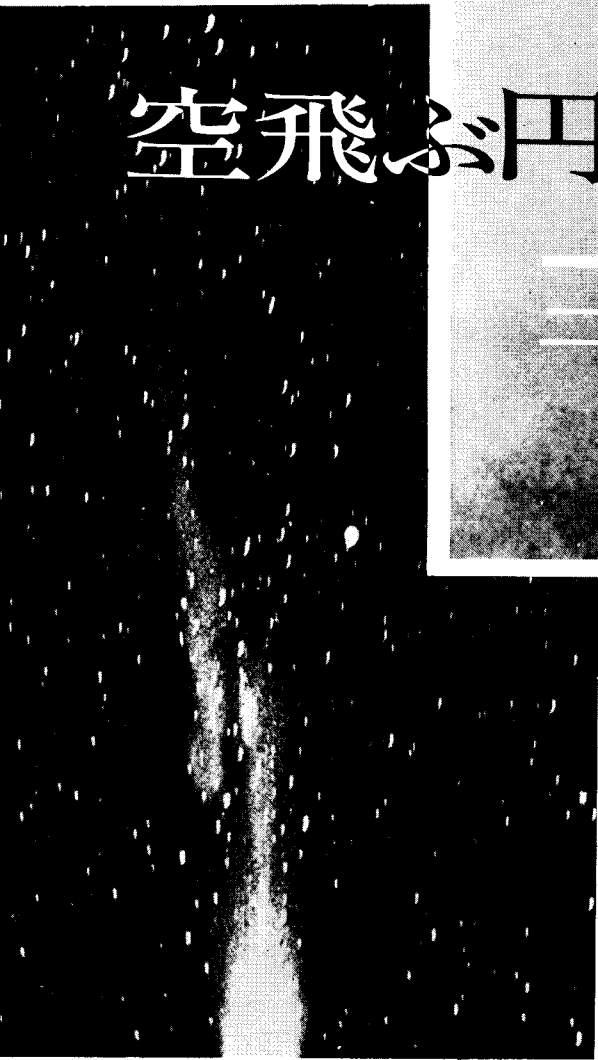
●ウッドストック付近図



●車の破損した部分（円の中）が孫娘（上段写真）の顔をあらわしている
（前号31頁の記事を参照）



〈天空と大地〉科学シリーズ(2)



空飛ぶ円盤は存在する

二人の科学者の論争

●1959年、デンマーク、コペンハーゲンで二人の少年が撮影した円盤

工学博士

橋本 健

橋本電子研究所々長

空飛ぶ円盤を信じますか？ とあなたが科学者に聞くとします、おそらくほとんどの科学者はNO！ と答えるでしょう。

では何故？ とたたみかけて聞いてゆくと、実はあまりしらべてないのだが：という人も多いでしょう。

そこでここに科学者としてはよくしらべている原田三夫氏の空飛ぶ円盤否定論と、それに対する私の反論とを御紹介しましょう。

原田三夫氏の否定論は日本宇宙旅行協会の機関誌「宇宙旅行」にのったものです。

まず原田三夫氏の空飛ぶ円盤否定論を御紹介します。多くの科学者はこのように考えて、空飛ぶ円盤を否定しているようです。

おろかな空飛ぶ円盤の狂信

原田 三夫

1

数年前の事、ある日、大新聞の支局から電話。ロータリークラブで空飛ぶ円盤の研究家の平野某氏が、地球は来たる某月某日に全滅するが、その前に、円盤の存在を信ずる人だけは円盤の大編隊がやって来て救われると言い、ロータリアンが恐慌を来したが、本当でしようかというのである。ロータリアンといえば、その

市の一流の紳士である。それがこの言を信じたのである。私は彼等が、いかに科学知識に乏しく、判断力と理性がないかにあきれた。いわんや一般大衆はおして知るべしである。空飛ぶ円盤の存在を信ずるものはまだ多いが、それらはみなこの程度の人である。

つい先日岡山だかの高校の女の理科の教師から、私が円盤を信じないのが残念だといい、自分が円盤について語った新聞記事の切抜きを同封してきたが、科学の教養のある人でさえも円盤を信じているのに驚いた。日本の科学教育は知識をつめこむだけで、科学的考察力を養わないからであらう。

円盤の信者は円盤が太陽系外の他の世界から来ると思っている。他の太陽系、すなわち他の恒星からのものと思っているが、それについて考えてみよう。

天文学によると、銀河系には少なくとも千億の恒星があり、そのうちの6分の1くらいは惑星を持っていると考えられている。つまり約百五十億の恒星に惑星があることになる。ところが恒星にはいろいろの種類がある。惑星に生物がいるとすれば、可能性の一番大きいのは地球のような惑星であるが、地球のような惑星を持つ恒星は、太陽型の恒星だと考えるのが妥当である。しかし太陽型は恒星の一部分にすぎない。

さらに、同じ太陽型の恒星だからといって、惑星があるとは限らない。惑星のある太陽型の

比率も六分の一と考えてよい。つぎに惑星があったとしても、地球のような惑星があるかどうかはわからない。

2

わが太陽系の惑星は9個あるが地球のほかには生物の発生できる状態のものはない。ただ火星に下等な生物がいるか、むかしいたかが、いまのところ考えられているだけである。そもそも地球に生物が発生して、人類が進化したということは、よくよくの偶然である。第一地球は太陽から適当な距離で公転をするようになったために生物の発生に適する温度になったのである。その他、大気、水、岩石等も、生物の発生に適していたのであって、それらの条件のどの一つが欠けていても、生物は発生しなかったのである。その地球上でも生物の生存しているところは、地球の大きさに比べれば、薄紙の厚さのような大気圏の下層である。

この層がなかったら、生物は進化せず、人類は現われなかったであらう。かような偶然が、チャンスが、他の恒星の惑星に起こり得る可能性は全くないとはいわれないが、あると断言することもできない。これは天文学が、いかに進歩しても分らないであらう。

3

かりに他の恒星の惑星に地球のようなものがあった、そこで生物が発生したとしても、それ

が、地球上の生物と同じように進化して、人類になるとは限らない。ある科学者は生物が発生すれば、必ず人類に進化すると言っているが、何を根拠にして、そんなことを言うのか。何も根拠はないではないか。

一步ゆずって、人類が発生したとしても、さらに考えるべきことは、その時期である。地球が生まれたのは五、六十億年前、人類が現われたのは、最近発見された原人の化石が二百五十万年前のものであるとしても、二、三百万年前、文明が始まったのは四千年前、機械文明が発達したのは、わずか三百年前である。この文明は、あと何年続くかわからない。かりに一万年続くとして。

もし、他の恒星の惑星に、地球上の生物と同じ進化をして人類が現われたとしても、その惑星が地球と同時に生まれて、生物の発生と進化が、時間的にも全く同じであったならば、どこかの惑星に、地球上の人類と同様に文明の発達した人類がいるであろう。一万年早くても、おそくてもそうであろう。しかし、それもよくよくの偶然で、そんなことは考えられない。思ってもみるがよい、五、六十億年に比べれば、文明が始まってからの四千年は一瞬であり、一万年だってそうである。この一瞬が、他の惑星の一瞬と合致することは、とうてい考えられないではないか。

4

それも大まけにまけて、どこかの惑星で人類と同様、またはそれ以上の文明の人類——高等動物でもよい——がいるとしても、それが円盤で飛んで来られるような距離にあることは考えられない。惑星があると考えられている恒星で、一番近いのは白鳥座の61番であるが、これは二つの星のくっつきあった二重星で、それを一つの惑星が回っていて、もしその惑星に人が住んでいたとすると、二つの太陽が空をわたることになるが、この星の太陽からの距離は十一・二光年である。光の速さで飛んでも十一・二年かかるが、光の速さで飛ぶことはできない。飛ぼうとすると、何でも質量が無限大になり、どんなに大きい力でも飛ぶことができないからだ。相対性原理から、そうなるのである。

さて宇宙空間で加速できる飛行体は、噴射ガスの反作用によるロケットのほかにはない。光子の反作用による光子ロケットは夢にすぎない。噴射ガスの反作用によるロケットは、噴射ガスの材料が必要であるが、その積載量には制限がある。そのためにガスにするための熱エネルギーが、原子力で無限に得られたとしても、むやみに加速することはできない。計算をしないと分らないが、かりに秒速一万Km出せるとしても、白鳥座の六十一番まで飛ぶには三百三十六年かかる。その星の惑星に文明人がいたとしても、それが地球へ来るということは、とうてい考えられない。

5

本会の役員で、超物理学の大家、橋本健さんは、近著「超物理学入門（註）」のなかで、相対性原理からは光速以上の速度は出せないことになっているが、ただ一つの例外がある。天体の引力は、天体の質量に比例するもので、質量が無限大になれば、重力も無限大になるから、飛行体が光速になってその質量が無限大になっても重力も無限大になれば光速以上の速度が出せると述べている。この原理から、重力場機関という超光速の出せる推進機関が考えられるが、空飛ぶ円盤はそれで飛んでくるのではないかと言っている。

しかし、この考えは素人がちよつと考えても受け入れることができない。第一無限大の質量も無限大の重力も現実にはあり得ない。無限大は数学での概念にすぎない。それはともかく、力が無限大ならば、無限大の質量を超光速にすることができるといふことは言われないではないか。常識からでも無限大の質量は無限大の力が働いても動かないではないか。氏は光速になると $E=mc^2$ としている。Fは重力、mは質量、gは重力加速度であるが、 $F=mg$ は $E=mc^2$ でFもmも無限大になれば $E=mc^2$ で1の加速度はに對しては無視されりになる。無限大の重力を出す重力場機関というものも夢にも見るほかはない。

6

ついでに光速より速い速度はないことについて一言しよう。我々が現象の変化、推移を見るのは、変化する現象からつきつきに出てくる光を見るからである。もし光と同じ速さで現象から飛びのいたならば、その瞬間に出た光だけが目に入り、現象は変化しないことになる。光速で地球から飛び去ったとすれば、地球上のものはすべてが静止している。もし光速以上の速さで飛び去ったとすれば、その前に地球上から来た光に追いついて、それが目に入ることになるが、すると現象の変化が逆になる。赤穂義上が切腹してから松の廊下での刃傷が起こることになる。すべての因果関係が逆になり、現象の時間による順序がなくなる。さようなことはあり得ないから、光速より速い速度はないことを真理として認めなければならぬのである。

一グラムの物質が三千トンの石炭の熱に変わった原子爆弾は、相対性原理から生まれたものであるが、それを思っても相対性原理を疑うことはできない。

ニュートンに始まる古典物理学では、物体の速度は、速度を与える力を大きくすればいくらでも速くすることができることになっていったが、相対性原理によってそれは否定された。古典物理学は、自然界が人間とは独立に存在するという素朴実在論に基づいたから、そう考えられたのであるが、新しい物理学は、自然界は人間の経験から得られた概念の産物であることを明らかにしたのであり、自然界は人間と独立に

存在するものでなく、人間の心によって現わされているという観念論が証明されたのである。

7

空飛ぶ円盤を見たという人は、何メートルの大きさのものが何キロメートルの高さを秒速何キロメートルで飛んでいたという。飛行機のように大きさのわかつているものならば、慣れた人には高さも速さも推定ができるが、大きさのわからぬ物体についてそんなことは言われない。高さの決定は少なくとも地上の二点から測定しなければならず、高さの決定から速さも推定される。この種の報告は問題にならない。風船玉が高いところを飛んでいても円盤と思うかもしれない。

いったい科学研究の対象になる現象は、再現のできるもの、または再現されているものに限られる。いわゆる円盤は偶然目撃され、短時間で消えるもので、同一のものは再現しないから、科学的に研究のできないものである。それを円盤と信じることは自由であるが、それこそ迷信というものである。

十数年前、大阪で中学生が円盤の写真を撮ったといい、新聞の大記事になった。近代宇宙旅行協会という円盤研究会の会長高梨某氏が、これこそまぎれもない円盤と大鼓判をおしたが、京都大学の写真の専門家が写真を鑑定した結果、インチキとわかった。中学生は後悔して白状したが、窓ガラスに切りぬいた紙をはりつけ

て撮ったものであった。円盤の写真はこの種のトリック写真も非常に多い。

自然観察になれていない人が、たとえば流星や光学現象を見て円盤と速断することも多い。現に空を見ることを商売にする天文学者や気象学者で、円盤を見たという人は一人もない。

8

しかし空に現われる自然現象には、科学的に説明のできないものはいくらかもある。それはやはり再現しないものである。電光の一種の球電もその一つで、これは解明されていない。一八八二年、北の空でツェッペリン飛行船のような形の緑色の光ったものが東に現われて、月の四倍の速さで西に動いて消えた。イギリスの天文学者マウンダーのほか各地で数百人が見て、二十六の信頼すべき観測が報告された。それによると長さ八十K mのものが、約二百十三K mの高さを秒速十六K mで飛んだことになったが、この現象はいまだに説明されていない。(イギリス王室天文学会の会誌に報告されたこと)

科学的に説明されぬからといって、ただちに他の世界からの飛来物とするのは迷信であり、狂信である。私はいわゆる円盤の出現を頭から否定はしない。上記の理由から、他の世界からのものとは考えないだけである。

一九四七年にアメリカのアーノルドが円盤を見たのを皮切りに、アメリカで同様のものを見たとのうわさが続出して大騒ぎになり、アメリカ

カの大空軍は、目撃者からの報告を集めて科学的調査を開始した。(Blue Book 計画)。

一九六六年までに集まった報告は一二六一八であったが、ほとんどが天体、大気現象、何かの見誤りとして説明のできるもので、できないのは報告の不完全なものであった。面白いことに一九五二年には一五〇一報告されたが、一九六九年にはわずかに一四六になってしまった。これは Blue Book 計画の報告書で正体が説明されたためと、人間が月に着陸したり、近くの惑星が探査されたりして、宇宙から多くの神秘がなくなったためで、円盤の信者は神秘を占星術などに乗りかえるようになった。

Blue Book 計画は一九六九年限り打ち切られたが、計画委員長、コロラド大学の物理学者エドワード・コンドンは、二十余年間つまらぬことばかりあってバカを見たと言った。

しかしアメリカでは、大学の天文学教授のハイネックなどが、まだ他の世界からの円盤を信じ、自分で Blue Book 計画をやっている。ヤキが回った科学者はどの国にもいるものである。

以上が原田氏の論文です。原田氏は今は大体引退されていますが、東大理学部を出て誠文堂新光社の「子供の科学」や「科学画報」の編集長などをされ、科学知識の普及に生涯をささげた方で、たくさんのわかりやすい科学に関する著書があります。私も子供の頃、原田氏の「ラ

ジオと映画」という本をよんでから非常に科学が好きになり、「子供の科学」を愛読し、将来科学者になろうと心にきめたのです。

宇宙旅行協会の本部はスイスにあり、そこから私のところに日本でも作らないかという手紙が来たので、私はこの手紙を原田氏のところに持って行き、日本宇宙旅行協会ができたのです。もう二十年以上も前のことです。

このように原田氏は私の恩師のような方ですが、けれども、私の説を批判され、空飛ぶ円盤を信ずる科学者は迷信家でヤキが回っているときめつけられてはだまっていられませんか。いちいち原田氏の説に反論をのべてみたいと思います。

原田氏の文章は八章にわけられていますから各章ごとに述べます。

残念ながら第一章については原田氏のいうようなことがありました。これを言いだした円盤研究団体には、設立のときに私も参画したのですが、次第に科学研究団体というより宗教的、さらに狂言的になってしまったので私ははなれてしまいました。今はどうなっているかわかりませんが、一時は「地球の回転軸が一九六〇年に傾き、日本は沈没する。この会の会員で心の清き者は、その時空飛ぶ円盤が大挙飛来して助けてやるから、寝袋と携帯食糧をもって〇〇山に集まれ。その日が近づいたらリンゴオクレ」という電報を打つ」ということを会員に流したものですから、会員は大恐慌を来し、中には本当に家屋敷を売ってその団体に寄付した人もあ

るし、女子高校生の中には、もう勉強してもしようがないといって乱交パーティーにふける人も出てきたということで、大変世をさわがせたものです。

さいわい今や一九七〇年代に入り、一九六〇年のXが何であろうと、予言された日はすぎ去ってしまいました。が、大地震説や、日本沈没はまたまた各方面から言われておりますから、こういった終末説はふたたび新興宗教や円盤研究団体から言い出されないと限らない……いやすでに、幾つかの宗教団体から言い出されているのです。

こういった終末説に対して我々はどういう心構えであるべきかについては、別の機会に述べることにして原田氏の第二章について検討しますと、ここでは原田氏は、人類が発生するということとは極めて少ない偶然によるものであるといわれています。原田氏は「科学者である私の信仰」という本をあらわし、宇宙の美しく数学的にできているこの世界は、単に偶然にできたのではなく、宇宙の創造者、神があるとしか考えられないと言っておられます。

人類が住みうる環境があり、しかも人類ができたということは偶然ではないのです。

サルが何千年もタイプライターを打ちつづけると、そのたくさんのメチャクチャな文字の羅列の中には一節くらいシェクスピアの詩があるかもしれません。

しかし、人間ができたということは、原子分



●1958年、ブラジル海軍練習船アルミランテ・サルダナ号からカメラマン、アルミーロ・バラウナが、トリニダード島付近で撮影した土星型の円盤

子のメチャクチャな偶然の結合の中で、たまたま人間の形にできたのでしょうか？

否、断じて否です。私は知性ある創造者、神の存在を想わざるを得ないのです。

原田氏自身、別の本でそう言われているし、みずから「宇宙神教」という宗教をつくり、教祖になっておられるではありませんか？

宇宙、地球、そして人類は、偶然にできたものではありません。神が創ったのです。人間は神の似姿のように創られたのです。ですから他の恒星の惑星に生物が発生し、それが進化した場合、やはり神の似姿である人間——直立し、手、眼、足がそれぞれ二つずつの現在のわれわれのような姿になると思います。

ある科学者は、空気のうすい、引力の少ないところの生物は、肺が大きく、頭が大きいタコのような形になるだろうといって、そういう想像画を書いています。それならば、なぜ地球という環境の生物が、地球に最も適した一つの形にならないのですか？ 地球にもタコもいればキリンもいるし、ゾウもいるのです。人間の形はいちばん便利な形ではないのです。眼がうしろにもあった方が便利なのです。人間がこのような形になっているのは環境に便利のためにこうなったのではないのです。神が神の似姿のように作られたのです。

したがって地球と環境がちがう天体においても、その天体で最も知性の発達した生物は人間であり、同じような形をしているはずなので

す。これが第3章に対する答えでもあるのです。

次に第4章で、かりに人類と同様、またはそれ以上の文明の人類がいたとしても、あまりに遠いから来れないとのべておられます。

この中で原田氏は「宇宙空間で加速できる飛行体は噴射ガスの反作用によるロケットのほかにない」と断言しておられます。どうしてそんなことが言えるのでしょうか。われわれの科学はすべてを説明しつくしたのでしょいか？　とんでもありません。未知のエネルギー、未知の方法がまだあるはずで。もっとスマートな乗物ができないと断言する権利はだれにもありません。飛行機だって絶対に出来ないと言った科学者が何人もいたのです。原子爆弾だってそうです。絶対できないなどといっている恥をかく可能性があるのです。

さて、いよいよ私の説に対する批判である第5章です。原田氏は若い頃は数学の天才といわれたそうですが、お年のせいであやしくなつたようです。

この章の最後で $\frac{1}{2}at^2$ で、1の加速度は $\frac{1}{2}$ に対しては無視され0になると言っておられるのですが、 $\frac{1}{2}at^2$ かとすると、必ずしもそうではないのです。 $\frac{1}{2}$ というのは一つのきまつた数ではなく、窮極においては0になるというある変数を意味していますので、 $\frac{1}{2}$ になる前の式をみますと結果がどうなるかがわかります。

まずニュートンの運動方程式

$$F = ma$$

この式において F = 力、 m = 運動する物体の質量、 a = 加速度

この式は運動する物体の質量と加速度(速度の変化)をかけ合わせたものは、運動体を動かそうとする方向に加える力に比例するということです。この式を変形して

$$a = \frac{F}{m}$$

一方重力の引く力、引力を F としますと、

$$F = mg$$

m = 質量、 g は重力加速度、地球上では

980cm/sec^2 この式を前の式に代入します

$$a = \frac{mg}{m} = g$$

この m は相対論によって光速に近づくものになるのです。ですから原田氏のもたした式は $\frac{1}{2}at^2$ とするのは誤りで

$$a = \frac{1}{2}g = g \text{ となります。}$$

つまり重力による加速度は質量の如何にかかわらず常に g なのです。

では g なる重力速度を発生する重力場機関があったとして、この重力場機関の乗り物にのると何時間後に光速に達するか計算してみましよう。

$$V = at \quad V = \text{速度} \quad a = \text{加速度} \quad t = \text{時間}$$

間

この式を変形して、

$$t = \frac{V}{a} = \frac{3 \times 10^{10} \text{cm}}{980 \text{cm/sec}^2} = 306122$$

$$44 \cdot 4 \text{秒} = 510204 \cdot 06 \text{分} = 850 \cdot$$

$$34 \text{時間} = 354 \text{H}$$

すなわち、一年たらずで光速に達するわけですよ。

そして光速になると相対論によって、旅行者にとっては時間の進行はゼロになりますから、何百光年先の天体にもまったく年をとらずに行くことができるわけです。

光速に近い速度で運動する物体の中では時間の進み方がおそくなりますが、これをウラシマ効果といいます。

今いちばん快適な旅行をするために、目的地の距離の半分までは宇宙船を徐々に加速して最大速度に達したら、距離の半分から目的地までは徐々に減速して、その加速度を地球上の重力加速度 $1g$ (980cm/sec^2) になるようにしますと、乗員は目的地の半分または頭を目的地の方向に、半分以後は頭を地球の方向にして立つと、地球上にすむと同じ引力を下の方に感じ、きわめて快適な旅行ができるわけです。このようにして計算しますと、地球に最も近い星アルファケンタウリまでは四・三光年ありますが、地球で計っての往復年数は十二年、乗組員にとつての飛行年数は七・二年、ウラシマ効果による年数の差は四・七年となります。

それでは七夕の星、けん牛星と織女星の場合はどうでしょう。

けん牛星は学名をアルタイルといい、地球から十六・五光年の距離ですから、光の速さで往復するとして、三十三年かかるわけです。

しかし、前述のような条件で飛行するには、

地球上でみて、三十六・三年かかります。しかし乗組員にとつての飛行年数は十一・九年にすぎず、年数の差は二十四・四年になります。

織女星は学名をヴェガといい、距離は二十・五光年、地球上ではかった往復年数は五十六・四年、乗組員にとつては十二・四年、ウラシマ効果による年数の差が著しくきてきて、案外短い時間で何十光年も離れた所へ旅行ができることとなります。

光速以上の速度は出せる

第6章の論旨は支離滅裂とでもいうべきでしょうか。「光速以上の速さでとび立った」とすると時間が逆になる。さようなことはあり得ないから光速より速い速度はない。こんな論理は成り立ちません。なるほど時間が逆になることはあり得ないことかもしれませんが、光速以上の速さで地球上から出た光を観察すれば、時間が逆になったように観察されるのであって、現実の時間が逆になるわけではありません。他の世界の時間を逆に観察するということはあり得ることです。映画のフィルムを逆にまわせば、映画で撮影した出来事を逆に観察することは可能ですが、別に不思議なことではないのです。

実際には光を光速に近い速度でおいかけると、相対的な光速がドップラー効果により光の周波数がさがって、光と共に進む時に周波数はゼロになってしまうので、前に出た光を見る

ことはできません。しかし、もし見ることでできるならば、映画のフィルムを逆まわしするような光景が見えるでしょう。このように観察されることはあり得るのです。

第7章については、たしかにインチキ写真も多いし、円盤でないものを円盤だと誤認した目撃例も多いのですが、千の目撃例のうち、いくつかがインチキであったからすべてインチキだといってすますわけにはいかないのです。九百九十九がインチキであっても、たった一つだけ本物があれば、円盤はアルのです。

天文学者や気象学者で円盤を見たという人は一人もいないと書いておられますが、一九五七年十一月八日、ツールーズ（南フランス）の多くの住民は、明るいオレンジ色の円盤に円屋根をかぶせたような形の不界議な光り輝く物体を観察しました。円盤は回転しながら急速スピードで天空を動きまわりました。ツールーズ天文台の天文学者I・L・シャビュは望遠鏡でこの物体を観測し、つぎのように記録しています。

「輝く黄色の斑点、光度は二等星、形は長円形、まったく明滅せず、その縁はきわめてはっきりと見え、短い尾を引いていた」

あらゆるデータをつき合わせた結果、この物体はほとんど瞬間的に始動し、毎秒・キロメートルの速度で移動していたことが明らかになったのです。また、一九五八年一月十六日、トリニダード島付近でブラジル軍艦の水兵と士官百名以上が、海と岸の上空にUFOが出現し、急速に移動するのを目撃しました。プロのカメラマンが艦上から撮影した写真を鑑定し、偽作の疑いは消え、ブラジル海軍省は本物だと保証つきでこの円盤の写真を発表したのです。原田氏はこの写真はインチキであると証明して下さいますか？

第8章になるとまた少し理論がおかしくなっていて、一八八二年の目撃例については信用されているような筆致ですが、もっと新しく、もっと信用に足る目撃例がたくさんあるのです。

そして結局「私はいわゆる円盤の出現を頭から否定はしない」と極めて論旨が弱くなり、ただ「上記の理由から、他の世界からのものとは考えないだけである」と言っておられます。では円盤は地球製のものだとされるのでしょうか。

地球製だとしても円盤がアルのならば、やはりその事実を究明しようとしてけんめいになるのが本当の科学者の態度ではないでしょうか？

昔ニュートンは人に「あなたは科学者なのになぜ迷信多き宗教を信ずるのですか？」ときかれた時に、「いや、われわれの知識は、無限の宇宙の真理からみて、子供が砂浜で小さな貝をもてあそんでいるようなものです」と言ったそうです。相対性原理は絶対であると思ったり、ロケット以上の乗物はできないと思ったりする方こそ、ヤキが回った科学者ではないでしょうか。私達はずっと謙虚に新しい事実があれば、いつでも過去の理論を訂正できるように、

ノートを開いて、まだまだ無限にある未知の世界に素直な驚きを感じるべきではないでしょうか？

原田氏自身、宇宙の中にも顕微鏡の中にも驚きを感じなければならぬと、科学者である私の信仰の中で述べています。その原田氏がなぜ円盤の出現を「頭から否定しない」だけでなく驚きを感じないのでしょうか

円盤の出現こそは最大の驚きを感じべき大事件ではないでしょうか

註「超物理学入門」(橋本健著・池田書店)の中より重力場機関によれば超光速が得られるであろうという所を抜粋します

超光速は絶対に不可能か

たしかに相対性理論の教えるように、超光速が絶対に不可能であるならば、宇宙人が地球を訪れるのに、何年も、何十年もかかることになります。もっとも、光の速度に達すれば時間が進まないという「ウラシマ効果」があることを相対性理論は教えていますから、彼等は年をとらないかも知れません。

ところで、相対性原理は今日すべての物理学者によってこれが正しいものであると支持されています。この理論は、あらゆる速度のうちで光の速度、すなわち一秒間に三十万kmがいちばん速いもので、決してこれ以上の速度はありません、ないといっています。

もしこの理論が正しいとすると、光の速度で

何十年もかかる遠方の星から地球を訪問することとは極めて困難なことです。はたして相対性原理は絶対なものなのでしょうか？

では、なぜ光の速度を超えることができないのかといえますと、運動する物体の質量は光の速度に近づくにつれて増大してゆくのです

すなわち、運動する物体の質量を m としますと、次のような式が相対論によって導かれます

$$m = \frac{m_0}{\sqrt{1 - \left(\frac{V}{C}\right)^2}} \quad m_0 = \text{静止質量}$$

V = 運動体の速度 C = 光の速度

この式にしたがって運動体の質量は増大してゆくのですが、運動体の速度が光速に等しくなりますと、 $V=C$ となりますから、 $\frac{V}{C} = 1$ となります。したがって、

$$1 - \left(\frac{V}{C}\right)^2 = 1 - 1 = 0 \dots\dots\dots (1)$$

つまり、この式の分母が0(ゼロ)になりますから、運動する物体の質量は光の速度に近づくにつれて増大し、光の速度になると無限大になることとなります

一方、ニュートンの運動方程式という力学の基礎になっている式があります

$$F = m \cdot a \dots\dots\dots (2)$$

この式において F は力、 m は運動する物体の質量、 a は加速度

この式は、運動する物体の質量と加速度(速度の変化)をかけ合わせたものは、運動体を動

かそうとする方向に加える力に比例するということです

たとえば、ロケットの推力を二倍にすればロケットの速度を増す割合も二倍になるが、これはロケットの質量が同じであった場合で、ロケットの推力が一定のとき、ロケットの質量が前の二倍となると、速度のふえ方は前の半分になるということです

$$a = \frac{F}{m} \dots\dots\dots (2')$$

としますと、なおよくわかります。この式は加速度は、物体を動かそうとして加える力をその物体の質量で割ったものに比例するということをあらわします

ところが、前の相対論の式において、運動する物体の質量が光の速度に近づくにつれてどんどんふえるということは、この式の m がふえることです。つまり、 F/m は減ってゆきます。そしてついに光の速度になったときは、 m が無限大になりますから、 F 、すなわち加える力を無限大にしないと、この物体の速度をそれ以上に増すことはできない、つまり、光の速度に達せしめるためには、無限大の力が必要であるということです

わかりやすいといえますと、どんなに力を加えても、物体の質量は無限大なので、光速に等しいところまで加速することはできないというのがアインシュタインの相対性原理の結論なのです。物体ばかりではなく、あらゆるものの速度

の限界が光速であり、万有引力や重力波の伝達速度も、光速と等しい速度を持っているというのです。

アインシュタインの説は、発表当時には反対する学者もいましたが、実験的にその考えを支持するデータがたくさんできて、現代ではほとんど完全なものとしてすべての学者に支持されているのです。

光速を超えられる重力による加速

ところがここにただ一つ例外があるのです。すなわち、重力による加速力だけは質量がふえてもこれに反比例して減らないのです。すなわち、重力の引く力、引力をFとしますと、

$$F = mg \dots \dots \dots (3)$$

という式がなり立ちます。

mは質量、gは重力加速度で、地球上では、 980cm/sec^2 です。

地球上ではgは一定ですが、mが二倍になればFも二倍になります。つまり、質量が二倍になれば引力も二倍になるというように、引力は質量に比例するのです。

ですから、前の式(2)によって、もし加える力が一定であれば、質量が二倍になると、加速度は半分になってしまうのですが、質量が二倍になると、加える力もその質量に比例して二倍になるとすれば、質量がどんなに増加しても、その物体を引っ張る力、引力はそれに比例して増

加し、光速になって質量が無限大になっても、引力も無限大になるならば、光速以上の速度を出すことも不可能ではないということがわかります。(3)式に(1)式を代入しますと、

$$F = mg = \frac{mg}{\sqrt{1 - \left(\frac{v}{c}\right)^2}} \dots \dots \dots (4)$$

という式が得られます。

ここで、光速になると、 $\left(\frac{v}{c}\right)^2 = 1$ となり、(1)式の分母が0、したがってFは無限大になります。

つまり、質量が無限大になれば、引力も無限大になるのです。

超光速はあり得る

さて、重力で加速するならば、相対論に矛盾することなく超光速を得られるということがわかりました。ですから、空飛ぶ円盤が存在するならば、その推進機関はおそらく重力場機関ではないでしょう。多くの目撃例からみて、空中に停止することができること、直角などの急な方向転換ができることなどから、重力場機関が考えられるわけです。

ふつう、きわめて高速で直角に方向転換すれば、内部の人間は壁におしつけられて非常な衝撃を受けることになります。しかし重力場機関による場合は、円盤も中に乗っている人間も同じ重力を受けて重力を受けた方向に落ちてゆくのですから、円盤と人間との間の相対的運動はゼロであり、どんなに急上昇や急な方向転換を

しても衝撃を受けることはないわけです。

超光速粒子タキオン

一九六七年、アメリカの理論物理学者G・フアインベルグ(Feinberg)博士は、学術雑誌「フィジカル・レビュー」誌に「超光速で運動する粒子」について発表しました。この粒子をタキオン(tachyon)と云い、虚の質量をもっていて、光速以上に無限大のスピードをもって運動することができる粒子です。

超光速現象や、超光速運動については、以前から議論したり提唱している学者はたくさんいました。中でも、ソ連の物理学者テルレツキー(Teletski)は「相対論のパラドックス」なる本をあらわして、超光速で運動する粒子について述べています。

ところで、タキオンも、テルレツキーの超光速粒子も、実は決して相対論と矛盾してはいないのです。なぜならば、超光速で運動する粒子の質量は「虚」になるといっているからです。先ほどの第一式のルートの中は超光速になるとマイナスになります。そうすれば質量は虚数になるでしょう。これは相対論を破ったのではなく、相対論の式にしたがっているのです。

重力場機関とは

さて、これからの議論は二つにわかれます。一つは重力場機関は如何にすればつくれるか、あるいはどのようなものであろうか? という

こと。もう一つは、超光速の世界・虚物質の世界とは一体どのような世界なのであろうか、「四次元世界」的なものかも知れない、ということだ。

レオナード・G・クランプの重力場推進

イギリスの技術者レオナード・G・クランプは有名なUFO研究者ですが、彼はUFOの使っている重力場は、般体を引っばる引力場と、船体をはね返す反力場との二つがあり、この二つを調節して、速度や方向を自由に変えているのではないかと考えています。

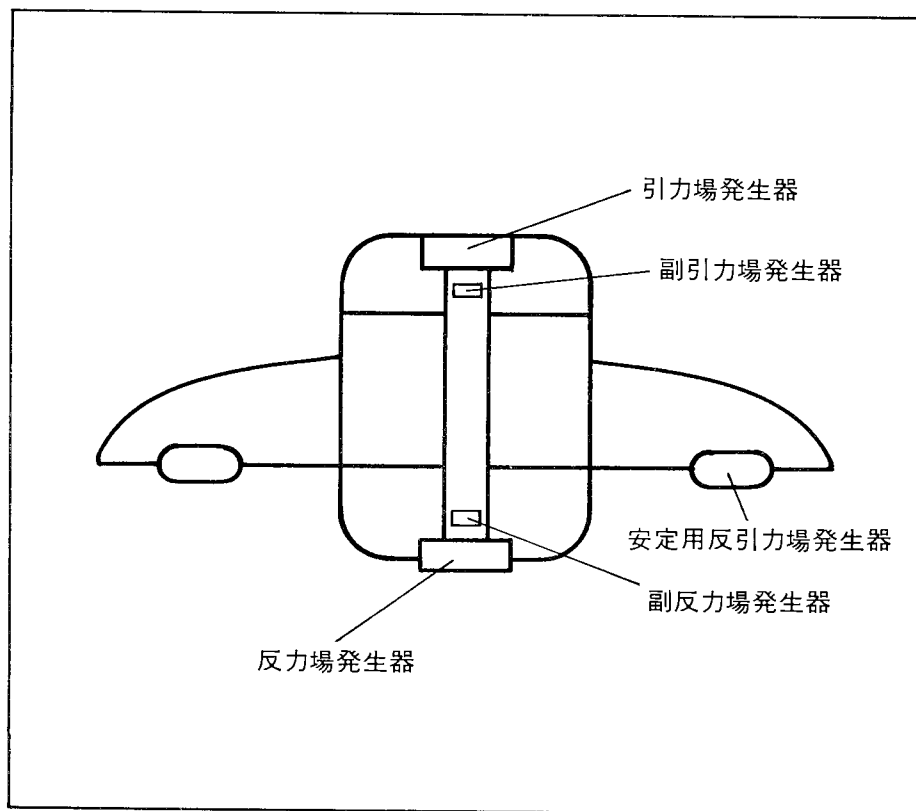
彼の考えたUFO重力場推進装置は下図のようなものです。反力場発生器が下の方にあり、さらに、副反力場発生器と、安定用反力場発生器をそなえています。また引力場発生器と副引力場発生器が上の方にあります。

これによって反力場と引力場は、円盤の中にできるのではなく、円盤の下の方に反力場、上の方に引力場ができるのです。そして円盤が動くためには次頁の上の図のように少し傾く必要があります。

そうしますと、引力場の中心がこの図のAにでき、反力場の中心がBにでき、両方の引力場反力場の合成によって、円盤の重心はCの方向に引かれます。

一方、地球の重力によってDの方向に引かれますから、CとDとが合成して、円盤はEの方向に進むこととなります。多くの円盤の目撃報

クランプの重力場推進装置



告によって、円盤が進む方向に前傾していることが、この説によって説明されるわけです。また、円盤が着陸する際には反力場の中心は地面に近づきますから、反力場におされて近くの草は地面におしつけられます。この様子が下

の図Aに示されています。さらに反力場が地表面より下にくると、地面に穴があきます(下図B)。

円盤の着陸したあとに草がなぎ倒されていたり、穴があったり、こげあとがあったりすると

いう報告例が、これで説明されるのです。
要するに、重力場機関を使用しますと、ロケットやプロペラとはちがって、次のような利点があるのです。

(1) 空中での停止、急停止、急加速、急反転

が自由自在である。

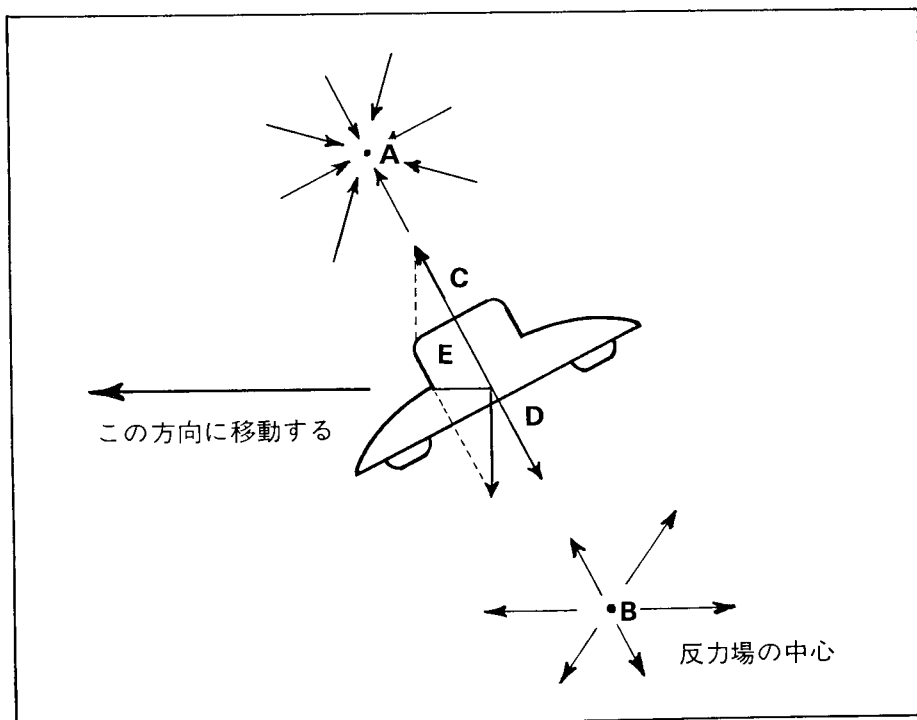
(2) 内部の人間は引力によって、機体と共に

その方向に落ちてゆくので、船体がどんなに急激に運動してもまったく影響を受けない。

(3) 大気中を飛ぶ場合、まわりの空気を近い

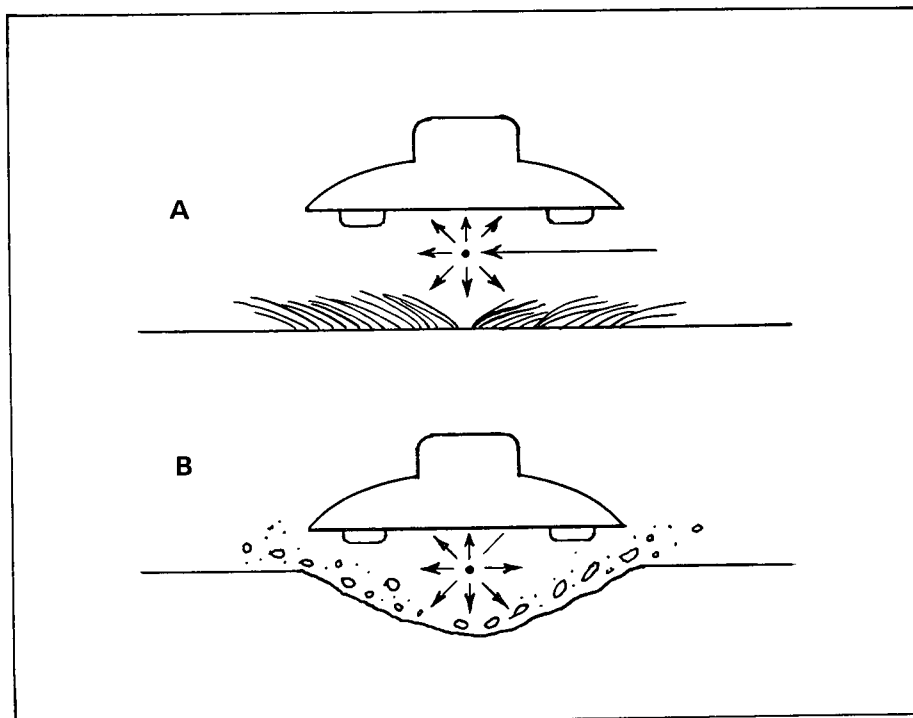
ほど強く引きずってゆくので、まさつが少なく、まさつ音がしない。

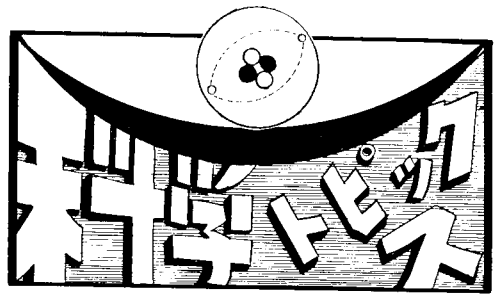
(4) 光速を超えるスピードを出せる。このようなことから、もしUFOがあるとすれば、重力場機関によるほかは考えられないわけです。



前進の原理

着陸する際の模様





木星にも生物がいる？

●類以の環境にバクテリア

NASA (米航空宇宙局) エームス研究所の科学者が木星とよく似た環境の強アルカリ鉱泉中に生きているバクテリアを発見、繁殖していることを確認しました。

発見者はケネス・A・スーザ、ポール・デールの両所員で二人は木星生物の可能性について調べるため、同種の環境を探したり、人工的に造ったりして研究していました

が、最近カリフォルニア州リバモア近くの丘にあるアルカリ性鉱泉中から棒状バクテリアを発見した。木星は水素、ヘリウム、アンモニア、メタン、水で包まれていて強いアルカリ性環境と考えられています。バクテリアが発見された鉱泉は普通の水の一万倍という強いアルカリ性環境で、これまでバクテリアの生存限界と考えられていたよりも十倍もアルカリ性が強かったということ、生物の環境に適応する力は人間の予想を超えるものがあるようです。

同研究所員で、以前イン石からアミノ酸や遺伝子の部品を発見したシリル・ボナンペル博士は「微生物はわれわれが予想するよりずっと生命力があるもので、たとえば私はアイスランドで98℃の温泉でヤケドしたが、その中にもバイ菌がいたし、濃硫酸の中でも、また真空管中でも微生物が暮らっている。ほかに水点下50度で平気で生きている藻類などが発見されていて、発見者は「木星のような強アルカリ性の星に生物がい

てもおかしくない」と語っています。

「ルノホート」二号

月面活動を終了

ソ連宇宙研究の第一人者であるビノグラードフ・ソ連科学アカデミー会員とソコロフ博士が11月20日、ブラウダに公表したところによれば、昨年の1月16日、ソ連の月宇宙船「ルナ21号」によって月面に降ろされた月面観測車「ルノホート2号」は約10カ月間に及ぶ全計画をこのほど終了しました。

ルノホート1号は70年11月に月面に降ろされてから11カ月間の活動を行いました。20日のブラウダの記事によれば、1号よりもさらに改良された2号は、1号の十・五キロに比べ3倍半の37キロを走破し、また車体と動力の強化により急な斜面やデコボコの表面も楽に走れるようになりました。

ブラウダの記事は同時に、2号が地上に送信してきた各種のデータが非常に価値の高いものであることを強調して

います。同記事はルノホートによる月面観測の資料と米ソ両国によって地上にもたらされた実際の岩石の分析の結果

(1)月の海と大陸の部分では岩石の鉱物構成が非常に異なる (2)月の岩石には磁性が残留していて、これは月が過去において磁場を持っていたことを示すかもしれない (3)月面は場所によって構造と構成が非均質で、これは月と地球の生成研究に大いに役立つだろう」と述べています。

水星に向かう

マリナー10号

アメリカの水星探査機マリナー10号は11月3日に打ち上げられ、今年3月末に水星に千kmまで近づく予定で

水星は赤道半径が二千四百kmで太陽系では最小の惑星、太陽に最も近いので地球からは観測しにくく、一九六五年米コーネル大学の科学者たちがブエルトリコの直径三百mの電波望遠鏡で自転周期が59日と観測するまで水星の自転と公転はどちらも88日と思われていました。また、大気は

極くわずかで昼は摂氏三百度を超え、夜は零下二百度に達すると考えられています。

マリナー10号は、まず2月4日に金星まで五千二百八十kmまで接近、エネルギー節約のため金星の重力という「タダのエネルギー」を利用してスピードと方向を変え、3月29日には水星の軌道を越えて一千kmまで接近し、水星の大気、地表、自然科学上の特徴などを探査して、金星と水星のテレビ写真八千枚以上を撮影、両惑星とその間の磁場、電波などに関するデータを送ってきますが、写真は水星で1.0、1.5kmのものまで見られるようです。

火星に飛ぶソ連の探査機

マリナーが水星に飛ぶ一方、隣の火星に向かって一生懸命宇宙空間を飛んでいるのがソ連の打ち上げた4つの探査機「火星4、5、6、7号」です。いずれも73年の夏、4号は7月21日、7号は8月9日に打ち上げられ、4、5号は今年2月に、6、7

号は3月中旬に火星周辺に到着する予定です。これらの機能は同じものではなく、観測を分担しながらの火星探査をするものと思われ、タス通信によれば6号は、4、5号とは機能が異なり4号の装置を使って科学探査の一部を行なうということ、このうちのどれか一つを火星に軟着陸させて自動観測車を走らせ、どれかを火星を回る人工衛星にして観測データや指令の中継基地に使うものと考えられます。また、火星6号にはフランス製の観測装置が積載され、太陽からくるプラズマや宇宙線の性質を調査し、これはパリ近郊のムードンと中部フランスのナンシーで共同実験が行われます。

一方、アメリカは、一九七五年夏にバイキング計画を予定しており、一九七六年7月の米独立百周年記念には、火星表面の決められた地点に最初の一機を軟着陸させます。

石油乾留に革命的新技術

英紙タイムズが11月24日報

じたところによれば、米国の大手石油会社オクシデンタル（本社サンフランシスコ）はオイル・シェール（油母けつ岩）から石油を乾留する革命的方法を開発し、すでにコロラド州の実験所では、バレル（五九リットル）当たりわずか1ドルで1日25ないし30バレルを生産しているということです。

これは中東石油よりもはるかに安価で、同社は3年ないし5年以内に世界のエネルギー供給のバターンは一変するとの見通しを明らかにしています。

同社が開発した方法は、オイル・シェールに穴を掘り、その中に天然ガスを注入して火をつけると非常に高温状態で石油が乾留されるということです。

オイル・シェールに含まれた石油が、液体の石油より埋蔵量においてはるかに多いことはすでに知られており、問題はいかに安いコストで抽出するかという技術的問題だけが残されていました。タイムズ紙によれば、米国だけでオイル・シェールから抽出可能

な石炭の量は2兆バレルで、サウジアラビアの石油埋蔵量百五十億バレルをはるかにしのいでいます。

また、タイムズ紙はこの新技術について異例の社説を掲げ、中アラブの石油独占が終わり政治的力が弱まる（2）経済的にも石油値上げ交渉の立場が弱まる、の2つの理由をあげ世界各国政府がオイル・シェールの大規模な開発に出るよう呼びかけました。

食用にもなる？

無公害プラスチック

水に溶け、バクテリアで分解する新型プラスチックが、このほどデンブンの一種から造られました。

岡山市の林原生物化学研究所が開発に成功したこのプラスチックは、もち具合や強さの点では市販のプラスチック製品に劣らない、製品として使うほか食用に供することもできる、無毒で燃しても毒ガスがまったく出ない、などの新しい特徴を備えています。

また、これは透明度の点でも他のポリエチレン族のプラスチックに劣らないばかりか、百度C以上の熱にも耐え、アルカリにも極めて強い性質を示しました。

これはブドウ糖分子の長い鎖状結合でできている、味も香りもない物質、多糖類プルランを用いて造られるということです。プルランはデンブンを酵母菌で発酵させて作り、同研究所では、このプラスチックはプルランと水とを混合し、圧力ガマの中で熱すること、簡単に製造できるということです。

このプラスチックは、捨てても土中や水中のバクテリアの作用で無害な物質に分解されてしまうので完全に無公害で、低カロリー食品や肉のラップ、油性食物や薬品として使うこともできるということです。

同研究所は、今年、試験的に工場をつくって年産10トンのプラスチック製造に乗り出し、一九七五年には、三千ないし五千トンまで生産を増大させようと計画しています。同研究所によれば、生産が年間1万トンにまで増大すればこのプラスチックは、石油

から造られている他のプラスチックと同程度の値段になるということ、今、25ヶ国に特許を申請中です。

新発見ビタミン-Q

ウィスコンシン医大の職員が新しいビタミン-Qを発見しました。発見者はアーモンド・J・クイック博士。彼は34年に血液の凝固能力を測る「クイック・テスト」を考案し、それは抗凝固剤（血管内で血液凝固が起こる病気に適用される薬）の選定時に幅広く用いられています。このクイック博士が血液が凝固するときに重大な役割を果たすと思われるビタミンを大豆の抽出液から発見しました。

血液凝固は血漿中のフィブリノーゲンが産生したフィブリンという生糸状の物質が血液を開きはじめること、起こされるもので、ビタミンKが関与していると考えられていますが、今度のビタミンは、博士が昨年から新ビタミンとして報告していたもので、博士にすれば、約25人の患者が

その適用をうけて大きな効果を得、ますますその発見に確信を深めたということです。

博士は、体が必要として、体が生産することのできない物質がビタミンだということで、大豆の抽出液が血液凝固反応を早めるということは以前から他の研究者が試験管実験で確かめていました。

この新ビタミンは将来、血友病（血液が凝固しないために、少しの傷でも致命傷になる病）などに応用されて効果を發揮することになるかもしれません。

日本の

ネアンデルタール文化

岩宿遺跡の発見者で、わが国の後期旧石器時代（約1万3千年前）の人類文化立証の端緒をつかんだ「民間考古学者」の相沢忠洋氏（46）が、こんどは岩宿遺跡よりもさらに古い6万年から7万年前の石器を発見したと明らかにしました。

問題の石器が出たのは、群馬県新里村奥沢の山林にある「夏井戸遺跡」で、相沢氏は

21年 岩宿遺跡（新田郡笠懸村）で旧石器を発見して、わが国に旧石器時代があったことを証明して以来、さらに「日本人類の起源」にまで挑戦するため「夏井戸遺跡」

一帯を私費で購入、8月から約1ヶ月にわたり地元の高橋生、東北大などの協力を得つつ発掘調査を進めた結果、表上下6～8mの関東ローム層の下部（下部ローム層）からケイ岩、石英などの尖頭器、チロッパ（カンナの刃のような石片）など約1万点にのぼる石片を発見しました。

下部ローム層は、いまから6万～10万年前とされているので出土品もほぼ同年代と推定され、相沢氏はこのうち千点の資料を原人が存在した中国の周口店文化（10万～3万年前）とアフリカ・オールドバイン文化などの文献と比較、検討し、さらに地層の考察を進めたところ、類似点が非常に多く「夏井戸遺跡」での人類存在の可能性が強まったというものです。

相沢氏は、見つかった石片を自然石だとする考古学者の反論も強いが、結論を急が

ず、人類の存在を前提とした基礎資料として提供するつもりです」と語っていますが、岩宿遺跡と一緒に発掘した明治大学の杉原莊介教授（考古学）は、もし本当なら日本にネアンデルタール人類の文化があったことになるのだが、前期旧石器時代の意味の取り違い、比較文化の誤り、あるいはネアンデルタール人類の文化遺物かどうか証明されていないなど、疑問の点もあるとしています。

岐阜に良質のウラン鉱脈

岐阜県東濃鉱山の探掘調査を進めていた動力炉・核燃料開発事業団中部探掘鉱務所は、上岐市泉町賤洞の月古鉱床で良質のウラン鉱脈を掘りあてました。これは岡山県人形峠に次ぐ2番目の採取ですが、埋蔵量は同峠の約2倍、鉱石は企業化に十分見合う高品位ということです。

回探掘鉱務所は、鉱石を試験採取するため、昨年7月から坑道掘りを始め、深さ百三十八メートルの縦坑を昨年2

月上旬に完成し5月から縦坑の深さ百二十六メートルのところから横坑を二百五十メートル掘り、そこから北へ数十メートル掘り進んだところ掘りあてたものです。そして、

11月にはウランを含んだ鉱石が出始め、放射能測定器のシンチレーションカウンターの針が振り切れるほどの高感度を示しました。放射能測定値から換算して企業化のメドとされている〇・一％（1トンの鉱石に1キロの酸化ウラン）以上の品位といえます。

これまでのボーリング調査では、同地点から50m北で国内最高の〇・五％の鉱脈が確認されているほか、埋蔵量も定林寺、謡坂、美佐野などの各鉱床を含めて、国内埋蔵量八千トンの三分の二に近い五千二百トンと推定されています。

しかし、回事業団の資源部次長の竹中俊二氏は、これで「採算のとれる鉱山」だと結論を急ぐのは誤りで、あと2～3年もかけて試験調査をしてみなければ、なんとはいえません」と語っています。

●円盤トピック

●円盤、米国に集中

米国では昨年から円盤の飛来がにわかに増大しつつあり、各地に見たという「証人」が続出しています。ルイジアナ州では五千人もの円盤ファンが駐車場で夜明かしをするほどの熱狂ぶりです。オハイオ州の地元紙のカメラマンはあやしげなV字型の光体群をカメラにおさめ、スカイラブの宇宙飛行士まで地平線に赤い物体を見たという、オハイオ州知事のギリガン夫妻も鳥でも飛行機でもない、こはく色の直立型の物体を30分近くも観察したと伝えられています。

こうなると必ず出てくるのがイタズラ者で、オハイオ州では、アンテナと銀紙を体につけた男が2人見つかり、デラウェア州では町の消防団員がひそかに円盤をつくって、夜間オレンジ色のライトをあてて騒ぎになり、警察につかまりました。（朝日）

連載—ノンフィクション

神々の戦車(4)

エーリッヒ・フォン・デニケン

- イースター島の巨大な石像群のナゾ
- マヤ族の驚くべき文化と不思議な消滅
- バレンケの石棺の奇妙な浮彫は太古の宇宙飛行士？
- 正確無比な古代のマヤ暦はどこから伝わったか
- 無数に出現するヘビのシンボルは何を意味するか？
- 古代にブラネタリウムの知識があった！



第8章 鳥人の島——イースター島

○巨大な石像群と奇妙な象形文字

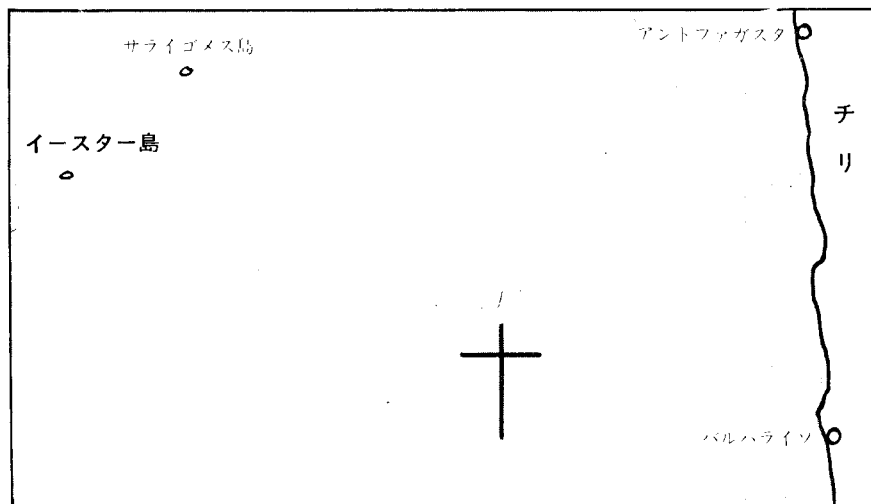
十八世紀の始めにイースター島に上陸したヨーロッパの最初の船乗りたちは、自分たちの目を容易に信ずることができなかった。チリ沿岸から、二千三百五十マイルも離れたこの小さな土地で、島全体にちらばってころがっている数百の巨大な石像を見たのである。大山塊の全体が変形して、鉄のように固い火山岩がバターのようにつけられ、一万トンに及ぶ岩石（複数）が仕上げのされたとは思えない場所に横たわっている。数百個の巨大石像のなかには三十三ないし六十六フィートの高さで五十トンもの重さをもつものもあるが、それらがふたたび動かされるのを待っているロボットのように、今日も挑戦的な目つきで訪問者をにらみつけている。もとこれらの巨像は帽子をかぶっていたのだが、その帽子でさえも像の不可解な由来を解くカギにはならない。一個が十トン以上もある石の帽子は胴体にくっついていて、別な場所で見えられた。しかもそれらの帽子を空中高く持ち上げる必要があったのだ。

当時奇妙な象形文字を記した木の枝がいくつかの像の上にのせてあるのも発見された。しかし現在では世界中の博物館でこの木片を十個以上見つけるのは不可能である。残っている木板に記された文字のいずれもまだ解説されていない。

この神秘的な巨人たちを調査したトール・ヘイエルダール（「コン・チキ号探検記」の著者）は、はっきりと区別できる三種類の文化期を確証したが、このなかで最古の文化期が最も完全であったらしい。彼は自分が発見した木炭の遺物を紀元四百年頃のものとしている。壁炉と骨の遺物が石像と何かの関係があったかどうかはわからない。ヘイエルダールは岩壁やクレタールのふちで数百個の未完成の像を発見したし、数千個の簡単な手斧が、まるで突然に仕事を中止したかのようにあたり一帯にちらばっていた。

○だが巨像を作って運んだか

イースター島はいかなる大陸や文明圏からもあるかに離れた所にある。しかし島民たちは他

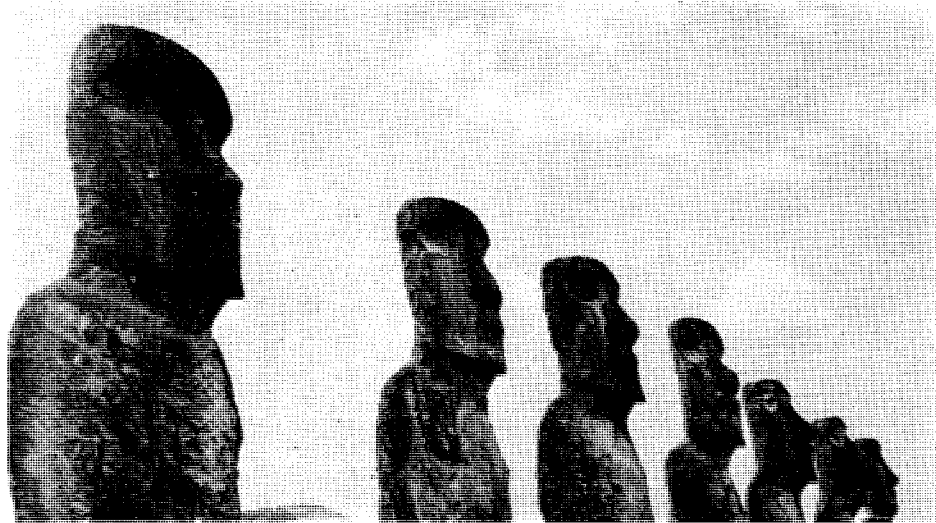


のどの国よりも月や星々に精通していた。この島には木は生えない。そこはちっぽけな火山岩の土地にすぎないのだ。巨大な石像群は木のローラーで現位置に運ばれたというありふれた解釈はこの場合もあてはまらない。しかもこの島は三千人以上の住民に食糧を供給することはまづ不可能だったはずである（現在は数百人の土民が住んでいる）。島の石工たちに船で食糧や衣類を運んだとは古代ではほとんど考えられない。そうすると、一体だれが石像群を岩盤から切り出して彫刻し、現在位置へ運んだのだろうか？ ローラーもないのにどのようにして原野を越えて数マイルも動かしたのだろうか？ 一体どうやって像を仕上げ、磨き、直立させたのか？ 像の石切場とは別な石切場から切り出した石の帽子をどうやってかぶせたのか？

たとい豊かな想像力のある人がエジプトのピラミッドを、よいとまげえ方式によるぼう大なドレイ群によって建設されたと考えるにしても、イースター島では人力の不足のためにこれと同じ方式を用いるのは不可能だろう。二千人の人間が昼夜働いたにしても、幼稚な道具を用いて鉄のように固い火成岩から巨像を彫り出すのに十分な人数とは思えない。しかも住民の一部は不毛地をたがやしたり漁に行ったり、布を織ったり、ナワを作ったりしたにちがいない。そうだ、二千人の人間だけで巨大な石像群が作れるわけがないのだ。しかもこれ以上の人口はイースター島では考えられない。すると、

だれがこの仕事をやったのか？ どんな方法でやったのか？ なぜ石像群は島のフチにならんでいて、奥地にないのか？ いかなる信仰に用いられたのか？

●空をにらむイースター島の石像群



○愚かな白人宣教師と 空飛ぶ人間の伝説

しかし残念なことに、この島へやってきた最初のヨーロッパ人宣教師たちが、島の暗黒時代を暗黒のままに閉じこめてしまったのである。彼らは象形文字の記された木板を焼き、古代からの神々の信仰を禁じ、あらゆる伝説を抹殺してしまったのだ！ だがこの「信心深い紳士たち」の徹底的な破壊にもかかわらず、この島の原住民たちが島のことを「鳥人の島」と呼ぶ習慣まで禁ずることはできなかった。今でもそう呼んでいるのである。

伝承によると、古代に空を飛ぶ人間がこの島に着陸して火を燃やしたという。この伝説は大きな、にらみつけるような目をした空飛ぶ人間の像によって確証される。

ここでイースター島とティアウアナコの関係がひとりでに浮かびあがってくる。ティアウアナコにも同じようなスタイルの像があるのだ。禁欲的な表情をたたえた尊大な顔つきは両方の像に共通している。一五三三年にフランシスコ・ピサロがインカ人にティアウアナコのことを尋ねたとき、彼らはその町がずっと廃墟だったと答えた。ティアウアナコは人類の闇黒の時代に建設されたというのだ。伝説によればイースター島は「世界のヘソ」といわれている。ティアウアナコからイースター島までは三千二百五十マイル以上も離れている。一方の文化が他方

のそれに影響を与えることができるだろうか。

○ブレ・インカの神話が語るもの

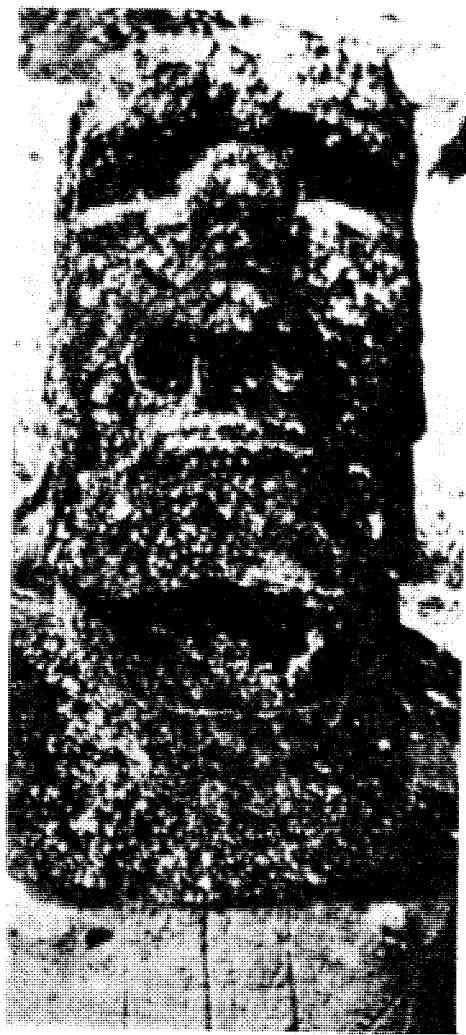
たぶんここでブレ・インカの神話がヒントを与えてくれるかもしれない。それによると創造の神であるヴィラコチャは太古の原初的な神であつた。伝説によればヴィラコチャは世界がまだ暗黒で太陽がなかった頃にこの世を創造したという。彼は石で巨人族を彫つたが、巨人族が彼を不愉快にさせたのでそれらを大洪水の中に沈めてしまった。それからチチカカ湖の上空に太陽と月を昇らせたため、地上に光があたりようになつた。次に——この部分に注意して読みたい——彼はティアウアナコで人間と動物の粘土の像を作り、それに生命を吹き込んだのである。その後自分で作つたこの生きものたちに言語、習慣、技芸などを教え、ついにはそのなかのいくつかを別々な大陸へ飛ばせて、そこで住むようにさせた。この仕事はすんだあとでヴィラコチャは神と二人の助手は多くの国々へ旅して、彼の教えが守られているか、どんな結果になつたかを調べてみた。老人の衣服を着たヴィラコチャはアンデスを越えたり沿岸を歩きまわつたが、ときにはひどい待遇を受けたこともあつた。あるときカチャではひどくいやがられたので、怒つた彼は断崖に火をつけたところ、国中が燃え始めた。すると恩知らずの人々も彼の許しを乞うたので、彼は簡単な身振りで炎を消

してしまつた。ヴィラコチャは旅を続けて、いろいろと教えたり忠告を与えたりしたので、その結果多くの寺院が彼のために建てられた。最後に彼はマンタの沿岸地方で別れを告げて、波に乗りながら大海を越えて消え去つたが、また来るつもりだといひ残した。

南アメリカ、中央アメリカを征服したスペインの征服者たちは、いたる所でヴィラコチャの伝説に出くわしている。彼らはそのとき初めて天空のどこから来た巨人の白人族のことを聞いたのである。しかも驚いたのは、人間にあらゆる種類の技芸を教えて去つて行つた「太陽の子」族について知らされたのである。スペイン人が聞いた伝説類すべてに、太陽の子らが帰ってくるという確約が含まれている。

アメリカ大陸は古代文化の本場であるが、わ

れわれのアメリカに関する正確な知識はせいぜい一千年にさかのぼるにすぎない。織機を知らないばかりか所有もしていなかったインカ人がなぜ紀元前三千年にペルーで綿を栽培したのかはまったくのナゾである。マヤ族は道路を作つたが、車輪について知つていたのにそれを使用しなかつた。グアテマラのティカルにある古墳ピラミッド中であつたすばらしい五本コリヒのヒスイの首飾りは一つの奇跡である。なぜならそのヒスイは中国産のものであるからだ。オルメケンの彫像は信じられないほどにすばらしい美しいヘルメットをかぶつた大きな頭部像は、博物館では展示されないもので、発見現場へ行つて鑑賞するほかはない。その彫像群の重量に耐える橋がその国にはないのだ。現代の起重機や積載機を使用すれば五十トンまでの小さな「



●神秘的なイースター島の石像

枚石”なら動かすことはできるが、こんな数百トンもある物になるとお手上げである。しかるにわれわれの祖先はその巨大な石像を運んだり仕上げをしたりできたのだ。どういう方法を用いたのか？

どうやら古代人たちはまるで手品のように石の巨像をもち上げて山や谷を越えさせることに特別な楽しみを感じていたらしい。エジプト人はアスワンからオベリスクを運んだし、ストーンヘンジ（英国のソールズベリー平原にある古代の巨石柱群）の建築家たちは、大石ブロックを南西ウェールズとモールボロから持ってきたし、イースター島の石工たちはすでに出来上がった巨像を遠くの石切場から現在の位置へ移動させたのだ。そしてティアウアナコの一枚石の巨像群がどこからもちたかを知っている人はいない。われわれの遠い祖先は奇妙な人種であったにちがいない。彼らはみずから物事を困難にすることを好み、いつも彫像を到底考えられないような場所に建てたりする。きびしい生活を好んだためだろうか。

遠い過去の芸術家たちがそれほどバカだったと私は思いたくない。彼らは石切場のすぐ隣りにでも巨像や神殿をまったく簡単に建てることはできただろう。ところが古い伝説によって作品を置くべき場所がきめられていたのである。私は確信するが、サクサウアマンにあるインカの実家は偶然にクスコの手手に作られたのではなく、むしろ伝説がその場所を聖地として指定

したからである。更に確信するのは、人類最古の記念碑的建物が発見された場所のすべてには、過去の時代の最も興味ある重要な遺物がまだ手つかずのまま埋もれているということだ。しかもこれは現代の宇宙旅行の発達にはかり知れない重要さをもつものかもしれない。

○太古の宇宙人飛来の証拠が まだ地中にある？

何千何万年も昔に地球を訪れた正体不明の宇宙飛行人は、われわれが今日先見の明があると思っているのと同じほどにやはり先見の明があったのだろう。彼らは地球人がいつかは自発的に自分自身の技術を用いて宇宙空間へ飛び出さだろうと確信していたのだ。この惑星の人間が宇宙の中に類似の精神や生命や同じような人間を常に探し求めてきたことは、よく知られた歴史的事実である。

現代のアンテナと送信機は未知の知性体に最初の無線電波を発射した。反応を受信するのはいつか——十年、十五年、あるいは百年後か——かわからない。それどころか、どの星にメッセージを送ればよいかわからない。どんな惑星がわれわれに最も関心をもっているかわからないからだ。どこでわれわれの信号が地球人に似た未知の知性体にとどくだろうか。これもわからない。だがわれわれの目標に達するのに必要な知識が地中に埋められているという確信を裏づけるものが沢山ある。われわれは重力を遮

断しようと懸命に努力したり、素粒子や反物質の実験などをやっている。しかしわれわれがもと出てきた故郷をつきとめようとして、地中に隠されている資源を見つけようとしているのだろうか？ してはいないではないか。

われわれが物事を文字どおりに解釈するならば、かつて非常に困難であった過去の物事の解決の多くがもっともらしいものとなる。古代の古文書の適切な糸口ばかりではなく、世界中にわれわれの批判的な目を向けさせている“きびしい事実”までが納得のゆくものとなるのである。結局、人間は物事を考える理性を持っているのだ。

○人類の究極の悟りとは

そこで人間の究極的な悟りとは、今日まで人間が生存してきたことの正しさを悟ること、人間が前進しようとする努力は、宇宙空間内にいる生存物とコンタクトする資格を得るには過去から学ぶことが大切だという真理を悟ることにあるのであろう。そういうことになれば、最も頭迷な個人主義者といえども、人間の仕事はすべて宇宙に進出することであり、また人間の精神的な義務のすべては、自分の努力と実際的な体験をいつまでも続けることにあるということとを悟るにちがいない。そのときになれば、地上に平和が訪れて天空への道は開かれるという“神々”の約束は実現するだろう。

第9章 南米の神秘と不思議な遺物

この二千年間の人類の歴史を問題にするのが私の意図ではないということを強調したけれども、ギリシャやローマの神々と伝説に出てくる人物のほとんどは、遠い過去の息がかかっていると私は思う。人類が存在して以来、古い伝説が各種の民族のなかに生きている。近代の文化も遠い未知の過去を示すシルシを与えてくれるのである。グアテマラとユカタン半島（メキシコ）のジャングル中に残る遺跡は、エジプトの巨大な建造物に匹敵する。メキシコの首都の六十マイル南にあるチウラのピラミッドの底面積はケオプスのピラミッドのそれよりも大きい。メキシコ市の北二十五マイルの所にあるテオティワカンのピラミッド敷地はほぼ八平方マイルに及び、そのあらゆる建造物は星々の位置にしたがって並んでいる。テオティワカンに関する最古の記録によると、神々がここに集まって人間のことで会議を開いたという。これはホモ・サピエンスが存在する以前のことなのだ！

○マヤ族の不思議な消滅

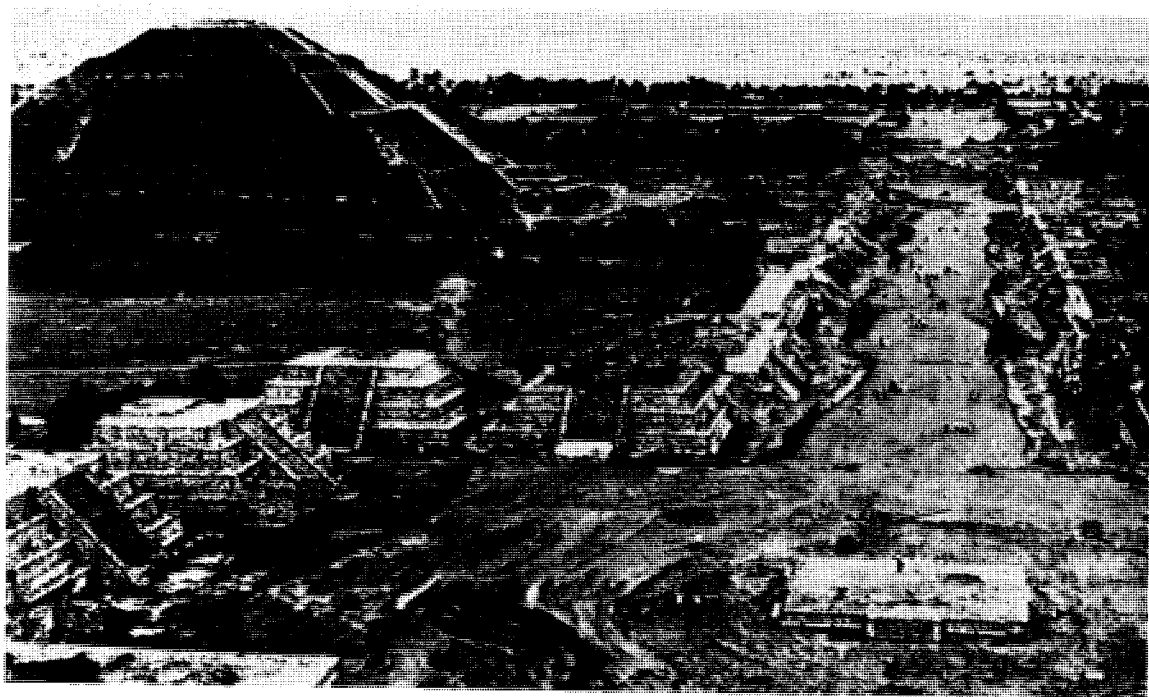
マヤ人の暦は世界で最も正確なものであったが、このことはすでに述べた。今日わかっているのは、チチン・イツァ、ティカル、コパンやパレンケなどの建造物のすべては伝説的なマヤ暦にしたがって建てられたということである。マヤ人は必要があってピラミッド群を造ったのではないし、また神殿を建設したのでもない。建造物の一定数の階段が五十二年ごとに完成されねばならないということを暦が定めていたからなのだ。どの石も暦に関連していた。また完成した建造物のいづれも天文学的な条件に正確にしたがっている。

しかし紀元六〇〇年にまったく信じられないような事が発生した！突然、しかもはっきりした理由もなくマヤ人全部が苦勞して頑丈に建設した都市群から離れてしまったのである。壮麗な神殿、芸術的なピラミッド、石像の並んだ広場、堂々たるスタジアムなどのある都市から消えうせたのだ。ジャングルが建築物や道路を食いつくし、石造物をこわし、あらゆる物を巨大な廃墟と化してしまったのだ。そして住民はもうそこへ帰らなかつたのである。

この途方もない民族の大移動が古代エジプト

で起こったことにしてみよう。数世代にわたって人々は神殿、ピラミッド、都市、水管、道路などを暦の日付にしたがって建設した。原始的な道具を用いて、すばらしい彫刻が岩石から彫り抜かれ、壮麗な建築物の中に設置された。一千年以上も続いたこの仕事が完成したとき、彼らは家を離れて不毛の北方へ移動したと――

だが、われわれがよく知っている歴史的な物事の成行きをもう少し注意してみると、こんな事があったとは思えない。ばかばかしい事であるからだ。一つの成行が理解できぬほどますますあいまいな説明や解釈がふえてくるのである。まず出てくる最初の解釈は、マヤ人は国外からの侵入者によって追い払われたのではないかということだった。しかし文明や文化の最盛期にあったマヤ人をだれが打ち負かすことができただろう。戦争と関係があると思われる跡は見見されていない。氣候の大変化によって大移動が起こったという考えは考慮の余地があるが、この説を裏づけるシルシもないのだ。マヤ人の古王国から新王国の境界までに至る距離は直線で二百二十マイルにすぎない。これは氣候の破壊的な変化をのがれる距離としては不十分



●テオティワカンの「月のピラミッドの広場」と「太陽のピラミッド」

である。破滅的な疫病によってマヤ人が移動せざるを得なくなったという解釈もまじめに考えてみる価値はあるが、この解釈は多くの説のうちの一つとして出されたということ以外に、ほんのわずかな証拠もないのだ。若い世代と古い世代との戦いでもあったのか？ 若者たちが老人に反抗したのか？ 革命でもあったのか？ これらの可能性の一つを選ぶとすれば、総人口の一部分にすぎない敗れた人たちがだけが国を離れて、勝者たちは元の居住地に残ったことだろう。だが考古学的調査の結果、マヤ人で残留した者はただの一人もいないことがわかった。民族全体が聖地を無防備のままジャングル中に残して、突然逃げたのである。

○「神々」が約束を守らなかった？

こうした種々の意見のコンサートの中へ、私も一つ新しい楽音を投げ入れてみたい。ただし他のいずれの解釈もそ

うであつたように、この説も立証はされない。しかし他の諸説の可能性をかえりみず、私は敢えて大胆に確信をもって述べることにしよう。

遠い大昔のある時期にマヤの先祖は「神々」（この「神々」というのを別な惑星から来た宇宙旅行者とみなしているのだが）の訪問を受けたとすればどうだろう。多くの要素が裏づけているのだが、南米の文化的な諸民族の祖先は古代オリエントから移ってきたのかもしれない。だがマヤ人の世界には天文学、数学、暦に関してきびしく守られた聖なる伝承があつた！ そして、神官たちはこの伝説的な知識を守った。「神々」が、いつか帰ってくると約束したからだ。彼らは壮大な新宗教を創始した。ククルカン、すなわち「翼をもつヘビ」の宗教である。

神官の伝承によれば、神々は、大建築物が暦の周期の法則にしたがって完成したときに天空から帰ってくるのだという。そこで人々はこの聖なるリズムにしたがって神殿やピラミッドを完成させようと急いだ。完成の年が喜びの年になるからだ。そうすればククルカン神は星々からやってきて、建築物を所有し、ずっと人間とともに住むというのである。

工事は完成した。神がやってくる年がめぐってきた——だが何事も起こらない。人々は歌い、祈り、一年中待った。ドレイ、宝石、トウモロコシ、油などが供えられたが、だめだった。天空は静まったまままで何のシルシも現われない。



●バレンケの王墓の石棺の浮彫

天空の戦車は出現しないし、遠くの轟音も聞こえない。まったく何も起こらなかった。

以上の憶測に可能性があるとすれば、神官や人々の失望はすさまじかったにちがいない。何百年もかかった仕事が悪メになったのだ。ここ

で疑問が起こってくる。暦の計算に誤りがあったのか？ 神々はこの場所へ降りたのか？

神々がとんでもない誤りをやったのか？

暦の始まったマヤ人の不思議な年は、紀元前三一一一年にさかのぼる。この証拠はマヤの記

録の中にある。この年代を正しいものと認めれば、それとエジプト文化の始まりのあいだには数百年のギャップしかない。この伝説的な年代は正しいと思われる。というのは正確無比なマヤの暦が何度も伝えていからである。そうだ

とすれば、私を懐疑的にするのは曆と民族の移動だけではない。というのは比較的新しいある事実が、うるさい疑惑を起こさせているからだ。

○パレンケの石棺の奇妙な浮彫

一九三五年にほとんどククマツ神とみて差支えない石の浮彫りがパレンケ（古王国）で発見されたのである（ユカタンではククマツ神をクルカンという）。この絵をまったくの偏見なしに見れば、どんなに頑固な疑い深い人でも考え込むだろう。（右頁の写真）

そこには一人の人間がすわっているが、体の上部をオートバイ競争の選手のように前に曲げている。今日ならどの子供でもこの絵に描かれた乗物をロケットと認めるだろう。先端がとがっていて、次に吸入孔に似た奇妙なミゾのある刻み目の部分となり、巾が広くなって、炎を噴き出す尾部で終わっている。前かがみの人間は種々のわけのわからぬ操縦装置をあやつっており、左足の力カトを一種のペダルの上に置いている。その衣服もうまくできている。巾の広いベルトでしめた半ズボン、首の所が日本のキモノのようにえりの開いたジャケツ、腕と足にびったりとはめてあるバンド。これと類似した絵画の知識をもち出すと、ここにも複雑なヘルメットがなければおかしいことになるが、それもある。くぼみと管のついたヘルメットで、てっ

ぺんにはアンテナのような物もある。この宇宙飛行士は——宇宙飛行士としてはっきり描かれているのだが——前方へかがんでいるだけではなく、顔のすぐ前にぶらさがっているある装置を熱心に見つめているのである。この飛行士のフロントシートは、支柱によって乗物の後部と切り離してある。内部には左右対称に配置された箱、輪、点、ラセンなどが見られる。

この浮彫は何を語る必要があるのか？ 何も語ることはないのか？ 宇宙飛行と結びつけることは愚かな空想の産物なのだろうか？

このパレンケの石の浮彫も一連の証拠物件から除外されるとすれば、驚くべき発見物の調査にあたって学者が示している誠実さを疑わねばならなくなる。現存する物を分析するのは幽霊を見ていることではないのだ。

●浮彫をほどこした石棺



○マヤ族の驚くべき天文学的知識

さて、これまでに未解決な疑問を出し続けてみよう。

なぜマヤ人は川のそばや海辺でなく、ジャングルの中に最古の都市(複数)を建設したのだろうか? たとえばティカルはホンジュラス湾から直線距離で百九マイル、カンペチェ湾の北西百六十一マイル、太平洋の北方へ直線距離で二百三十六マイルの位置にある。マヤ人が海に対してきわめて親しくしていた事実、サンゴ、貝などで作った莫大な数の品物で示されている。そうすると一体なぜジャングルの中へ「逃亡」したのか。水辺に住むことはできたはずなのに、なぜ貯水池を作ったのか? ティカルだけでも計二十一万四千五百立方ヤードの容量をもつ十三の貯水池がある。なぜ彼らは無条件でここに住み、建物を建て、働かねばならなかったのか? なぜもっと「合理的な」場所に住まなかったのか?

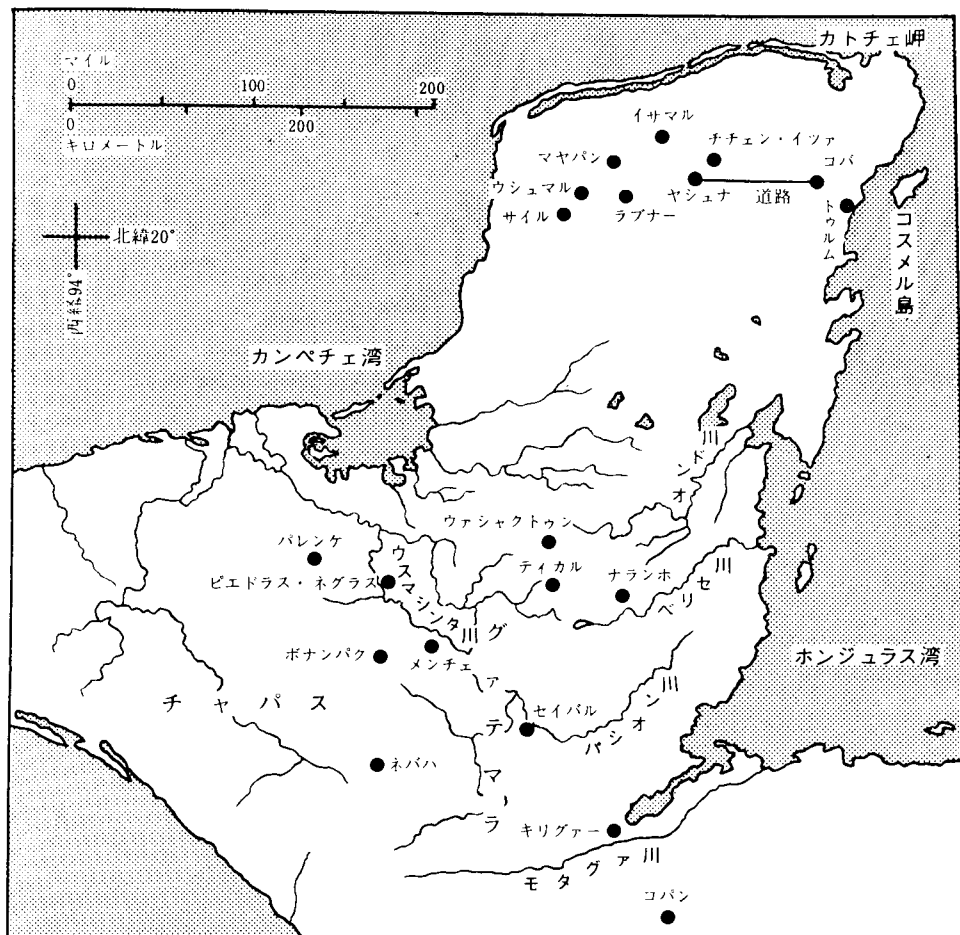
失望したマヤ人たちは長い旅を続けたあと、北方に新しい王国を築いた。そしてここでもまた太陽暦で定められた日付にしたがって、都市群、神殿、ピラミッドなどを建設した。

マヤ暦の正確さを少し伝えるために、彼らを用いた時間の単位をあげてみよう。

二十キン

Ⅱ一ウィナル(二十日)

神秘とナゾに満ちたメキシコ、ユカタン半島



十八ウィナル

二十トゥン

二十カトゥン

二十バクトゥン

二十ピクトゥン

Ⅱ一トゥン(三百六十日)

Ⅱ一カトゥン(七千二百日)

Ⅱ一バクトゥン(十四万四千日)

Ⅱ一ピクトゥン(二百八十八万日)

Ⅱ一カラプトゥン(五千六百六十万日)

日

二十カラプトゥン Ⅱ一キンチルトゥン(十一億五千二百日)

百万日

二十キンチルトゥン Ⅱ一アタウトゥン(二百三十億四千

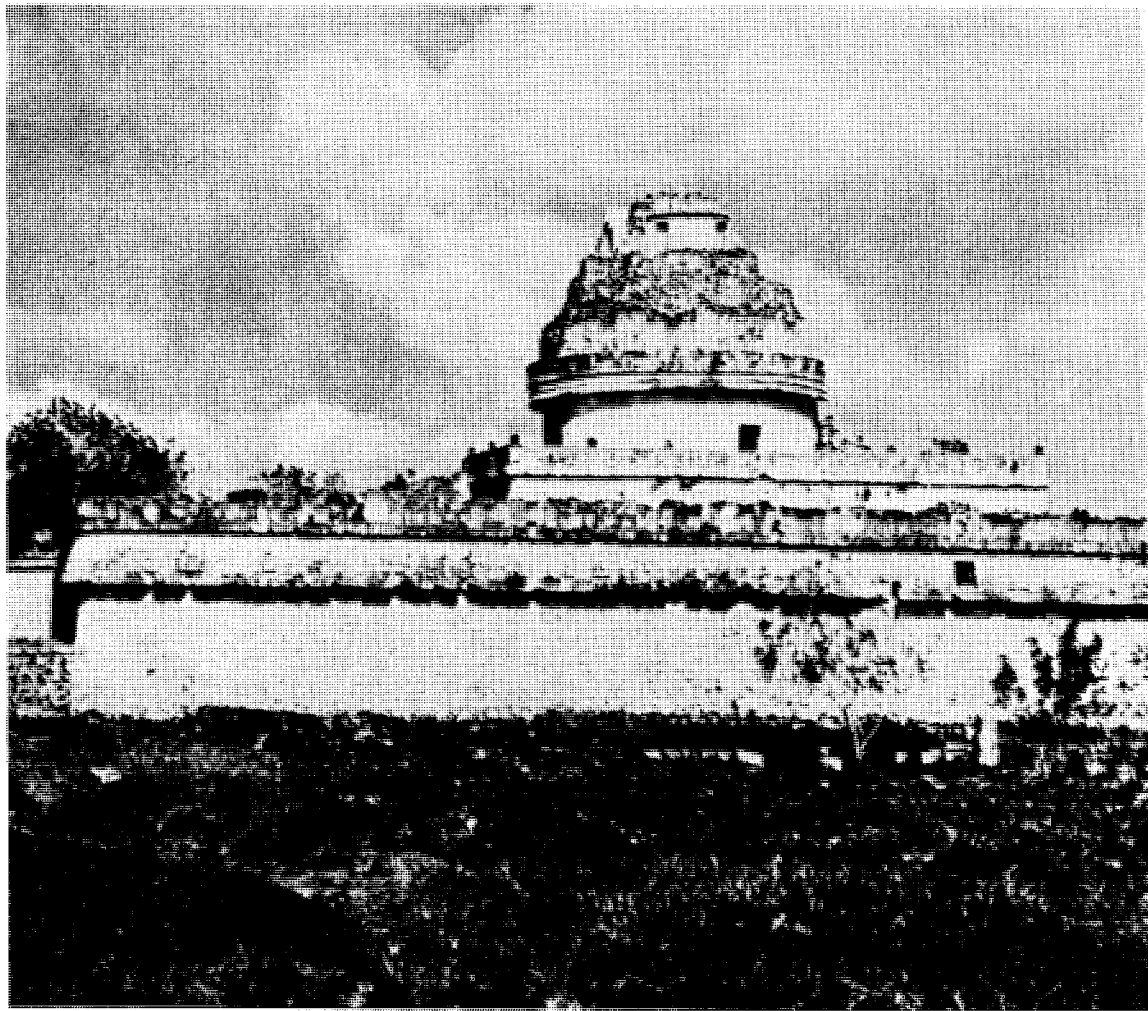
万日)

しかし暦にもとづいて築かれた石段がジャングルという緑の屋根の上にそびえる唯一の建設物ではない。天文台（複数）も建てられたのである。

チチェンの天文台はマヤ文明で最初にして最古の円形建築物である。今日でも修復されたその建物は天文台のように見える。三つのテラス上で円形大建築物がジャングルの上に高くそびえている。内部にはラセン階段が最上部の観測塔まで続き、ドーム内には星々にむかったハッチや窓などがあり、夜間の広大な星空を見るようになっている。外壁は雨の神のマスクで飾っており、翼をもつ人間の像もある。

だがマヤ人が天文学に関心をもっていたからといってそれが他の惑星の知性体と関連があるというわれわれの憶測に対する十分な理由にはならない。これまで未解決であった多数の疑問類はわれわれを悩ましている。

マヤ人はどうして天王星、海王星を知ったのか？ チチェンの天文台の観測穴はなぜ最も明るい星の方へ向けていないのか？ バレンケのロケットに乗る神の浮彫は何を意味するのか？ 四億年の計算をもつマヤ暦のポイントは何なのか？ 小数点以下四ケタに至る太陽年や金星年を計算するのに必要な知識をどこで仕入れたのか？ この途方もない天文学的知識をだれが伝えたのか？ この事実のすべてはマヤ人の知能の偶然的産物なのか？ それとも各事実の、またはすべての事実の背後に、マヤ人の視点から見



●チチェン・イツァの天文台

てはるかな未来へ革命的なメッセージが隠されているのだろうか？

もしあらゆる事実をふるいにかけてより分け、多くの矛盾や不合理なものが残り、多数の難問を解決するのに新たな大規模な活動を展開する必要があるだろう。現代はいわゆる「ありそうにもない事」に直面した場合、学会が何もしないで満足している時代ではない。

○聖なる池とヘビのシンボル

もう一つ恐ろしい話がある。チチェン・イツァの聖なる池の話だ。この池の悪臭を発する泥の中からエドワード・ハーバート・トンブソンが宝石や美術品ばかりか若者のガイ骨を堀り出したのである。古文書を調べたデイエゴ・デ・ランダは早稲つときには神官がその池までやってきて、おごそかな儀式を行なうあいだに少女少女たちを池に投げ込んで、雨の神の怒りをしずめたと述べている。

このデ・ランダの説をトンブソンの発見物が実証したわけである。身の毛のよだつ話だが、これはまた池の底から多くの疑問を明るみに出した。この池は一体どうしてできたのか？ なぜこれが聖なる池と称されたのか？ ほかにも似たような池がいくつかあるのに、なぜこの池が特に選ばれたのか？

ところが、チチェン・イツァの聖池とまったく同じ池が、マヤ天文台から七十五ヤード離れた

たジャングル中に隠されていたのである。ヘビやムカデや毒虫などに守られたこの池は大きさがホンモノの池と同じであった。その垂直の内壁は同じように古びてジャングルの中に埋もれている。この二つの池は寸分違わぬほどに似ていて、水位も同じで、水の色は両方とも緑から茶色に、そして血のような赤い色に変化する。たしかにこの二つの池は古さも同じであろう。たぶん両方ともイン石の落下によってできたのかもしれない。ところで、現代の学者はチチェ

ン・イツァの聖池だけを語り、よく似た第二の池は研究の対象にされない。両方とも最大のピラミッドであるカステイリヨの頂上から九百八十ヤードの所にあるのだ。このピラミッドは翼をもつヘビ「ククルカン」神のものである。

ヘビはマヤの建築物すべてのシンボルとなっている。これは驚くべきことだ。というのは、マヤ人が繁茂した草花にかこまれた民族ならば石の浮彫に花のモチーフを残しそうなものであるからだ。だがどこへ行ってもイヤらしいヘビ

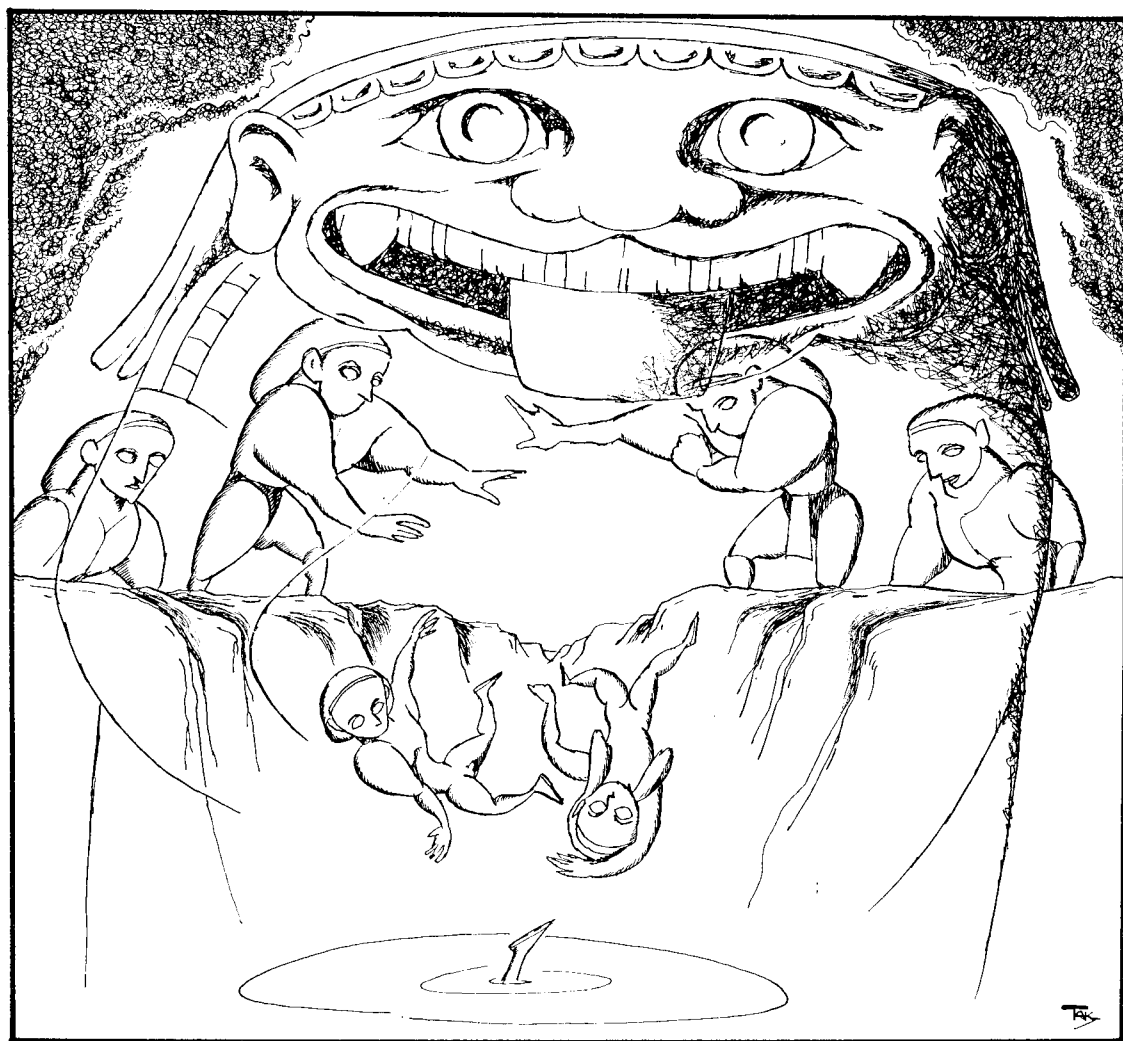


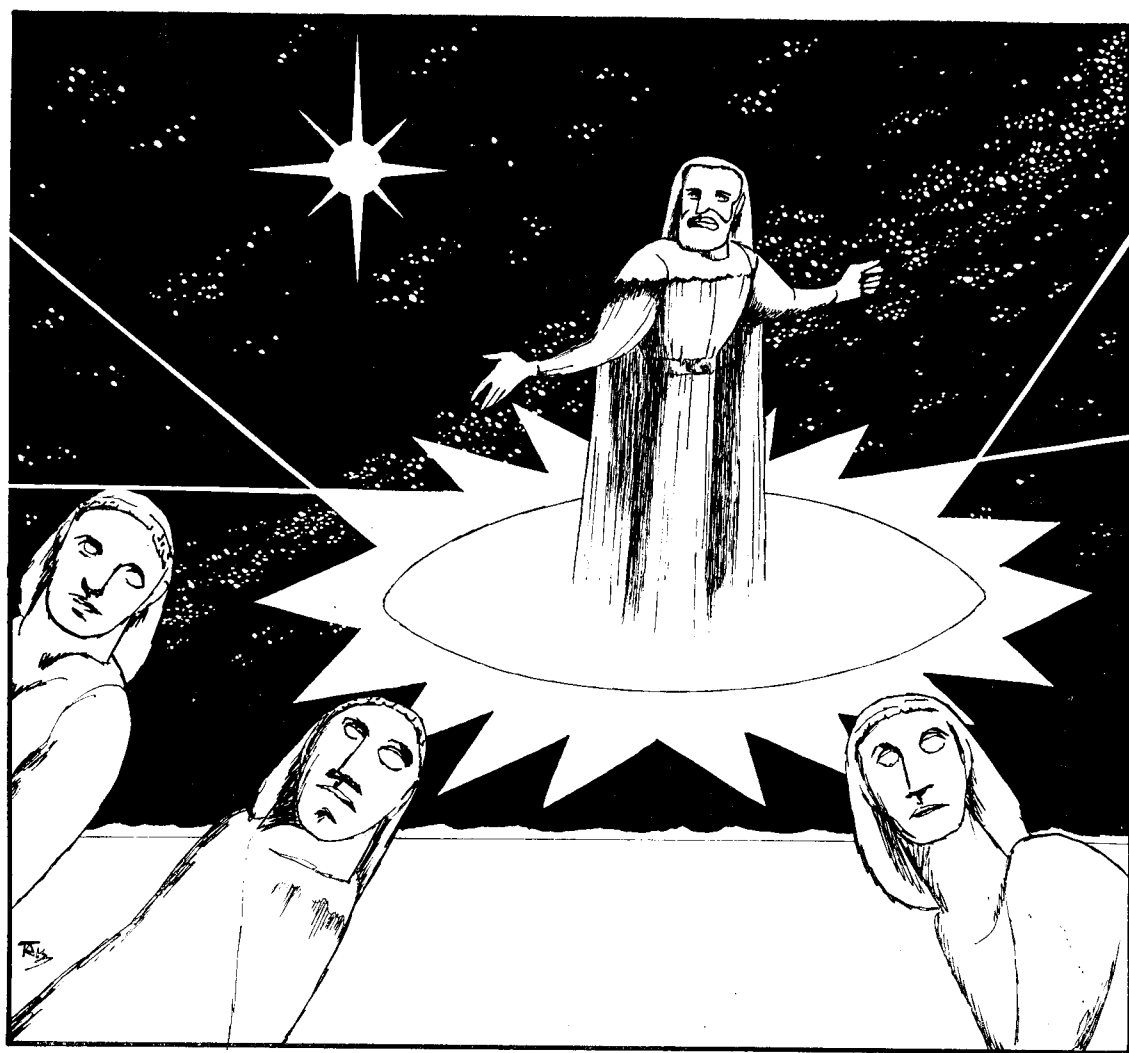
●チチェン・イツァの聖なる池

の模様が待ち受けている。遠い昔からヘビは地面のホコリの中をはいまわっている。しかしなぜそのヘビにマヤ人は空を飛ぶ能力を与えるようになったのだろうか？ もともと悪の象徴であるヘビは地面をはうように運命づけられている。どうしてこのイヤらしい生きものを神として礼拝できよう？ しかもそれが空を飛べるとは！ しかしマヤ人にとってはヘビが空を飛ぶことはできたのである。ククルカン神（クマツ）はたぶん後代の神ケツアルコアトルの姿になったものであろう。このケツアルコアトルに



●ケツアルコアトルをあらわす翼をもつヘビの石彫

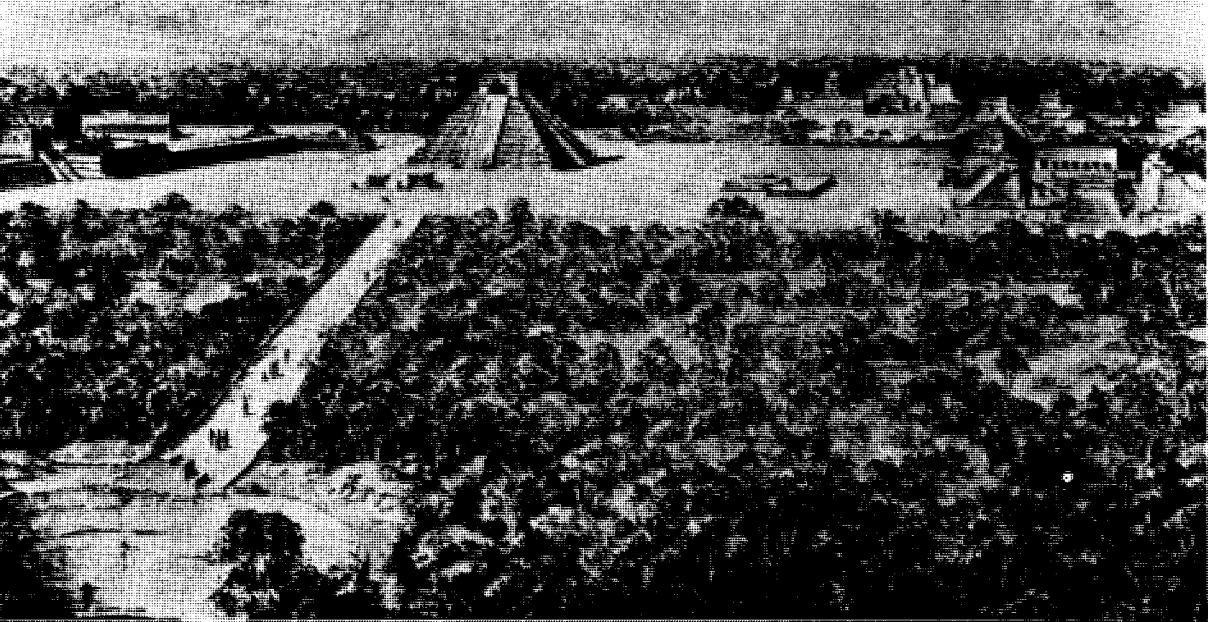




ついてマヤの伝説は何を語っているか？

この神はどこともわからぬ日出づる国から、白衣を着てあごひげをはやしながらやってきたのである。彼は人々に科学、芸術、習慣などを教え、きわめて賢明な法律を残した。彼の指導のもとにトウモロコシは人間と同じほどの高さに伸び、綿は色づくほど成長したといわれている。ケツアルコアトルは使命を終えてから道すがら教えを伝えながら海の方へ帰って行った。そして船に乗って明けの明星（金星）へ飛び去った。ここでも工合がわるいのは、ヒゲをはやしたケツアルコアトルも「またやってくる」と約束したことである。

当然のことながら、この賢い老人の出現の解釈はいろいろある。一種の救世主的役割が彼に帰せられている。ヒゲをはやした男はその緯度ではめずらしいからだ。この大昔のケツアルコアトルは太古のイエスのような人であったという大胆な解釈もある。これには納得できない。古代の世界からマヤ人の所へやってきた人ならだれでも、人間や物資を運ぶ車輪のことを知っていたはずだ。伝道者、立法者、医師、人生の諸問題のアドバイザーとして出現したケツアルコアトルのような賢人ならば、その最初の行動は、車輪や荷車の使用法をマヤ人に教えたことだろう。実際、マヤ人はそれらを用いなかったのである。



●チチェン・イツァの復元図

○古代にブラネタリウムの

知識があった！

さて遠い過去からの奇妙な物に関する話をまとめて、頭の働きの仕上げをしよう。

一九〇〇年にギリシャの海綿とりダイバーたちが、アンティキテラの沖で、大理石とブロンズの像を積んだ古い難波船を発見した。この芸術作品が引き揚げられて調査された結果、この船はキリストの時代に沈没したと思われることがわかった。分捕り品を分類してみると、そのなかに形のはっきりしないかたまりが一個あった。しかもこれが彫像類のすべてを合わせたよりも重要な物であることが判明したのである。注意深く扱っているうちに、学者団は一枚の銅板を発見したが、それには環、文字、歯車がついていた。そして文字類が天文学に関係があるらしいことに気づいたのである。多数の個々の部品を洗ってみると、それが奇妙な構造をした物であることがわかってきた。動く指針、複雑な目盛やダイヤル、文字を彫り込んだ金属盤などから成る立派な機械なのだ。組み立ててみると二十個以上の小さな輪、一種の差動ギヤーと上車^{オーバー}を各一個そなえている。一個所にスピンドルがあつて、それを回すとあらゆるダイヤルがそれぞれ異なる速度で動く仕掛になっている。指針類は銅のカバーで保護されており、その表面には長い文が彫り込んである。この「アンティキテラの機械」の場合、古代に

一流の精密機械工が働いていたことに全然疑いの余地はない。しかもこの機械は非常に複雑なので、おそらくこの種の最初のものではないだろう。ソラ・ブライス教授はこの装置を一種の計算機と解釈した。これを用いて月や太陽や別な惑星群の運行を計算するのだらうという。

この機械の製作年代が紀元前八二年と記されていることはそれほど重要ではない。もっと興味深いのは、この機械すなわちミニチュアのブラネタリウムの第一号機をだれが作ったかということである！

ホーエンシュタウヘン家の皇帝フリードリヒ二世は、一二二九年に第五次十字軍から帰還したとき、東方から不思議なテントを持ち帰ったといわれている。そのテント内部にはゼンマイ仕掛のモーターがあつて、人々はテントのドーム型屋根に星座が動くのを見ることができた。もう一度いうと、これは昔のブラネタリウムなのだ。当然そのような物が存在したことは認めよう。必要な機械技術が当時すでにあったことを知っているからである。ただ大昔のブラネタリウムの概念がわれわれをいらいらさせるのは、キリストの時代には地球の回転を考慮に入れた恒星のある天空という概念がなかったのだ。古代の博識な中国やアラビアの天文学者たちでも、この不可解な事実に関しては何の説明も与えていない。ガリレオ・ガリレイが生まれたのはそれから千五百年後である。アテネを訪れる人はこの「アンティキテラの機械」を見

おとしではならない。それは国立考古学博物館に陳列してある。フリードリッヒ二世のデント式ブラネタリウムについては記録しか残っていない。

○太古の不思議な遺物

古代から残された不思議な物はまだある。

一万年前は南米にまったく存在しなかった動物、すなわちラクダやライオンなどの線画が、海拔一万二千五百フィートのマルカワシ高原の岩に描かれている。

トルキスタンでは一種のガラスまたは陶器で作られた半円形の構造物を発見した。その起源も意味も考古学者には説明できない。

大惨事で破壊されたと思われる太古の町の廃墟が、ネバダ砂漠の死の谷にある。今でも溶けた岩や砂の跡が見られる。火山爆発の熱では岩を溶かすのに十分ではないだろうし、おまけに、その熱だとすれば最初に建物を焼いたことだろう。現代ではレーザー光線だけがそのような高熱を出せるのである。奇妙なことに、この地域では一枚の草の葉も生えない。

レバノンには「南の石」と呼ばれるハジマル・エル・グブレがあり、二百万ポンド以上の重さがある。加工してあるが、人間の手では動かせるはずはない。

オーストラリア、ベルー、北部イタリアには人間がまったく近寄れぬ岩壁に、人工的に彫り

つけたマークがある。だがその由来はまだわかっていない。

カルデアのウルで発見された黄金の板に彫られた銘文には、人間に似た「神々」が天空からやって来て、その板を神官たちに贈ったと述べてある。

オーストラリア、フランス、インド、レバノン、南アフリカ、チリには、アルミニウムとベリリウムを多量に含んでいる不思議な「黒い石」がある。ごく最近の調査によれば、これらの石は太古に非常に強力な放射能をあげたにちがいないという。

スメルのかきび形文字板には惑星群をしたがえた恒星群が描かれている。

ソ連では考古学者団が飛行船の浮彫を発見した。これは一列にくっついて並んだ十個の球から成り、それが直角の枠に乗っかって、全体は二本の柱で両側が支えられている。別な発見物のなかには人間の姿をした小さなブロンズ像があるが、これはだぶだぶの服を着ており、首のところはヘルメットで密封状態になっている。クツも手袋も服につながつている。

大英博物館にはバビロニアの粘土板があり、これには過去と未来の月食について書いてある。

中国、雲南省の省都昆明で、上空へ上昇しているところを示すロケット様の機械の彫り物が発見された。この出土品は地震の際中に昆明湖の底から突然出てきたヒュミッドの上にあった

ものである。

これらの物やその他多くのナゾの遺物をどのようにに説明したらよいだろう。古い伝説類を大ざっぱにイカサマだとか誤りだとか無意味だの見当違いだのと称して片づけようとする人があれば、それは問題からのがれようとしているにすぎない。またあらゆる伝説を不正確だときめつけながら、自分の使用目的に合うときはそれを利用するのもむちゃくちゃなやり方である。新しく出た結論が人間を従来の考え方から引き離してしまうという理由だけのことで、事実または仮説などに対して目や耳をふさぐのは卑怯なことだと私は思う。

世界中で今も刻々と新しい発見が行なわれている。現代の通信や輸送の手段は発見された事を世界中に伝えている。あらゆる分野の学者は今行なっている研究にそいでのと同じ創造的な熱意をもって、過去からの報告にとりくむべきである。われわれの過去の発見という冒険はその第一段階を終了した。そして今や人間の歴史における第二のすばらしい冒険が、人間の宇宙への進出とともに始まっているのである。

(第9章終り。以下次号)

久保田八郎訳

編集部より

■本誌第3号七十五頁に掲載した「山形県の火の玉写真」の説明が印刷のミスにより脱落して申訳ありません。あれは第2号七十七頁の「警官が奇妙な物体を撮影」と題する記事の写真で、その後撮影者の松田義之巡查部長が本誌に提供されたものです。詳細は同記事に出ています。

■掲載UFO写真をもうひとつあげたい。声がありますが、大体に目撃するチャンスがそうガラにはないのに、まして写真が撮影される機会をきわめてまれなこと、一般の雑誌のクラブや頁のようにハダに口絵写真を載せるわけにはゆきません。しかしてできるだけの努力をします。

■本号より表紙の発売期間の表示が変わりました。本来なら、1・2月号となるのが本号は、隔月刊2月号となつていますが、これは一月と二月の二か月にわたることを意味します。発行日も二月一日となりましたが、実際の発売は前月の一月二十日です。したがって次の第五号は「隔月刊4月号」と表示され、発行日は四月一日ですが、全国書店発売は前月の三月二十日です。からご留意下さい。要するに奇数月（一、三、五、七、九、十一）の二十日発売という線に変更はあります。

■最近の物価高とうはすさまじく、本誌のような極上紙の紙代は大巾に値上がりしましたので、やむを得ず本号から一部定価を三三〇円としました。ご了承下さい。年ぎめ購読料も二千三百円（送料共）となりましたが、本号発売までに旧料金二千円をご送金下さい。

た方は据置きとして、誌代切れになるまで毎号発売と同時に直送いたします。

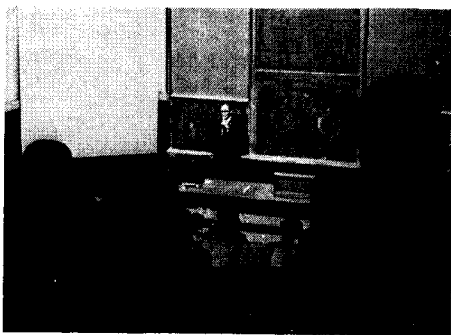
■全国から寄せられるUFO目撃報告は山積しています。掲載できなかった報告も資料として本社に永久保存します。図面はなるべく正確にきれいに書き下さい。

東京理科大学文化祭で

UFO講演とスライド映写

去る十一月二十二日から四日間、東京都新宿区神楽坂の東京理科大学で文化祭が開かれたが、二十五日には同大学超常現象研究同好会（代表小北勝正氏）主催のUFO講演会にUFO研究家の久保田八郎コズモ出版社長が招かれ、UFO講演および持参のスライド映写が行なわれた。スライドは五十コマにものぼり、旧約聖書中の円盤事件、アダムスキー円盤、日本に出現する円盤等、興味深いものがあり、約七十名の人々を圧倒させた。

（林）



講演中の久保田社長

☆本誌バックナンバー(旧号)

下記の号が本社に少しあります。未入手の方は早目に本社へ直接ご注文下さい。(No.1は品切れ)
各号 ¥300 送料 ¥85
2冊注文の場合は送料 ¥145

9-10月号(No.2)

〈UFO写真〉 テキサス州シャーマンの円盤
高松市上空の円盤

私は円盤に乗った! ダニエル・フライ
ネス湖の怪物とUFO F.W.ホリデイ
類人猿・怪物・UFO クラーク/コールマン
輝く球体が室内に侵入……アデル/レドン
オレゴン州の円盤写真……A.ヴァンス
UFOの科学的観測法……清水畑 博
1966年のウッドストックUFO祭典(1)
科学トピックス B・シュワルツ
連載ノンフィクション
神々の戦車(2)……E・デニケン

山形市の怪UFO騒ぎ
国内UFO目撃報告

読者の声

11 12月号(No.3)

〈UFO写真〉 スイス・アルプスのUFO
千葉県の小型円盤群 北海道のUFO
UFO ライディング・ライツ

パプア島の円盤騒動 クラットウェル神父
円盤の中に連れこまれた男——南山 宏
1966年のウッドストックUFO祭典(2)
東京大地震は発生するか……諏訪 彰
埼玉県羽生市の奇妙な物体
エゼキエルは何を見たか
科学トピックス
神々の戦車(3)……E・デニケン
山形県の火の玉写真
私は円盤を見た……吉宗孝子
国内UFO目撃報告
読者の声

国内UFO目撃報告

①大滝賢一(15)

能代市立第二中学校三年

②一九七三年十月十九日

午後六時三十分、十二時三十分

④晴

④午後六時三十分ごろ、近くの発電所から北東の方向に大きなオレンジ色の物体を発見。5、6秒ごとに光ったり消えたり、上下左右にきめ細かく動いていた。図a

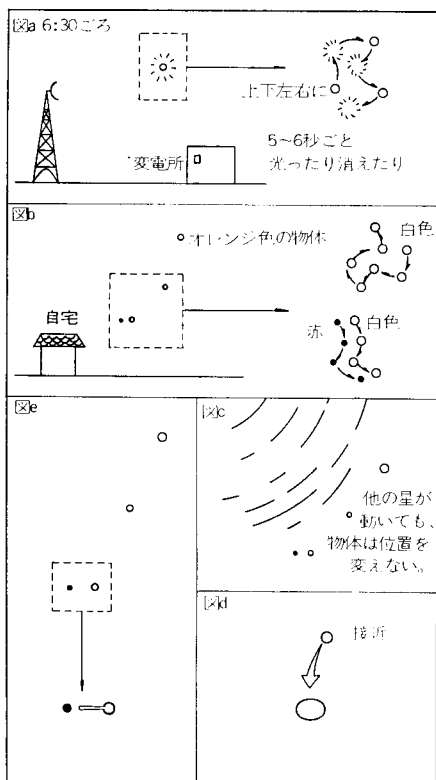
⑤6時35分ごろ、自宅(能代市養蚕)から物体を観察中、その下方にやはり上下左右にきめ細かく動く物体を2個

他に見え、図b

⑥10時すぎ、オレンジ色の物体が急に接近。多少タ円形にみえた。図d

⑦11時すぎ、左側に赤い光をもつ白色光から、その赤い光にむかって白い尾が出た。図e

他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)



発見。色は白色。そのうち下方のものは左側に赤い光があった。図b

⑧12時30分まで、それらの光の位置がまったく変わらなかった。したがって、ふだん見ている星とは考えられない。図c

⑨10時すぎ、オレンジ色の物体が急に接近。多少タ円形にみえた。図d

⑩11時すぎ、左側に赤い光をもつ白色光から、その赤い光にむかって白い尾が出た。図e

他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑪他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑫他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑬他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑭他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑮他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑯他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑰他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑱他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑲他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

⑳他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉑他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉒他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉓他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉔他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉕他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉖他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉗他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉘他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉙他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉚他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉛他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

㉜他に一人(同級生)が同時目撃。(秋田県能代市養蚕13の1)

凡例

①氏名	年齢	職業・学校名
②目撃日時		
③目撃地点		
④天候		
⑤目撃継続時間		
⑥同時目撃者		
⑦観測機器・方法		
⑧物体について		
⑨飛行状態その他		
内は目撃者の住所		

①桜井あつ子(18)

宮城県第二女子高校三年

②昭和47年2月5日(日)

午後4時ごろ(目撃当時一年)

③仙台市街地中心部(国分町)

④晴れ

⑤6、7秒

⑥なし

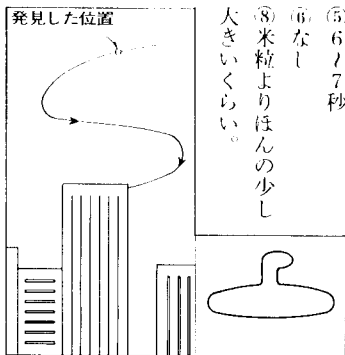
⑦米粒よりほんの少し大きいくらい。

⑧発見した位置

⑨色：白、輝いてはいなかった。

⑩仰角：およそ45度、30度。西南西の方角。飛行中の色・光度・形態の変化なし。推定高度：一・五km内外。

(仙台市原町二軒茶屋南40の2)



①佐藤重弥(15)

山形県立酒田商業高校二年

②中学一年のとき

午後8時30分頃

③自宅

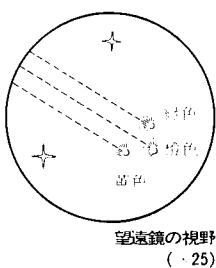
④快晴

⑤1分少々

⑥エイコー製5cm屈折(卓上型)・大地上両用の望遠鏡(正立像)。

⑦南の方にある木の上から、見られないものがでてきた。初めは人工衛星かな?としばらく見とれてしまい、あわてて望遠鏡を向けようとした時は北の木々の中に隠れてしまった。おし

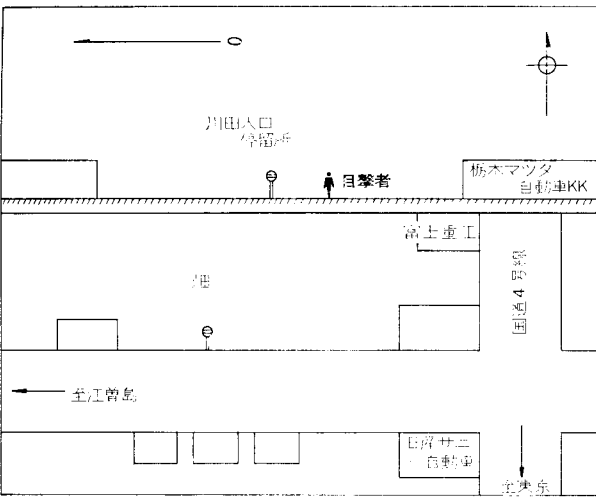
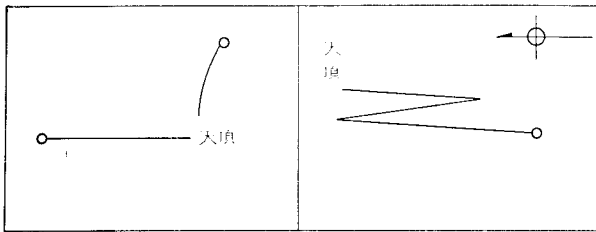
かった"と思っていたら、すぐさまの物体が、北の木々から出てきて同じコースをもどっていった。すぐ望遠鏡をむけてみたところ、3つのスペクトルに似た光がみえるだけ、無音でどうやら物体は1つだけのようにだった。(山形県酒田市大字米島字上草田88)



* * *

①山内幸裕(18)

②昭和47年11月5日

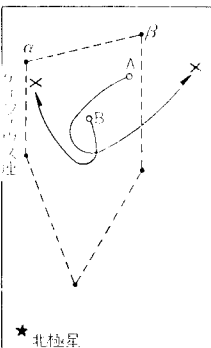
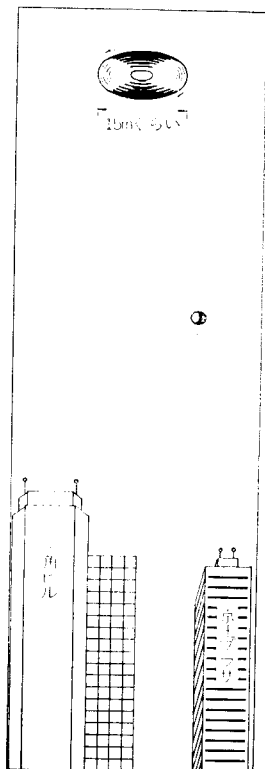


午後5時45分
①晴
⑤15分
星を見ていたところ、1等星よりも少し大きな天頂の星がゆっくりとした速さで進んでいた。天頂から南に向かい、また南から北へ、天頂までくるとまた南に向かっていき、消えた。天頂のところでは白かったが、進むにつれてオレンジ色に変化。それを見ていた隣りでサーッと流れたことから、流星でないことは確か。

②昭和48年1月6日
午後5時20分
①岡 正行(23)
宇都宮気象台勤務
②昭和48年10月16日
午前8時40分ごろ
③宇都宮市西ノ原町川田入口(栃木県の中央部に位置し標高二二〇m)
④晴
⑤30分間に2回目撃
一つは天頂から北へ、もう一つは天頂あたりから東へ移動。
(i) (ii)ともオレンジ色から白色に変化。
(福島市荒井字地蔵原乙30 県農業短大北斗寮5号室)



④快晴
⑤約2分間
⑥なし
⑦目視
⑧(左右とも一・五)
⑨タ円形、黒色
何の気なしに北の空をみると目が、動く黒い物体を指摘した。UFOは西遊しはじめ、飛行中の形態の変化はなし。物体の色は黒色だが、時々、中心部や右端部が点滅するように銀白色に光る。ゆっくりした速度で、水平飛行をみえなくなるまで続けた。目で追っていた限りでは、加速や減速の感はなかった。終始、無音。
付近になんらかの雲があれば、およその高度をつかめたのだが、推定高度はそんなに高いとは思わなかった。
(宇都宮市西原町五二二の13)
①松岡正憲(20)
②昭和48年8月15日
午後9時〜9時30分の間
③東京都渋谷区本町1-9-17



④晴
⑤2分
⑦30倍の双眼鏡(テルスター)
⑧京王プラザビルと三角ビルの間の中間の北の空。京王プラザホテルの屋上の赤ランプがついている上空に、オレンジ色から緑色にかわるキラキラと輝くUFOを発見。角度45度で高度五〇〇mくらい。形はレコードのよう。
(〒151 東京都渋谷区本町1-9-17 洗旗荘二〇二)
①大塚利一(20) 会社員
②昭和48年10月26日
午後6時20分
③自宅
④晴れ

⑤約15秒

⑧ケフェウス座、 μ ガーンネット星を見ようと外に出て、北の空にあるケフェウス座を見た。するとその五角形の中で動くものがある。初め流星かなと思ったが、それはなかなか消えないばかりか回転を始め、さらにもう1機が同じように円を描いている。白色の3等星くらいの明るさの物体。やがてその2機は別々の方向に飛び消えた。

(〒379-01 安中市野殿四〇九)

* * *

ラボックス光体群と同様なUFO

①小野春彦(18)

予備校生

②昭和48年10月2日

21時28分

③自宅の庭

④快晴

⑤約50秒

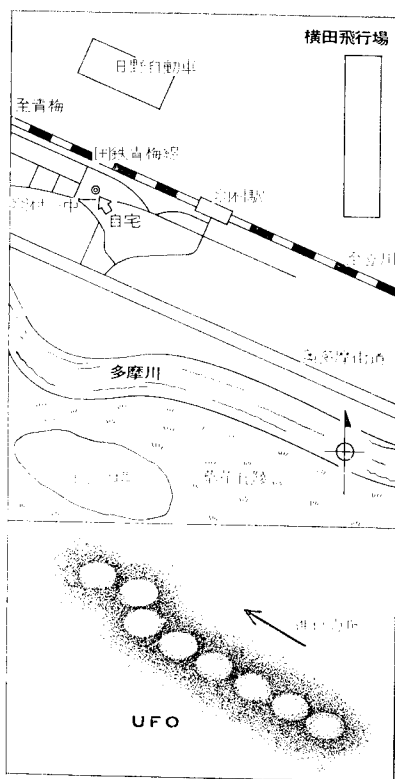
⑥なし

⑦肉眼



⑧私は過去6年間、天文を趣味とし天体観測を行ってきたので、天文関係の一応の知識は十分あるつもりです。夜の観測にもなれています。ですから惑星、人工衛星、流星、火球、飛行機、雲、サーチライトその他私の知る限りのあるゆる天文現象にも属さないことは確実に証明できます。

ひさしぶりによく晴れたので、いつ



ものごとく星を見に外へ出ました。透明度をみるため小熊座の星を探していたのです。その時、北極星のすぐ東のところに何やら黒いモヤのようなものが目にはいったのです。それはだんだん接近すると光ってみえ、さらには個々に分解し、モヤッとした8つの光が一列に並んでフワフワとただよってやってくるのです。人工衛星や飛行機に見られるような直線的な機械的な動きでなく、何かにあやつられているようなフワフワした動きでしたが、人工衛星よりはるかに速い。

8つは縦に一列に並んで、前から2番目のモノひとつだけが、ややずれて位置していました。各々の位置関係は常に一定でなく、ゆっくりフワフワと個々が勝手に左右に揺れていました。列は縦方向にも伸びたり縮んだりして

も、個々の順番は変わらなかったようです。

光は、ボンヤリしていて輪郭がはっきりつかめませんがタ円形のように、中心部はかなり明るく2等級かそれ以上です。色ははっきりしませんがクリム色とっていい、星と同じような色でした。フォースフィールドといえるかわかりませんが、列全体が何かモヤみたいなものでおわれている感じがしました。音はもちろん全く聞こえません。列の長さは星の間隔から推定して約10度、個々の光は1度未満でしょう。光は天頂や西よりを通過し、南へむかって行きたいに減光すると、木星とフォーマルハウトの間あたりで、再び黒いモヤモヤとなって見えなくなっていました。

すぐにUFO研究をしている友だちに電話をして、1時間ほど2人で空を

見ていましたが、二度と現われませんでした。

出現高度と消失高度を星の位置から35度とし、飛行高度を20kmと推定して速度を算出してみますと、

$$\begin{aligned} & \text{A} \quad t=50\text{sec} \quad \text{B} \\ & \quad \quad \quad 55^\circ \quad 20\text{km} \quad 35^\circ \\ & \text{AB} = 2 \times 20 \tan 55^\circ = 1.5/\text{km} \\ & \therefore V = \frac{57}{50} \approx 1.14\text{km/s} \\ & 1.14 \times 60 \times 60 \approx 4000\text{km/h} \end{aligned}$$

(〒111 東京都西多摩郡羽村町羽54)

* * *

①岡田深雪(28)

スナック経営者

②昭和44年

午後9時すぎ

③京都市伏見区桃

山三河(山の上

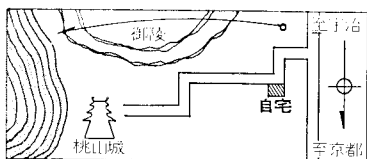
の方で伏見桃山

城の近く。3年

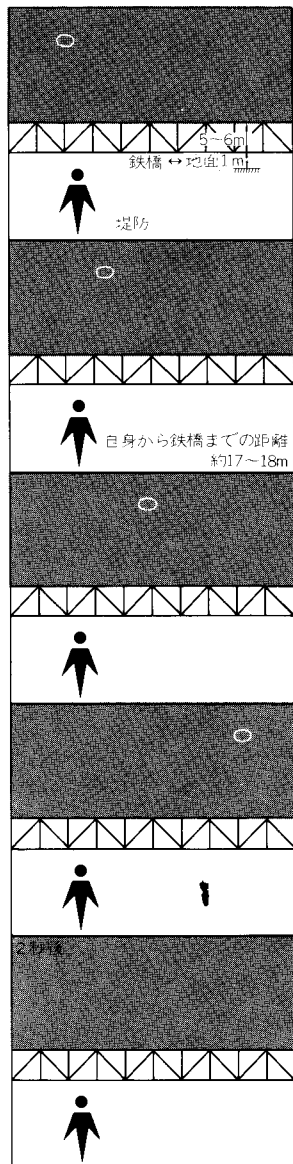
前に居住)

④晴

⑤10/20分間



第2号に掲載された京都市伏見の瀬野広様の報告を拝読しました。私もちょうど、一九六九年ごろ、四季はちょっと覚えておりませんが、夜9時ごろ南の空の星を眺めておりましたところ2等星くらいのUFO(火星よりやや白い)が西から東の方にゆっくり(視覚



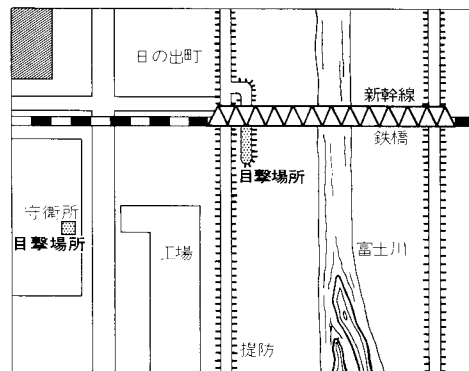
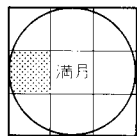
- ① 渡辺幸子 (19)
県立厚生保育専門学校歯科一年
- ② 9月2日午後7時15分

* * *

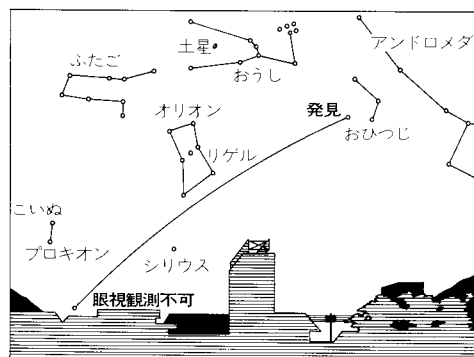
(京都市左京区岡崎天日町61 ヴィラ
岡崎一〇一号)

速度は飛行機程度)と動いているので
す。一瞬、飛行機かしらと思ひ、耳を
すませて聞きましたが、まったく爆音
がありません。5分くらい何かしらと
見とれていましたが無回みなおしても
星が動いているようにしか思えませ
ので、すぐに京都花山天文台に電話し
て尋ねたのですが、人工衛星ではない
かとの事。しかし、いくら大きな人工
衛星でも2等星以上の光はないはずと
思いもう一度見にゆきますと、やはり
ゆっくり東行しています。そのうち山
の近くまできて急に消えてしまったの
で、雲があるのかとよく観察したので
すが、星がキラキラ輝いていました。
コズモを読んで、それはやはりUFO
と確信しました。

- ③ 静岡県庵原郡富士川町の河原
(富士川沿い)
- ④ とつぷり口が暮れていたとはいいが
たいが、西の山の端は少し赤く東の空
はもう暗く星が2/3個あり雲がまだ
らであった。
- ⑤ 約2秒
- ⑥ 大きな正方形
形の内接円に満



- 月をあわせて9等分した1個ぐらいの
大きな丸い光る玉
- 色 その時出ていた星と同じ様な色
光り方ト一等星の4/5個分ぐらい
- ⑨ 仰角45度 方向 北ノ北東
飛行中の形態・色・光度の変化なし
推定高度ジェット機が飛ぶ程度。
どんよりした雲よりは確実に低い。
北から北東へ、自分から見えて30度く
らい一直線に飛んだ。気がついた時、
飛んでいるのが見え2秒ぐらい後、瞬
間に消えた。その場所にいた十数人の
半数が目撃し、「流れ星」ということ
におちついたが、流れ星とすると生ま
れてから最大の流れ星を見たことになる。
音は全然なかった。
- 速さが速かったので光が尾をひいて
いるように見えたが、その物体自身は
尾がないただの光る玉だった。
- (静岡県庵原郡蒲原町新栄町四八六〇
—18—)



- ① 木口十友 岡山日大高校三年
- ② 昭和48年1月21日20時
- ③ 自宅の屋根上
- ④ 晴
- ⑤ 約5/6秒
- ⑥ 双眼鏡ビクセン (8×30)
- ⑦ 点像。色青っぽい感じで恒星のよ
うにキラキラ輝いていなかった。
- ⑧ 仰角 約60度
- ⑨ 一等星ぐらい (二〇.1等星の上星より
明るかった)
- 上星観測 (60mm屈折) 中、偶然発見
した。遠ざかるにつれ光度が下がり、
眼視観測不可能になった。すぐ双眼鏡
で見たが確認できなかった。色も、遠
ざかるにつれ白っぽくなっていった。
- (〒10 倉敷市中央二七〇 30)

地と考えている

3 単なる途中下車である

1 は、ここ20/30年間のUFOの動向をみれば、おおよそ、その推測がつかのではありませんか？
コズモ、号には、それを暗示させる記事が多いです。2 は、地球の過去の先進文明と後進地域の関係を考えて下さい。多少の違いはあっても、似たようなバリエーションが生まれる可能性はつねにありま

す。3 は、アメリカ大陸ではどちらかといえば大陸や宇宙人との出会いが多いが、日本ではただ通過するだけで、編隊で飛行していたものや人工衛星にフロロくついていた例も含めて、私共だいたいUFOを拝見しましたが、着陸もしくはその体勢にはいったものすら見たことがありません。最後にUFOの動力と推定されるものから判断すれば、資源(地下資源)のことはあまり理由になりそうもないです。

(千〇七) 盛岡市名須川町二九 (〇)

以上、私的な推測ではなはだ勝手な推測ですが何かのお役にたてたでしょうか。
ところで、一度、個人的なおたよりで、じっくり意見を述べあってみませんか。

工藤英二
コズモ、これが、全国初のUFO専門誌であるとはとても思えない充実した内容ですが、私なりに幾つか気付いたことを述べさせていただきます。と思います。

①グラフが多く、高級な用紙を使っているのは、これまでこの種の本にありがちであったウサン臭い感じを除くために、たいへん良いと思います。これからは続けてください。
②海外のものの転載が多いようです。神々の戦車など貴重なものもありますが、もう少し国内のことと扱ってほらえないでしょうか。山形でのUFO騒ぎも肝心の写真が不掲載だし、この夏、北海道でのUFO事件など毎日新聞のカメラマンが写真を撮り全国版に掲載されたのに、一行も触れられていず、気になりました。

3 第59ページの「アトランチス遺跡発見」の記事ですが、これは既にインチキであったことが判明しているのでは？

1 読者の投稿も多いようです。なかには興味深いものもありますが、「夕暮れ時、まっすぐの軌道で飛んでいた光る物体」などとなると、どう見ても人工衛星のみまかえじやないかと思えるのです。できるだけ投稿者の年齢も併載していただきたいと思ひます。

信田 裕

(千〇七) 北海道稚内市宝来五九(五)

私は、UFO存在絶対肯定者である

なぜ絶対か、それは人間自身がまきもくなく宇宙の最小単位(いわゆるマイクロコスモス)であるからである。それら量高家の宇宙の芸術品の最小単位でもある。また究極的にいえば、物理学でいう電子か分子であらう。

なぜそのようなことが解明されたか、それはつい最近、ソ連で人間には後光と称して生体プラズマというものが身体の外に存在すると、追求したからである。この論法でいけば、人間自身、一個、個のさまたま星であるといふことであらう。おくれた星(人間)もあれば、高級な星(人間)もある。よって倍率をあげれば、まわりの星には遠く人間ということになり、地球自体が一人の巨大人間とみることでできる。これは、あくまでも論法を進めてゆく上での便宜上の対比に過ぎない。

ならば、夜空にみえる惑星その他すべて地球人間からみれば他星ということになり、他星が他人ならば多少の懸きは違いますが、地球とだいたい同じであらう。人間(星)にはいろいろあるように、性格は違いますが、進歩しているか、おくられているかの違いであらう。

ゆえに、いくらでも進歩した惑星は存在する。そして貴誌を賑わしている円盤の製作などお茶のいという強力文明国はいくらでもあるだろうと想像される。

また興味あることに、円盤の発光体はまさに人間の魂そのものに相似している。イコル神の存在に近いというものであり、これが宇宙の神の法則であらう。そして最後に、地球があまりにもおくられているという証しであらう。

また「地球」と書くようでは地動説と何ら変わりはなく、自分の国が、番すくれていると思いがっている唯我独尊の考えと何ら変らない。旧態依然の愚のこころであらう。おくられているケースを、以上は、私の誇大妄想でもなんでもなく、私の命にかけても絶対確信のあるもので、少数の未来の識者の共鳴を得れば幸いと思ひ、右の文を託したさせていただきます。

(長野市 未来をルックする男)

二号「読者の声」の欄に掲載していただいたのですが、一「所在地のあやまりがありました。ツングースの怪事件」のことを書いたのですが、中での地名がまちがっておりました。

「シベリア中部ボドカメンナヤ・ツングースカ川流域」が正しい地名でした。どうも申しわけございません。

西井寛巳 (大阪市)

世紀の謎 空飛ぶ円盤を究明した最新刊!

空飛ぶ円盤と宇宙人

黒沼 健著

定価 九五〇円

謎と神秘に包まれた円盤の存在とその出発地までも実証する数多の驚異的事実を紹介し、ついで古代科学と円盤のかかりあいを遺跡、文献等から興味深く論証する。現代の科学的合理主義のみでは解明できない神秘領域にまで及んだ異色の好著。

空飛ぶ円盤とアダムスキ
久保田八郎編 九五〇円

空飛ぶ円盤の跳梁
高梨純一著 八五〇円

空飛ぶ円盤のすべて
平野威馬雄編著 八〇〇円

空飛ぶ円盤実在の証拠
高梨純一著 八〇〇円

アポロと空飛ぶ円盤
平野威馬雄・荒井欣一著 八〇〇円

空飛ぶ円盤の真相
G・アダムスキ久保田八郎 八〇〇円

空飛ぶ円盤は実在する
A・ミンデル・田辺良之助訳 八〇〇円

これが空飛ぶ円盤だ
平野威馬雄編 八〇〇円

空飛ぶ円盤実見記
G・アダムスキ・D・レスリー 八〇〇円

それでも円盤は飛ぶ
平野威馬雄編 八〇〇円

空飛ぶ円盤同乗記
G・アダムスキ久保田八郎 八〇〇円

火星からの空飛ぶ円盤
C・アリンガム著 七〇〇円

空飛ぶ円盤の秘密
T・ベラム・久保田八郎 七〇〇円

空飛ぶ円盤ミステリ
G・バーカー・平野威馬雄訳 八〇〇円

空飛ぶ円盤シリーズ

空飛ぶ円盤騒ぎの発端

高梨純一著 九〇〇円

空飛ぶ円盤研究がどのように始まり、展開されてきたか、その基礎知識として、アーノルドの目撃からワシントン上空の円盤の乱舞までの重要事項を把握せしめる絶好の手引き。 近刊

ハヤカワ・ノンフィクション

アイザック・アシモフ

●最新刊 《空想自然科学入門》

わが惑星、そは汝のもの 山高昭詔／¥980

〈好評既刊〉

空想天文学入門 草下英明訳／¥330
地球から宇宙へ 山高昭詔／¥330
生命と非生命のあいだ 山高昭詔／¥430
時間と宇宙について 山高昭詔／¥340

●自然科学書シリーズ

しかもそれは起った フランク・エドワーズ 斉藤守弘訳／¥290

恐竜の発見 エドウィン・H・コルバート 小島・亀山訳／¥880

ソロモンの指環 コンラート・ローレンツ 日高敏隆訳／¥530

虫の惑星 ハワード・E・エヴァンス 日高敏隆訳／¥1300

巨大機械 ロベルト・ユンク／松井卷之助訳／¥760

SFロボット学入門 石原藤夫／¥500

未来のプロファイル アーサー・C・クラーク 福島・川村訳／¥380

第二創世記 アルバート・ローゼンフェルト 卷 正平訳／¥780

東京都千代田区神田多町2の2
振替 東京47799

早川書房

●UFO目撃報告と写真を募集

UFO（未確認飛行物体）の目撃報告と写真を募集します。左に掲げた各項目を参考にして、なるべく正確な詳細な報告をお送り下さい。掲載された分には薄謝を呈します。写真の場合はできればネガもいっしょにお送り下さい。ただし本誌に掲載後に偽作であることが判明してトラブルが生じた場合、本誌は一切の責任を負いませんので、その点をあらかじめご了承下さい。その他、各種新聞雑誌などに掲載されたUFO関係の記事・写真類の切抜きも歓迎します。

●UFO目撃報告用参考事項

(1)目撃者―住所氏名（できれば本人の写真添える）、年令、職業（学生の方は学校名・学年）、電話番号。（匿名を希望の場合は本名明記の上、その旨を付記すること）同時目撃者の有無、その他。

(2)目撃場所―地名、付近略図、時刻、天候、目撃継続時間、その他。

(3)物体―飛行物体の形（スケッチを添えること）、大きさ、色、その他。

(4)飛行状態―仰角、方向、飛行中の形態の変化、飛行中の色の変化、飛行中の光度の変化、推定速度及び高度、その他。

(5)観測機器―使用の場合はその機器名、性能その他を付記する。

(6)撮影用具―カメラを使用の場合はカメラ名、使用フィルム、レンズ名、絞り、シャッタースピードその他のデータを付記する。

送り先 東京都台東区秋葉原三の三、

コスモ出版社UFO資料調査部 アキバビル

●目撃報告とは別に、「読者の声」欄を設けています。本誌に対する感想、UFO問題に関する所感等をふるってご投稿下さい。宛先は「コスモ出版社、読者の声係」

At long last, welcome, Dear

◎全国の読者の皆様、お元気ですか。日頃のご声援に厚くお礼を申し上げます。おかげさまで発行部数も大巾に伸びています。

◎本号は南山宏先生ご病気のために、「円盤の中に連れこまれた男」は休載しましたが、高名なUFO研究家斎藤守弘先生と橋本健先生のすばらしい記事を掲載しました。科学派の方々には好読物と存じます。

◎多数の読者の方々のご要望にこたえて、ワンダフルな大型版UFO写真集を別冊で刊行の予定です。ご期待下さい。（発行日・定価は未定）

◎世情騒然たるなかに独りゆうゆうと大空をながめ、果てしない宇宙の彼方に思いを馳せて天界の神秘に驚異を感じる気宇広大な人々―それがコスモの読者でしようか。

◎感想、意見、体験記等を遠慮なくお寄せ下さい。（K）

UFOと宇宙 一九七四年二月号

コスモ (第四号)

編集発行人 久保田八郎
発行所 株式会社 コスモ出版社
〒100 東京都台東区秋葉原三の三

電話(二五五)八七四四、七〇一九
振替・東京1119478
印刷所 大日本印刷株式会社

昭和四十九年二月一日発行
(隔月刊・奇数月・十日発売)

定価三三〇円・送料八五円
年きめ購読料・送料共二二〇〇円
(地方の書店で入手できない場合は本社へ直接ご注文下さい)

●本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます。
●海外の記事はすべて翻訳転載権取得済

KEEP WATCH TONIGHT! UFOをとらえよう

最適な双眼鏡ASAHI PENTAX

今まで数々のハプニングを正確にキャッチしてきました。
カメラと同じ技術レベルで、ペンタックスが責任をもって作った最高級
双眼鏡。視野も広く、明るく、レンズは抜群。世界中で愛用されていま
す。《カタログ》と《双眼鏡のすべて》(B 5版31ページ)をご希望の方
は切手200円同封のうえ下記住所へお申し込みください。



双眼鏡の楽しさ

財団法人 日本望遠鏡協会・技術協会
技術研究部長 太田牧之助

レジャーを倍に楽しめる双眼鏡が静かなフ
ームとなっています。カメラと違って、その端
でグーンと遠くを這ずける双眼鏡は、今まで
知らなかった世界をあなたに教えてくれるて
しょう。双眼鏡の登場や生誕、状況もさまざま
ですが、私が検査したものでも、倍率や解
像力に難があったり、中には目を痛めるもの
やアフターサービスのないものが、数多
くありました。お求めのときは信用ある有名
ブランドをお選びになるのがよいでしょう。

12倍35^{ミリ}Bワイド
優れた設計のワイド
で小型の最新型

¥17,000

縦116・横170・重635g

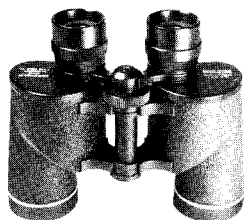
全商品保証書付、送料当社負担
高級ケース付

ASAHI PENTAX双眼鏡

ペンタックス 双眼鏡販売(株) K係
〒173 東京都板橋区大山金井町38の5 ☎973-3621

通信販売のお知らせ

- 商品をお急ぎの方は、現金をご送金くださ
い。即日発送いたします。
ハガキまたは電話でお求めの場合は、代引
郵便(代金引換え)でお送りします。
- メーカーからユーザーへ直接お届けする新
システムです。その他多くの機種を取揃え
ています。

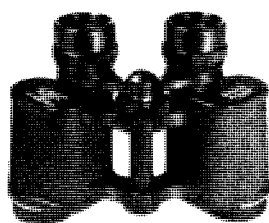


7 倍35^{ミリ}B

使い易くて丈夫なス
タンド型

¥12,000

縦130・横170・重690g



8 倍30^{ミリ}Z

すべての観測、望遠
用の万能本格派

¥9,500

縦115・横160・重540g



ヤマモト

60mm 屈折径緯台

MODEL A-7

定 価 26,000円

荷造送料 1,500円



新発売

ヤマモトの天体望遠鏡は海外で絶賛を博しております。

●光学的性能

有効径	60mm
焦点距離	700mm
集光力	73倍
分離能	2.0秒
極限等級	10.7等

●付属品

接眼鏡	(倍率)
SR-5mm	140倍 (280倍)
R-20mm	35倍 (70倍)
〔 () 内はバーローレンズ使用〕	
2倍バーローレンズ	
5倍ファインダー	
天頂プリズム	
地上用正立プリズム	
サンガラス	

●格納箱

発泡スチロール入り木箱

メーカーからユーザーへ！

通信販売のお知らせ！

●上記の他各種あります。詳しくは115円切手同封の上カタログをC係へ御請求下さい。

株式会社 山本製作所

東京都板橋区大原町 5-3
電話 966-2408 郵便番号 174